

と最う一度風俗を見ながら、
 「姉さんか——お前さん、御存じはねえだらうけれども、絲の切れた奴唄と言ふ形で電信柱に引掛つて、おもしろくもねえ、雲を見て引返す處でね。組合の印ものを背負つてるだけに、半間さ加減が堪りません。……寒い時分だし、用があつてお歩行きなさる。分けても當節の婦の方にや、馬籠がお邪連に成りさうだから、肩身を狭く通る處を、「兄さん。」とお呼びなすつた。

此奴が消口を取つた時だと、「おう！」でも、「やい！」でも構はねえ。……
 と其の、おう！ だの、やい！ だのが、聲の發奮で耳立つて響いたので、兩側の家から人が出た。魚屋も、炭屋も出た。……尤も通りがりの連中は、端から取巻いてゐんで居るのである。

慌てたものは八百屋お七が年増に成つて辻に立つたと思つたらう。通魔がするやうに、ツ、と舞戻つた纏は、横町に木戸を架いて、ハタと放火犯を埋留めたやうに見えたから。

「親方さんや、もし魚屋の親方さんや。」

と、もの利かな細い聲して、魚定を呼ぶものは、姓は關口、小兵衛と言ふ、伊勢の桑名から出た指物屋で、傍ら、ちよほりと店前へ古道具のがらくたを並べて居る。……ほとりと肥つた顔に薄痘痕のある、眉の薄い、ちよんほり口で、目のしよほりとした、頭は霜さへ、ほしやくと消えかゝる、七十近いお爺さん——軒の取れためりやすの襦衣の胸を、くなく開けた上へ、古ほけた印半纏、小倉の帯をちよんと結んだ、妙な風態、半股引の瘦腰で、腰は曲らないが、妻さまじみた内端な足取、ちよこくと軒へ出た。膝の其の半股引の木屑を拂きながら、匏を片手に、其處で隣りの魚定に言つたのである。

「なあ、貴方、口をきいてあけなされ、なあ、親方さん。」

「やあ、お爺さん。」

と顔を引込めて額で視た。此の魚屋が面白い、近眼の目を掛けて居る。金齒で笑つて、

「間違ひぢやあないやうですぜ。」

「お、間違ひではないかいな。そんなら、鳶どのはお出入さきで、あの奥さんに挨拶をして居るかな。」

「然ればね。」

「途中で御祝儀でも出たかいな。」

「とも見えないがね、何かね、風采つきが何だか、ありや何處かの奥さんかね、お爺さん。」

「はあ。」

と首筋を長く、撫肩で伸上つて、

「一寸、知つとります、委しうもないけどな。」

「消防夫は、親方、天王様横町の、ありや五十公てんです。」

と、魚屋の小僧が小戻して御注進。

「突掛つてるんぢやねえだらう。」

「え、そんな兄ぢやあねえんですよ。」

其の纏持は、さて、此方で——
 「ねえ、お前さん、おう！ でも、やい！ でも、此方あ清く御挨拶をするんだけど、劍尖が劍尖だもんだから髪に旋毛が曲つたんだ、お恥しいが、ひがみだね。第一今時、此方人等こんな、やくざに、同町内にして、顔馴染もねえ、お前さんが、口を利用しておこなさる例がねえ。からツきし見當はつかねえし、然もお前さん、意氣地なく情氣てる處だ……それもね、「御苦勞よ。」とか何とか言ひなすつたんだと、チョツ餘計なお世話だと思ふまでも、ふんなり、へいな

り、遺放にも挨拶をして通るんでしたが、うぬが手で消さねえ火を、(火事は消えたね。)と言ひなすつたもんだから。」

「あゝ、悪かつたわね、それが氣に障つたんですか。」

「處がね。」

「いゝえ、でも、兄さん方は、火がりをするんだもの。生命がけぢやありませんか。(御苦勞様)なんか通越し了つてるんだもの。……坂を上つた俵屋さんぢやあなし、暢氣に(御苦勞様)なんか言つてられやしないんだもの。」

「至極……」

と仰向いて、ト大な手甲で、拵つ如く膝を擦つた。

「難有え。——然うか、(御苦勞)なんか大木戸を通越してる、生命がけの仕事ですか。……お前さん、然う思つて居ておくんないですかね。」

「えゝ、思つて居ますとも。」

「はじめでだ……涙が出るほど嬉しいや。」

馬籠も籠に、しつとりと、

「それでなくつてさへ、あつと氣がついて、お詫をしに引返したんだ。成程、焼死んだ者ぢやあるめえし、火事の消えねえうちに、煙の方へ尻を向けて、横町をのそく歩行く纏持つてのがあるもんぢやあねえ。(消えましたね。)と聞きなすつたのは、當前だと氣が着いたもんですからね。——承りや、まだ其の上に、生命がけだと思つておくんなさるんだ。堪らねえ。……お顔は屹と忘れません。」

「可厭ねえ。」

「濟ねえけれど。」

「あれさ、堪忍して頂戴よ。」

「何だ。」

「どうしたい。」

と、蕎麥屋を出たのが見附から見通しの、こゝろを凌いで立つた纏のもとへ、ばらりと断つけた。

「やあ、兄弟、皆揃つて、其の奥さんに一寸、御挨拶を申してくんねえ——仔細はあとで言はあ、慥う、きりくると纏を上げつゝ、

「媽々を賣つても一升願るぜ。」

四

「唯今。」

と、抜裏の露地から、腰障子を開けながら、聲を掛けて、其の、指物屋兼ねたり古道具屋の小兵衛さんの臺所へ入つた湯歸りの若い女は、潰島田に横櫛をさして、ほつれ毛も濡々と、色つほい様子が堅氣でない。

「いゝお湯でしたわ。」

すぐに茶の間へ……

臺所の掛棹へ手拭を割いて来た、……此の女の柄にしては借りものらしい、蓋のとれたびしやんこの石鹼箱を、長火鉢の横手の鼠入らすの上へコットン。

「すいて居たのよ……思つたよりか。」

「うゝ。」

とばかりで、小兵衛さんの返事のはすまないことは、打ちまけたあとの糠袋のやうで、しかもびしょくると語聲。煎餅蒲團へ中腰で、いきなり取らうとした女持の煙管を其のまゝにして、密と立つて、誂へたやうに建附けの悪い障子

の透間から店を覗くと、小兵衛さんが肩も背も丸く成つて、袂を斜邊に差向ひで、——悪く脇の下を擦つたら忽ち煙突に化けて煤を噴出しさうな、古物の備前徳利が一寸楯に成つて——姿が、何か投入の花かと思える、店前にトンと腰を掛けた婦人の、きりとした細面を慙う透すと……

「あら、梢姉さん。」

と言ふのも——がしく、軋んで、エ、焦つたい、……障子を開けるのも諸ともで、

「あら、姉さん。」

と、木屑だらけの古畳へ稜うつくしくひらりと出る。

「まあ。」

と、きれの好い臍を返して、其處に小兵衛の肩越に、うつかりしたやうに立つた濃島田を優しく視た銀杏返は、相違なく、たつた今つい其處で、纏と、もに、消防夫の群に別れた細君であつた。

二人三人、まだ離れたまゝ、通行人が立つて覗く……先刻からの人だからで、やゝ氣疲れがしたらしい、顔色も、肩の様子も、一息吻としたやうに、軽く胸に手を置いて、衣紋を壓へて居たのであつたが……聲と、もに莞爾して、

「……胸算さん、何うしたのよ。」

と、かけ構ひのない打明けた調子で言つて、ハツと心着いたやうに、瞬をした。

「御免なさいよ……失禮ね。」

と、今度は徐に微笑んだのである。

「あら、姉さん。」

と、其の胸算と呼ばれたのは、たわいもなく膝をついて、

「些とも失禮な事なんかありませんわ、こゝは私の内なんですもの。」

しかし、親許にしろ、身うちにしろ、いゝ人の宿にしろ、其の(内)ゆゑに、此方は「失禮ね。」を言つたのである。

……實は、此の梢が、以前下谷に出て居た時、同じ何某家の分だとか、七三だとか、丸抱などおしなべて五人居た朋輩

たちに客がつけたり、自分同志が戯れたり、互に呼び呼ばれた渾名があつた。一人は、だが、齒ぎしりをすると言ふ入

組んだ譯ではない、簡単に瘦せたので……一人がふつくりとして目の圓い、女優型の妓で、それが、おぼる。指環の珠

に擬へた。一人、襦も帯も、起居にするくと引摺つて、だらしはないが、罪のない、言ふことも、することも、些とも

現代に通じないから、江戸を通に瀕つて、即ち元祿。更にお雛妓で、めりけんの狸と言ふのが居た。

中の一人で、曰く胸算用の胸算が、此の小兵衛さんの娘か、姪か、其である。

狸も、めりけんと意を言外に含ませて置けば仔細ない。おぼる、元祿、無論、結構、鯛と雖も、先づもつて差支へぬ、

が、ひとり胸算に到つては、こんな場所、一層、其の(内)に於ては、分けて憚るべきを、馴れた口癖でうっかり鯨舌つ

て、所謂梢姉さんは口よりも頬をすほめて、てれたのであつた。

が、唯人のいゝ小兵衛さんは、二人が別懇な其の容子に、割膝を、べた／＼と叩くと、口を大きく開けて、目を細くして、

「は、は。」と驚いたやうな、嬉しいやうな、どっち道、間の抜けた顔色で、

「ま、ま、彼方へ——奥へな……はて、これはしたり……。」

五

「お世話に成つたの、御最戻だのツて、まあ、極りが悪いぢやありませんか。」

火鉢の前の差向ひから、梢は一寸肩をくねつて、店の小兵衛を差覗いて、

「小父さん……。」

「は、は。」

と仕事場から、又鼻の下を伸して私笑とする。

「お光さんの眞個の叔父さんでおいでなさいますさうですええ。」

「は、は、や最うほんの間に合せのな、ほ、ほ、血筋にや違ひないのぢやけどな、叔父がひのない處は續飯とまでは参さまへんて。麩のりで木に竹をついだやうな、まに合せものでな、は、此の夏まで達者で居りました叔母分の婆々の方がな、私よりは太と増で、其の娘の相談相手にも成りましたがな。叔父は叔父でも、此の親身の方は、一向に役に立たずでござりますよ。」

「でも、どんなにかねえ、恙うやつて逢ひにおいで、光ちゃんも叔父さん、嘘ぞ嬉しいでせうね。」

「や、も、嬉しいと言つては、はい、意見も叱言も言はれまへんが、男にも女にも、私にや子と云うてはござりませすな、偶に其の娘の顔を見るのが何より樂みでござりますよ。ではござりませすな時々早や、意見と叱言のたねを蒔くには困ります。情愛もござりますが、次手にな、浮氣も少々ござりまして……。」

叔父さんは、さては胸算の渾名を御存じない。浮氣と見えても、よく身の上を考へて居るのである。

今は赤坂で三津代と言ふよし、お光は、一寸前髪で俯向いて、其の化粧した咽喉許を、小さな呼吸でフツと吹いた、呼吸を其のまゝ。スウと吸ひながら、顔を上げて莞爾した、何の禁厭だか些とも分らぬ。

「や、これ。」

と小兵衛さんは、小さな鐵槌を持つた手を肩と一所に伸上つて、

「……意見、叱言と言ふ口の下から、これ、其の障子を閉めぬかいな。その、吹通して、あなた——奥さんがお寒かろ、おぬしの髪容をも見たが可い。頭の黒いものが覗くぞよ。」

と町の向側を下目で睨んで、鐵槌を又コツ／＼コツ、恰も可し、鼠入らずの手入をして居る。

「もう直きにの、使に行つた嘉助も歸る。」

と、弟子小僧の名を言つた。が、目まで御馳走を吞込ませて、

「御緩りとお願ひ申して、丁ど幸ひ、おぬしも、とつくり御相談を願ふが可いぞい。」

「あゝ、眞個よ、姉さん、何うぞ。——叔父さん御免なさい。」

とつい立つて、障子を占めようとする處を……。

「あゝ、一寸……私もね、少し小父さんに御相談したいことがあるんですがね。」

「あの叔父さん、姉さんが」と、眞中に居て氣早に取次ぐ。

其のお光の聲を、膝頭で挟むやうに、脚に毛のない小兵衛さん、柔に早や中腰に立掛けて、

「何か手前に御相談と……は、それは……。」

「まあ、ですが、お仕事のお邪魔ぢやありませんか。」

「いえ、や最う、何のあなた。……こんな、家でも我が家であつて見ますれば、お取持をいたしますのに、ふやけた煎餅の一枚でも、姪どもよりは、手前の方が在處を存じて居りますので、……疾からお相手と存じましたなれど、老人は御迷惑、と其のゑにな、もし、は、は、は、御遠慮を申したのでござりますよ。」

といひ、梢がさし置いた買ものゝ手提籠を、恭しく兩手で提けて、

「御免やす。」

と、更つて、つるりと其處へ膝小僧。お光が蒲團を撥ねて這つて譲らうとする火鉢の前を、招くやうな手で壓へて、

「も、も、頓と最う。……動かすと其のまゝにな。」

「可厭ですわ……叔父さん。」

と梢が引手繰るやうに取つた、淺間で、居ながら手は届く……臺所へ掻遣るには仔細ない。トしなやかな手で邪険に押遣られながら、手提は摺つて、ごそ／＼と牛蒡と人參の尾をちらりと出す。

襟を扱いて、肩を見て、
「光ちゃん、此方も尻尾を見せたのね。」

六

「お佛事でござりますかな。」

と小兵衛は、梢の奥さんが、尾を見せたと言ふ人參牛蒡を、後光の方へ引取つた。が、其處へお光が汲んで出した——婆さんがお迎をうけて以來は——茶漉の取れた事のない燻つた己が湯呑を兩手で頂いて、チヨ／＼と嘗めるやうに喫り喫り。

「なあ、お光坊。」と言ふ調子が、お佛事に續いたから同宿の坊さんと呼ぶやうで、阿嬌は二人ありながら、古道具店の茶の間は貧乏寺の納所めく。

「御志を見習はつしやるやうにとな、毎度私が、それ、ぬしに話すわいの。……私にお佛壇を誂へて、一具新しう指させて下された奥さんと言ふは、此のお方ぢや。……聞けば、ぬしが世話になつたお姉さんぢや。」

「眞個に、姉さん、いゝ仕事をさして下さつて、叔父さんも喜んぢやあ話をしますわ。」
梢は一寸俯いて、

「極が悪くつてよ、光ちゃん、そんな事を言つては。……私、眞個は此方様には却つて御迷惑を掛けたんですよ。だつて、お賣の方を先へ切詰めて置いて、其の中で無理に見積をして頂いたんですもの。」

「さ、さ、其の見つもりぢやて。」
とお光の方へ膝を進める。仕事着の印半纏が、尻切の襦袢一枚着たやうで、效性なく寒さうで、
「そりやな、もし、金錢に糸目を着ければ格別、つい通りのす法で、出来のものでは、下の壇が皆狭くて、思ふやうに

「然うか、然うか。お、然うか。」と小兵衛さんにしては奇遇を感じて、奮發むのだけれど、湯呑を、兩手で古性へ置くのだから張合は一向ない。

「お宗旨は日蓮様ぢや。……先づ上壇眞中へお曼陀羅左右へ、七面大明神、北辰妙見宮ぢやな、中壇正面の處へお祖師様、此傍へ鶴の蠟燭立、お燈明臺、お鈴などが乗る。一方へ過去帳、お位牌が二つぢや。奥さんのお志で、旦那様の御兩親御夫婦の戒名が對で一面。お祖父様、お祖母様の戒名が對で一面。——最う一基お拵へなされた其がの、聞かつしやい、——いえ、可うござります。」

「ま。」

と留めようとした梢の袖を、押戻すやうに胸を屈めて、

「姪に聞かせたうござりますでなあ、——聞かつしやい。お光坊……さて其の最う一基のお位牌は、奥さんの御兩親——

と膝小僧に密と手を置き、

「な、其の奥さんの御兩親の分ぢやがの——お佛壇が出来上つて私がお邸へ持つて出て、お誂の押入、上の壇へ、首尾よくきちんと先づ嵌ると、佛様をお納めするから見て頂戴。おそばを驕ります」とおつしやつてな……朝早かつた……旦那様はお留守ぢやつたが——。」

婦同志は目を見合つた。

「お佛器のお磨も、最うちやんと出来て居てな、掛軸、御影像、(南無妙)お祖師様(南無妙)それ、順に納つた——お位牌が二基並んだちや。もう一基、些と其のそれよりは丈も幅も小形なのを其の傍へ置かうとして、彼方此方据直しては、慥う、手も離さずに見てゐあつた、……奥さんがな、お狭くなるといけません、私どもは此方へ。」と袖に取つて、慥うな、其處等を見ておいでぢやつたがな。小簞笥の上の鏡臺の一番深い抽斗へ、スツトこれがおかくれぢや、あ、あと思つた。私になあ……。」

と小兵衛さん、ぶる／＼と火鉢の板につかまつて、

「奥様がな(良人には黙つて居て下さいよ)と、うつかりらしくお言ひなされたわ。」

「まあ、ほ、ほ。」

と若々しく、梢は、いま言つたやうに笑つたが、其の肩を細りと、

「叔父さん。そんな事を言ひましたかね、……叔父さんは、主人とは全ツ切。……あ、然う棚の寸法を取りに来て、下すつた時、一度お逢ひでしたかね。それだつて、其切なんですもの……馬鹿だわねえ。」

「さ、さ、さ、其のな、お知己でも何でもない御主人に、此ばかりは一度、申して進ぜたうござりますよ。な、お光坊此をよう聞かつしやい、奥さんのお志と言ふのは此處ぢや。」

「まあ、大層ですわねえ、いゝ志、お茶番よ。……洒落なんですもの。……何も、お蕎麥だつてさ、取分けて供へれば、下が狭くつても可いんですから、お位牌を置く處が廣く取れて、私の親たちも緩りお邪魔が出来るんです。——お雛様遊びのまゝ、事が抜けませんから。些とも讀めて頂く事はありやしません。でも感心に、些とでも取柄と言へば、お祖母さんが欲い／＼と言つておいでなすつたお佛壇が、お庇様で、あんな値で出来た事なんですわ。主人の恥を言ふやうですが、最うね、あなた方の前ぢやあ虚飾も外聞も要りやあしない。……金燦爛の塗つたのなんざ手に負へないんですも

のね。光ちやん、つい此の間までね。お佛壇はあの葛籠のまゝだつたのよ、——引越の時お前さんがおんぶしてくれたわね。あゝ、眞個に。」

と思ひ當つた顔つきで、

「お佛壇は、餘程此方に御縁があるのね、不思議のやうです事。」

と言つた。

横禮之助——梢はいま其の細君である——が、學校を出て、學士になりたての頃、幾千か内職の収入が殖えた處から、根津の三間ばかりの長屋から、町の名は彌生町と變つても、つい二三町上野寄、一間ながら二階のある家へ引越した四五年前ばかり前の事を言ふのである。——抱ぬしも内々大目に見て居た。梢の横が、にいさんがソレ引越したと、妹分の朋輩が池の端から間道を繰出して、面白半分のお手傳。——近いから、鐵瓶は沸したまゝ、お釜は炊いたまゝで、おいらん端折が持運ぶ。……おぼるが其の指環の手に、目ざまし時計を据ゑながら、掛ものを小脇に抱いたつけ、其の掛ものゝ小尻を取つて、鯛があたり鉢をト編笠で、花ふりかゝる彌生町。——然うかと思ふと、たわいのない評判の元祿が、手柄を見せた……深川育が信州松本へ仕込みに賣られて、川べりの廓で、霜の山、霧の山、また青い山。山ばかり、山の下に毎朝毎朝しら／＼明に、幾本も幾本も、灰ふきを、磧の石でこし／＼と洗はせられて、遠い、高い、寒い、心細い其の山を見て泣いたと云ふ、臥薪嘗膽の経歴があるだけ、雪の小腕まくりに、炭俵を引立て、一寸々々、炭屋さん、此の四貫俵は量が切れて居るぢやあないの……私だちだと思つて馬鹿におしでない——おわびに焚附をまけといで。あゝ、怒鳴つたら息が苦しい、一口頂戴、茶碗でさ、と叩切る。

此の中に、箒を廻して、采配を振つた、姉さんかぶりの梢と言ふは、世話場の立女形の如き尋常なものではない、一丈青唇三娘の概があつた。

渠等、勞働黨の活躍は、少なからず資本ぬしを怯かして、かゝへ抱から懐柔策の幕のうかが届く。めりけんの狸が、ち

よこく、走りに、豆腐を買ひに行く頃、掃除が済んだ夕間暮、舊宅から祖母さんの手を曳いて、佛たちの包を片手に、静に出直す梢に添つて、佛具雜器を其のまゝに、千手観音をがんでおくれと、古島籠を背負つて、莞爾しながら、手を曳かれて居るからいゝ事に、老人の杖を取つて、故とついで、片側崖の根笹の風、森の灯ちらちらと、新宅へ路を辿つたのが胸算用の此の三津代。

七

「其のね、伯父さん、お祖母さんと言へばね。」

と三津代のお光……胸算が、湯上りのほつとした目を仰向き氣味に細うしたのは、其の頃の事を眼前、花も上野に霞むやうに見えた。

「下谷の私たちの家へ入らした事さへありますわ。」

「ほ、う、お佛壇からお出掛けに成つてぢやの。」

とほやりとしながら、眞面目に言ふ。

「……あら、可厭だ。」ト引込まれたあとを、忽ちお光は吃驚した顔色で、

「お佛壇からお出掛けぢやあ、一寸幽霊ぢやありませんか。まあ……。」

「お、ほんにの、ほ、ほ」と女のやうに、沈んで笑つた。

「ほんにの、ほ、ほぢやあない事よ。——ねえ、姉さん。」

「でもね、光ちゃん。」

と梢——實の名お柳——は、落着いて、火鉢に拂いた吸殻に軽く火皿で灰を掛けた——粗末なる眞鍮張の煙管である。

「私は幽霊でも構はない、お祖母さんが達しやで居て下すつたらと、沁々……然う思ふんですよ。」

「まあ、姉さん、達しやな幽霊と言ふのが、何處にあつて？……。」

「いやの、ない事はあるまいがの。」

「可厭よ、伯父さん、——氣味が悪いわ。」

「ほ、幽霊がお達しやなればこそ、お蕎麥も蒸籠でお供物ぢや……早い話がの。——ひよく、煩うてござつたではお料具も重湯かお粥にして進ぜいでは成るまいが、……ほ、いや笑事ではないがの。……此の奥さんの御隠居様は、私が近頃での御別懇な、お知己ぢや、なれどの、其の、お知己に成りたてが、すんでに最う佛様ぢやろがの。お知己が佛様と、よつてに、——お出掛けと言へば一寸それ、お佛壇からの、うっかりぢやが、眞個に眞面目に思つたての。」

「然うね、然う言へば吃と、あの世でもお達しやでせうよ。……姉さんが那樣に思つておあけなさるんですよ。……」

いえね、此は姉さんが最う横さんの奥さんにお成んなすつてからですけれど、——お祖母さんが、どつとおわるかつた時でした。先の主人の家（松巳家と言ふ）

へ、——御信心の歸りがけか何かにお寄んなすつて、「八十幾つてお年寄は、内ばかりぢやありません、世の中のお寶ものです。……眞綿に包んでも、ソツと何時までも、達しやにして藏つて置きたい。……と然うお言ひなすつたもんでからね」とに角あの妓には、大姑だ。まあ、御壽命でせうよ」と言はないまでも、（お年にだけは不足はないわ、と言ひさうな處を、言ふかと思へば、何時までも藏つて置きたい。あの妓が優しいあの心で、朝に晩に心一杯、おもりの出来たのが一年ばかり、慙うと知つたらもつと早く、借金も證書も打棄つて縁附けて遣つたものを、）とて、松巳家の女主人さんが、私たちに、然う言ひながら、泣きましたわ。」

「澤山よ……光ちゃん。」

と、梢は靜に面を背ける。

「道理ぢやの。……あ、道理ぢや。」

「ですがね、——其のお祖母さんの在らしつた時は面白かつてよ——あんな藝妓家でせう。伯父さん、まさか横さんのお祖母さんと思ふ方が、ひよっこおいでなすつたんですから、一寸驚きもしましたけれども、——八十お歳の地廻り俗を離れて粹だわね。……一寸、晩の九時近くだつたでせうよ。御免なさい、」ツツて、女の聲がしますから、はいッて、女中が障子を開けたわ。私は支度をして出ようとして居た處でした。すぐに見えたわ。土間の處に——横さん許の圓髷に結つた年増の女中が、顔をてかくさして、ぶら提灯と石鹼づゝみの手拭を持つたのに、手を曳かれて、小さなお祖母さんが杖をついて莞爾々々して在らしやるぢやありませんか。

此方が地廻をしてお顔馴染。——あら、お祖母さん、と私あ取りかけた襦を押放出して、不思議なお客にまごついて居た、この内の女中を引かきのけて駈出したわ。」

八

「お、嘉助か——待つてや。」

臺所の戸のがたくる音に、抜衣紋の手を怯えたやうに、ぬいと上げた小兵衛さん。

「一寸、其の足で頼まれてくれいな。」と一度立膝をしてからだか、其でも忙しさに、梢の背後を勝手へ立つ。

「嘉助だつて、ほ、ほ。」

とお光は小さな聲して、

「下戸が酔つばらひさうだわね。——あ、次手に一銚子……。」

と火鉢に掛けたくの字の脰を迂らし状に續いて出る。

「光ちゃん、構つておくんすつちや……私……。」

と追掛けに向けた臙を——聞きつけないで流許のひそく聲、嘉助の「へいへい。」と言ふのばかり聞えるから——其

の臙を手尖へ返すと、詰めようとした煙草が見當を外れて、火皿の横に指先の震へる我が手を見つゝ、其の眞鍮の煙管の細い雁首を熱と視て、何故か、ほろりとした。

「何うも、……へい。」

と小僧の甲走つた勇んだ聲は、お光に心着をされたさうで、……其のまゝ、すたくと溝板を又出て行く音。其れが、古箏の裏の壁に響く。

「異だわよ……姉さん、此處の露地はね、下谷の家の裏木戸の、彼處の許にそっくりよ……嬉しいぢやあないの……いま見たら板塀に木戸もありますわ……尤もお隣のですけれどもね、——手が届きさうよ、狭いんですから。」

と燭をつける下心で、鐵瓶の火を發けながら、

「時間過ぎにやあ、横さんが、よく、彼處をお敲きなすつたわね、トンくゝなんて。」

と敲く眞似して、一人で嬉しがつて、お光は其の聲、聲を潛めて、

「藍微塵に頬冠りと言ふのでないから、もの足りないなんのつて、私たち仕出の連中は、勝手な事を言ひましたつけ。」

其處へ五燭がボツと點く。

「あ、おいでなされた、南無妙。」

と、電燈にお題目を稱へながら、小兵衛は臺所でかたこと引出した能代塗の膳の、足のぐらつく奴を片手で取つて、立膝で張脰の身構へで、ト電燈に透して掬めた處は、間を見てお手のもの、竹釘を、こゝらへ一本の氣組が見える。

「お止しなさいよ、光ちゃん——極りが悪いぢやありませんか。」

「否——でもね、そんな意氣なんでなかつたればこそ——まあ、失禮。」

「澤山よ。」

「だからこそ姉さんは、立派な奥さんにお成んなすつたんですわ。……蔭ぢやあ松巳家の女主人も然う言つて居た事よ

……裏木戸へ忍ぶのは、以来、緋の羽織に紺足袋に限るッて。」

「其のかはり、何かと間違へられた事はなくッて？」

「あ、然う〜。あの奥で車座の時のトン〜には、肝玉がでんぐりかへりをしましたつけね、ばたく〜すたく〜と言ふ騒動が酷いものだから、生火をして居ためりけん狸ちやんが、キャッてッて、金切聲を上げるんだもの。」

「ほ〜う、花骨牌かの、……ある奴ぢやわ。」

と小兵衛さん、今度は店から聲を掛ける。

「まあ、伯父さん、お察しの可いこと、……濟みません。」

と梢がてれた顔をする。

「此でも職人でござりますわ。……若い時は附合で。」

と言ふ……片づけものに、鋸屑を掴み寄せる其の形が、然も山寺の坊さんの落葉掻くなる風である。

九

「伯父さんはね、……姉さん、いまでも私を對手にして、五厘骨牌を遣りかねないのよ。尤も嘉助には内證ですけど。」

と御壯んですね。」

と莞爾して梢が言つた。

「これ〜、貴女の前で何を言ふぞいの、ほ〜。」

「そして、あの晩でしたわね、——鍋焼鱈鮓は。——考へると、よく懲りないで今でも食べると思つてよ。」

今夜の御馳走も、あらかた此で分つたのである。

「お互様ね。」

「何うしたぞいの。」

と小兵衛は来て、又一座。

「騒動——大變な騒動だつたのよ。……押入へかくれる姦もあれば、一雪頼に店の方へ遁出したものですからね、階子段の下に寐て居たお姥やん、……」

「お針かの。」

「否、松巳家の姉さんの母親ですがね。寐惚けたでせう……大地震だと思つたでせう。——年よりを見棄てるかいの、

少いもの……助けてくれッて騒ぎなの。——それでも、一人だけ、次の室の襖際に耳を澄して居て、僕だよ、僕だよ、と

お言ひなざる聲を聞いて、竊と木戸を開けて、板塀の小さな庭から、横さん、——今の旦那様を、お連込みなすつたのは

ね、伯父さん、——姉さん、奥さんなのよ——備つたものだわね。」

「光ちやん、澤山ですつてばさ。」

「構ふものですか、内端ですもの。」

「内端か、内端か、お邸の奥様をの、勿體ない。」

「まあ、飛んでもない。」

「なら樂屋だわ、こゝん處——それから皆で、場錢で横さんを御馳走しようッて事に成つて、いつもの的矢、——其の時分には露地へ入ッて、ばたく〜音をさして居ますからね、丁度二月でした、如月の……」

と、折から夜の分へかはりがけの近所の、稽古三味線にうつかり釣込まれた顔だつけ。

「ちら〜火の粉を紅梅でせう、其の黒塀の木戸口から、鍋焼を擔込んで、皆もお相伴で、する〜ほッほッと、鳩

ならい〜けれど、食氣に掛けては、木兎が鳴くやうなもの。——ねえ元祿ッたら〜うむ、今夜は氣前を見せた、的矢、

嬉しいよ、分が厚い。——なんか言ッて、蒲鉾を挾んでさ、御近所の三橋の下から、將軍様へ御直訴のやうな形をして汗えて

居ましたつけね。わつと言つて反つたぢやありませんか。それでもお箸を持つて居るうちが可かつた……入歯がコッソ
と出たんですよ……餛飩の中から。」

「ほい。」
と、小兵衛は思はず口に蓋をする。

其の、小兵衛さんの、よくついた口許を見て、お光は脇腹を肘で壓へて、俯向いて、くっくくと背筋を絞る。

「これさ、お光坊。これ。」

「光ちゃん。」
「これはしたり。」
「伯父さんが呆れて在らつしやるぢやないの。」
「これはしたり。いえ、相當に苦勞もしますけれど、此の氣ぢやで、しやうばいも動りますわ。はて、それぢやとて、
これはしたり。」

「光ちゃんや。」

「あ、私、姉さん……だつて……あの時の餛飩の中の入歯は、もしか、此の伯父さんが落ッことして置いたんぢやあ
ないかと思つたもんだから……。」

「これはしたり。」
小兵衛は口を撫で、苦笑。

「い、加減になさいよ。光ちゃん。」

「でも笑事ぢやあないわ。」
「誰が笑ふんですよ。」

「真個ね、御免なさい。——あれが元祿なればこそですわ。一寸金歯なら、屑屋にやつて、翌朝、惣菜屋の薩摩揚を買
ふものをさ、可厭な、味噌歯だつて、挟んでるんですよ。」

と自分で言つて、言遊つてお光は、ぐっく。

「あ、光ちゃん、真平。」
「恐れる事を言ふわいの。」
と小兵衛さんは、又苦笑。

十

「何うでせう、おんなじ汁を吸つたんですよ、てんぐに胸を敲いて、——最う懲う成ると、入歯がと言ふのさへ突
吐すやうですものね——餛飩屋に談判をする元氣もなしに、皆がぐうぐう苦しがるのを御覽なすつて、横兄さんが、あ、
僕に働きがあると、こんな時、真珠か、おぼるでも出ようのに、皆に面目ないと言つて、さみしさうにお悄氣なすつた。」

「真個だわね。」
「餘寒殿しき折から、」
と、胸算らしい獨稽古を持出して、

「一人でお歸し申されるもんですか……あとで御主人から槍が出たら、申譯に私が自害」——自害が可いぢやあない
の、切腹と言はないうちが、——元祿なんか其の意氣込ですもの。——それなり姉さんを、一所に裏口から……夜中の籠
月でしたわねえ。」

「ほう、するとお茶屋へでなうて、すぐにお宅へぢやの。」
「勿論。」

「後生よ。光ちやん。」
 「何しろ、御隠居さんが、開けておいでなされたで何よりぢや。」
 「右の地廻りの一件ですわね。」
 と串戯らしく、しんみりして、

「自分で言つては可笑いんですけど、姉の手前もあり、しばらく行つて見なかつたもんですから、お祖母さんが逢ひたがつて来て下さつたんですよ。生憎お座敷へ行つて居ましたつけ。……ねえ、あとで、お目に掛つた時、……「お姉さん、勿體ないわね——」お姉さん、顔が見たうて行つたがの、極りが悪かつたぞ。」つて、背中を敲いて莞爾々々なすつた……私は涙が出ましたわ。」

と、梢は今もせぐり来てさしぐむ涙を、話とも煙草でそらして、
 「誰？おぼるさんでしたつけか、ね——あの時、お祖母さんに目八分でお茶を持つて出たつて言ふのは。」
 「あら、おぼるや姉姉さんが遣つたんだと故とらしいぢやありませんか。——丁度お茶をひいて、ぬき糸を繋いで居たんですがね、元祿よ。」

いや、其の臥薪嘗膽の姉さんは、——おぼると言ふのが、様子もの越、すべてハイカラを行ふのに負けない氣で上野に近だけ、裸體美など、聞覚えて、湯へ入ると、風呂槽へ蓋をした上へ、眞白な二股大根。むし上る湯氣に、ぐたりと羽目へ寄かゝつて、長唄の勸進帳を復習ひながら、めりけんさん、お冷水を一杯……すゝかけの露ぢやあ不可い、大鐘でおかはり附大急ぎ。——あゝ、氣が遠く成る、と言つた女が、殊勝に梢の心操を眞似て、いまに、お祖母さんの珠數袋にせうとて、ぬき糸しつけ糸を縫合せるの、手傳をして居た處。——尤も世帯のはじめには、漬ものが第一と、梢が其の細い指を糖味噌に思ひ切つてから、芥子漬には麴が入るの、土用越は八升鹽……當今の秤目では何うか知ら。……胡瓜は山が味がいゝなどゝ、閉却されぬけものゝお姥やんが、若い妓の中へ返り咲の参謀で、藝妓屋に取つては、あゝ、是か、非

か。——皆が蜜豆屋より八百屋の荷を覗いたと云ふ時分であつたが。——
 「すぐに私が手を曳いて、お心易だてに座敷を杖をつく眞似をしながら、それでも、あれですわ。横さんの許へ行つてはお祖母さんくと言ふのだけれど、内ぢやあ勿體をつけようと思つて、「横先生の御隠居様」と、女主人に然う言つたものだから、「一寸お茶を入交へてよ」と女主人は丁寧にあ挨拶をして、自分が居ては氣詰りだと立ちながら、「これ失禮のないやうに。」——然う言つたもんですからね、其處で元祿が目八分なんでしたの……。」

十一

「誰でしたつけね、——あの晩、お祖母さんの前へ、紙に載せたお茶菓子、目八分に持つて出た人は？」
 「知れてますわ。」

とお光が軽く受けて、
 「元祿よ、そんな事をするのは——でもね、からかつたんぢやあないんですよ。あの時は——奥へ引込んだ主婦さんが右の御隠居様と言ふので、謹んで粗末のないやうに、と然う言つたもんですからね、……あの妓が生眞面目なだけに尙ほ可笑かつたんですわ。——到来ものゝカステラ……一寸……叔父さん、まだ。」
 と目配せで、御馳走の催促して、

「あら、嘉助がまだ第一歸つて来ませんわね。」
 「おゝ、小僧は、恙う云ふ時ぢや、次手にむかうでお相伴をさせての、直ぐに買もの先へ預けて置いた、がらくたを引取りに廻らせたがの。」
 「あの、小父さん。」

と、梢が言つた。其時、吸ひつけようとしたのを留めて、火鉢の縁に、俯向に置いた眞鍮の煙管が侘しいのは、其の言

よりも目に着いた。

「おなじく、がらくた。……」

一寸寂しく笑ひながら、

「……と言ふほどのものでもないんですけれども、あの、いまお祖母さんが、其のカステラでお茶をあがつて、御機嫌のいい處を、私、頼みにして、少しお願ひがあるんですよ。」

「何なの、姉さん。」

とお光が先繰りに氣を入れる。

「光ちゃんには極りが悪いけれど、……小父さん、一昨日のあの煙管ですがね。」

と皆まで聞かずに、

「ほい。」

と小兵衛が、發奮のない、しなびた冬瓜のやうな膝を敲くと、お光は我が煙管の吸口と、其の眞鍮のと、梢の顔とWと云ふ形に熟と視た。

十二

其の二昨日の午後である。――

小兵衛が仕上ものを届けて、工賃は請取つたのに、飲む張合のない人だから、懐中も半纏も、あるべかりにくしやくしやとした態度で、小春の日常に帽子も被らず、曲尺と鐵槌と薄汚れた手拭を一所に握つて、のこくと歸りがけに、谷町邊の崖裏に成る……近道を抜けて來るとこほれかゝつた邸の塀と、一方草の生えた崖を、兩方が背にして向ひ合つて、其の裏道に立つた、婀娜な女と、蹠んだ屑屋、で不思議な取合せで居るのが見えた。

「はてな。」

丁ど前後に人脚がない、此が故郷桑名の田舎道だと、串戲にも眉毛に唾をつける處と、頬邊を膨らまし、頸をすくめて日に透しながら近づく、

「やあ、桑小さん。」

と唐突に、其處に居た屑屋が、押挫けた羊羹色の古帽子を傾けて聲を掛けた。と同時に、ほはりくと二つばかり、尾花の散るやうだつたのは、屑屋が吹かした蝙蝠の煙の化けたので。

小兵衛はぎよつとしながら立留つた。

が、屋敷は紛れもない桑名屋の小兵衛だけれど、一端「桑小」さんと家持の町人らしく箔を附けて呼んでくれるものは外にない。

唯一人、しがない取引で顔馴染の、此の邊からはずつと遠い、麻布十番から來る屑屋で、安原善吉と言ふ親仁ばかり。外にない。……それでないか狐だか。

小兵衛は、しよほつかせた目で撓めて、

「お、此は高善さんかい。」

と言つた――「桑小々々」と言つてくれる。處で、此方からも問屋なみに、安善さんと言ふ筈を、屑屋で(安)は聞えがよくねえ、高買をするやうに、(高善)と遣つてくれと、豫て親仁の註文で――笑はせる――が、其處で以て高善さん……

「いや、桑小さん、今日ばかりは安善だ。大安のコン／＼チキ……」

と帽子の下へヌツと出した。やがて小狐の耳ほどある太い指を、居向つた其の婦に氣を兼ねたやうに、慌てゝ引込めて、

「初手はね、全くばかされるんだと思つたよ、此方様に。」

「や、奥様で。」

と其の時、顔を見て小兵衛が言った。
其處に襟つきの半纏で、色白く、未枯れた崖の草を背に、日影に立つたのは梢であつた。

「桑小さん、お知己かい。」
「大切なお得意様ぢや。」

「可厭ですよ。」
「あゝ可かつた。」

と安善が、ほつとしたやうに一呼吸深く吸つて吹かすと、又……幻の煙がふかりと立つ。

「罷り間違へば桑小さん、お前さんの處へ駈着けようと思つたがね、——見ておくれ、荷籠の中を、それ、汚え風呂敷だが、恭い包がある。少しばかり、今日は銀目を張つた、買出をした處で、裡がこはれものだ。此奴を持つちやあ駈出せねえ、尤もまた、此のお綺麗なのを、其の間此處に立たせて、屑屋の荷の番人をさせ申した日にや、立處にそれ、籠が花活に化けるは可いとて、中の買ものが水に成る。……いや、眞個の事だ、桑小さん。——然うかつて、お前さんの許まで一所に行つて頂く譯にも行かず、私一人で籠を背負つて、坂があるだけに、のそりくと上つて行くのも智慧がなし、弱つたよ。麻布十番名代の高善、途方に暮れて居た處だ。」

「道に迷つた修行者のやうぢやな、ほゝゝ、いえ、奥様、此の人の言ふ事は、何時も些と大仰でござりましてな。」
「處が、今日ばかりは然うでねえ。——まあ、此を一つ見てからの事にしなせえ、此だ。」

と、別に難のない親仁さんの、それだけは止せば可い、合成金の認印の指環を嵌めた、筋だらけの掌に、美しく載せたのは、火皿と吸口を黄金に、烏金で細い茄子に誂へた、艶も照り、濃い紫の露を添へた、女持の煙管であつた。

「——のつけに私もお断り申したよ。否ね、お断り申すよりか留めたんだ。減多にこりやお離しなざる品ぢやあゝりません。またお離しなざるにした處で、此方人等ぢやあ店が進みます。何うしてもお賣りなさいます思召しなら、何某と云

ふ、表を張つた然るべき店へお見せなさい。」
「ほんに、成程。」

と言つた時には、小兵衛は手渡にされた件の茄子形の煙管を、七日ばかりの晝の月に捧ぐるやうに、両手で上下を取つて透して居た。
「御免なさいまし、一寸拜見を……」

「ね、拜見ものだらう、桑小さん。……屑屋にやあ職過ぎるよ。——だがね、奥様は何でも可いから引取れと其でもおつしやる。が、其にした處で（今日は思懸けず買ものが突張りましたので、こんなお品を頂くほどの）早い話が、（資本を）持つて居りません」と、兜を脱ぐとね。」

と帽子を取ると、もぢやくとした胡麻しほを撫つかけの總髪、窪んだ頸窪を撫でながら、
「奥様のおつしやるにやあ、（出来あひの眞鍮の一本買へるだけのお錢をおくんなさりや可い）と……驚いた、……恚うなんだ。」

「眞鍮の煙管を一本。や。」
と茄子を頂いたまゝ、ぐるりと廻る。

「如何に、物價が上つたと言つて、眞鍮の出来あひなら、たかゝ二分だ、三分と氣張つて兩とは出まい、以前はこれ羅字をすけた奴で三錢で買へた……減相もない。」

「おゝ、減相もない、なあ。」
と桑小も腰を抜いたやうに、ぐたりと踏ふ。
「留めてもお背きなさらねえ。……何でも買へとおつしやるんだ。——はゝあ、お禁厭だな、私は考へた——人通のな裏道で、茄子の煙管を屑屋へ手離す……失禮ながら、恚う見た處、お顔に一つ。」

梢は俯向く……

「爪尖に。」

と覗かれて、片足引いた吾妻下駄、残んの露草の影が映す、素足の踵は消えさうであつた。

「黒子一つおあんなさらねえ。……何のお禁厭だか知らねえが、構はねえ引き受ける。とした處で、精一杯お買ひ申さなけりや冥利が悪い……と成ると、それ、持合せが見込の十分が一もねえ。——處で桑小さんを思ひ着いた。が、いま言つた坂を上つて山越の一件だ。……一寸途に迷つて居た處へ、噂をすれば影が映す。」

「さ、さ、影も本體も顯れました。顯ればえもしませぬが、ほ、ほ。」

と天窓をトンと壓へて、皺手の隙から、日蔭に立つた梢の姿を、却つて眩しさうに仰きながら、

「高善も申しますわ。これはお離しなされぬが可うござります。恙う申しては何ぢやがな、十分に頂きました處で。なもし、高善さんの腹も讀めて居ます。飛んだ御損でござりませうぞ。」

「否、可いんです、打棄らないかはりなんです。……眞鍮のお代だけに買つて下さい、何うぞ、御迷惑でも。」

と、きつぱりと梢が言つた。

上の邸の臺所あたり、ざあと水使の音がすると、崖の細植に、ちよろくと水の通ふのが、つい近く、おくれ毛に響くのも忘れたやうに、半ば、うつかりした姿。……垣根越に棄てたらしい、莖の短い、ほとけに手向の山茶花、小菊が、乾いたやうに、濡れたやうに、一束、ばらりと崩れたのが、崖の腹から銀杏返を密と覗く、夕日影……

「お禁厭です。何うぞ。」

と言つた。——佛壇の裡から、ものを言つたやうである。晝の其の月の下に、白く眉を集めて、ほんやりと額を寄せた。此の二個の家持町人。

「奥様、私がお引受け申しますわ。」
と桑小が言つた。

「お顔馴染だと言ひますから、一旦然うなさつて置いて、可うがすかい、私と違つて御近所の事だし……、何とかまたお考へが變りましたら、元價でね、可うがすかい、何時でもお取戻しなさいまし。——「お遠慮をなさらねえで」と桑小さんも言つて居ります。何、御心配はいりやしません。」
と麻布十番の大問屋が、ボンと籠のふちを叩いた。

——其の煙管の事なのであつた——

十三

「……御免なさい……姉さん。」

お光は撓ふ袖で折れるばかり、はたと蒲團に手を支いて言つた。

「梢が……恥も、外聞も、極りの悪さも忘れず、後生だから、返して下さい、あの黄金の吸口の茄子形の煙管を……其の時の言に甘えて買戻しに來た……實は其のために今日は買もの、次手に、此店を志して立寄つたのだと言つた。——何を包まう、煙管を賣離したあの時は、些と自分ながら気が何うかして居たのだつたと言ふのを——聞き……成程な、小菊、山茶花、錦木の紅い葉を、末枯の崖に、其の黒髪を左右に散して、日も月も幻のやうな中に立つて、禁厭！と言つた風情は、四邊が暗く、急に山深き谷底に引入れられるやうに餘所目にも見えて、顔も凄いやうに蒼白かつた——御尤も……尤も、可うござりますとも、もとくお返し申さうために、小兵衛が預りました品……あの時の御様子でも察しられた、何か激しく氣に觸り、胸の昂ぶる仔細があつて、眞鍮一本の値に葉賣りは、一時のたゞお心得違ひ、氣まぐれに相違ない。やがて取戻しにおいてなされうと、……其を待つて居りました次第ゆゑ、あれだけは、御覽の通り

店へも飾らず、大切に——と言つて鏡のかゝるほどの要害もあるでなし、名ばかりの鼠入らずも、茄子には重寶なれども籠の手に掛つては、懐爐灰に成兼ねますまい。……ほゝ、一刻も早く、もとの貴女のお手許へ。——

「……叔父さん、一寸……。」
梢と小兵衛の其の應答を聞きつゝ、聞くうちに、胸も帯も、緋鹿子の背負上げも一所に、我が煙管を引振るやうに身を揉んで居たお光が、——御免なさい姉さん、と言ふより迅く、蒲團に手を支いて俯向いたのであつた。

「まあ、光ちゃん。」

「済みません、姉さん。」

手をばつたりと支き直して、

「叔父さん、御免なさい。」

「何ちや、何ちや、何うぢやいの。」

「あの煙管は、私が持つて行きました。」

「わ。」と小兵衛は、ほかりと齒のない口を開ける。

「昨日の晩方、私が赤坂へ歸りがけに、叔父さん聞いたでせう。——「おや一寸、此の煙管は」つて、此處の蠅帳の抽斗で見つけてさ……出ものを買ったと叔父さんが、店からお言ひなすつたものだから。……ぢやあ何うせお賣りなさるんだらう、それだし、内のもので見れば。」

と困つたらしく、それでも笑顔を上げながら、

「何の道大金なものぢやあない。……まあね、叔父さん、それに買手が私で見れば、どつち道、相談の出来ない事はあるまいと、高を括つて、どうせ今日にも又用があつて来る事だし、日は暮れかゝるし、氣が急いたもんですから、其のまんま、黙つて赤坂へ持つて歸つたんです——。」

いゝえ、姉さん、此處には持つて居ませんけれども、落しも何うもしやあしません。……大丈夫、大丈夫、姉さんのお手には戻りますけれども、唯ね、……いま直ぐに、お間に合ひませんが、何うも、何とも、私、何うしたら可いでせうね。」

「慌てものが、……ほんに——やあ、来たかの。」
と此を汐に、小兵衛は臺所へ、しよほりと行く。
「真個に、姉さん。」
と甘えるやうに、ぐつたりと火鉢に凭れて、顔を覗いて、
「こんな時にお話をするつて、そりやないんですけれど、私ねえ、少し的があつて堅氣に成らうと思ひましてね。」
「まあ、おめでたう……。」

「あら、そんな……でも、然う云つて下さると嬉しいんですよ、お許が出たやうで。矢張りしかし済みません、——立派にひくんぢやあないんですし、それに、お金子の事ばかりでなく、些と抱主の方に彼此があるもんですから、叔父さんにいる、それに就いて打合せだの何のがあつて、昨日も一寸赤坂を抜出して来て居たんですがね。」

姉さん——
お持ものだつたのですかねえ。……姉さんの……いま言つちやあお世辭のやうで何ですけれど、私、こんなでもそれは癩症で、性の知れない煙管なんか嘘にもいきなり口へつける事なんか、つひぞなかつたんですのに、何ですか、昨日のばかりは、一目見ると、ゾツとするほどすいたらしくつて、うっかり一服吸つたんです。

梢姉さん——
あの、それに、申譯のやうですけれど、古道具屋の姪だつて、掘出しものをする氣ばかりぢやありません。——いま言つたやうな場合ですもの……

煙も甘し、すつきりと、私は心もほんのりしながら、ふツと思ひ出した事があつたんです。新聞で見たんだか、お友だちに聞いたんだか、それともお座敷で、お客たちが噂をなさるのを、些と酔つて、も居て聞いたんですかね、つい近頃のやうでもあるし。……半年一年、もつと経つたやうでもあるし、柳橋だか、芳町だか、それもはつきりはしませんが……一人、脊のすなりとした。色の抜けるほど白い、様子のい、藝妓がある。……面長だから、潰島田も何も似合ふうちに、圓鬘に結つた様子と言つちやあ、そりやない。……いつも烏金の茄子形の細打の煙管を持つて居て、そして其の人が、淺葱なり、白絞の手絡なり、高等な圓鬘に結つて、其の煙管でスツと吸ふ時、水晶のやうな齒に映ると、艶々と鐵漿を含んだやうに見えるのと、優しい眉もすつきりと富士額に青いやうな、生命取だ、類がない。……圓鬘のお約束、お約束、と不思議に何處でも、いつも註文が出るものだから、蔭口をきくものは、令閨だの、御内室だの、もつとすつと、お部屋様だのツて言ふけれど、其の圓鬘で、其の鐵漿で、其の煙管を一目見る——と……

姉さん——

確かに然う言ふ妓があるつて事を、何ですか、夢のやうに知つて居て、思ひ出したんですよ。……其の癖、名は、はつきりと覚えて居ますわ……

——お婆さん——

おみのさん……ですから、何だか柳橋らしいんですがね。

梢の顔の色が颯と變つた！ 谷町の岸下に佛の華を黒髪に散した時も、思ふに慙うよ、と屹とした。

お光は些とも気が着かずに、

「ふツと私、其の事を思ひ出したんでせう。圓鬘に結つたのがよく似合ふ……鐵漿をつけた茄子形……あ、あやかりたい、と又ゾツとするまで身に沁みたもんですから……。」

十四

「叔父さんく。」

「おいよ。」

と言ふ聲が、最う店口。で表でガタリトンと戸を閉す響。——日短な折からの、早や宵闇は深けれど、町筋の軒燈に、柳の枝はまだ白い。

「おや、最うお閉めなされるの。」

とお光は、とつかはと云ふ襦袢きで、仕切戸の敷の下へ、爪尖を半分一寸落して、障子の襖を袖口で軽くおさへて差覗く。と、腰障子をいに入れて、これでも大事な商賣もの、古道具の容體を一檢分の思入で、正的に禿を圓く突込んだ處なり。

古樂を覗く奥に似て、

「お光坊、……奥様に御緩りと遊ばすやうにの。」

「まあ——お出掛け。」

「あら、姉さん、お立ちなされないでさ。……叔父さん執方へ……。」

「慙う云ふ時ぢや、丁ど可いで、一風呂ゆつくりと暖つて来るわいの。」

と言ふ、半纏の細帯に古手拭をだらりと下けて、殊勝にも心得た石鹼箱を、両手を動かすため、寛げた懐中へ預けたのが、ゴツ、リと溢れて出た圖は、うぶめに抱かされた嬰兒の頭に似て居る。

「では、あの、一所に食つてからになすつては何う。」

「いや、此でも職人ぢや。」

おしやうりつとんぼりま

彩色人情本

と頭と一所に胸を振つて、
 「ほ、蕎麥は釜振と言ふのを知つとるて。鐵火ちやろが。いや鐵火より行火の年かい、ほ、お光坊、店の電燈を消してくれ。……聲がすると人が覗くで。それではの。」
 「あい、行つていらつしやい。」
 梢も立つた。

「まあ、姉さん。」

と、手取早く店頭の電燈を消せば、腰障子の外に、こぼこほんと小兵衛の咳。

「道具屋さん、——こりやお出掛けですかい。」

と、通りすがりに、隣近所の人らしい。

「はい、八功德の池と言ふのへ、どつぷりと沈みますて。」

と、足駄だか、日和だか、そればかり新しく響くのが、カタ／＼ともの寂しい。

「梢姉さん、合方はきつぱりよ。」

と、露地で引出す三味線に、……

「しんみりのろけようつて處たわね。」

とお光が馴れた手の酌をする。

「御馳走様。」

と受けながら、杯を一寸透して、

「異なお猪口だこと。」

何やら、妙に凸凹に捻つた分厚なのは、酒飲でない叔父さんのもてなしぶり、悪くすると、鬱金の切に包んだのを賣り

ものゝ中から對に持出したものかも知れない。

お光は自分に控へたのを引傾けて、

「野暮だわねえ。……含むと齒を染めようつて言ふ煙管もあるのにさ、これを押つけちやあ齒莖の土手だ、……まあ、可厭な。」

「何ですな、お前さん。失禮な。」

と梢はたしなめるやうに言ひつゝ、お光が、口で又影を映した茄子形の煙管に、何故か、急にぶる／＼と震へた手で、

一口飲んだと思ふと、

「あ。」

と言つて、震へる袖を、ぐいとすほめて、斜達に身を捻つた。

「埃、蟲、一寸。」

「い、え——あ、吃驚した。」

途端に臺所の障子の、大な破目から、がさ／＼と音もしさうに形を顯したのは、先刻の野菜の買ものである。……這奴

人參の舌を赤く出し、牛蒡の尾を生して化したのではない。暗さが何となく一方へ引締つた處へ、燈が凝つて、眞直に射

す穴の裡に、自から、ほかりと浮いて出たのであつた。

梢は蟲を追ふやうに疊を敷いて、

「可厭だよ、此の人は？」

「あら、姉さん、……人參や牛蒡を、此の人だつて？」

十五

いま梢の其の振舞は、色にも舉動にも出た心の惱を、人目に紛らさうとしたのであつた。お光は其とは氣が着かずに、

「可厭ですよ、そんなものを視て。」

「一寸そんなものとは失禮だわね、此でもお世帯の御馳走さ。」

「あら、そんな積りぢやないんですよ。ほゞ、いま云つたのはね、——お臺所の事を思ひ出して、急に里心がお着きなすつちや困ると思つて……それで然う云つたんですわ。——歸しやあしませんよ。……一杯私にも頂戴な。——此は奥様恐入ります。」

と氣輕に巫山戯て頂きながら、

「何うせ里心の次手ですから、更めて唯今伺ひます、先生は。」

「遅いわね、問ひやうが。」

「呆れた。」

と目を据ゑると、靜と頬がしまつて、少々口の尖るのが此の妓の癖で、眞正面でも横顔のやうに見える。

「あれだもの、飲んでやれ。」

と、ぐつと呷つて、

「へい、御返杯。……まことに申後れました。——先生はおかはりなく——」

「あひ髪つては大變よ。そりや分つて居ますけれど、今頃は、——お待ちなさいよ、晩の支度だなんて言出されると困るから、聞きますまい。——ですがね、姉さん、先生が前の「兄さん」の時分だと、かうした處へ、一寸車夫か何か使ひ

に遣つて、呼出してさ、一口差上げるつて寸法に行くんですがね。……お喜びなすつたわ。いつかの時なんか。——お待ちなさいよ。」

お光は最うほんのりで、

「自棄に企んで見ませうか。——朝晩一年押通し、旦那様奥様よりか、偶には情夫に成つてお遊びなさいな。あゝ、姉さんにも、何より其の方が御馳走に成るかも知れませぬ。——兄さんも、姉さんさへお在なされば、古道具屋の臺所だつて、天麩羅のころもが生だつて、そんな事にお構ひはないんですもの。あら、眞個に企てませうか。私は念に思ひついた。——何だか瓢箪から駒が出るつて形ですけど、出た駒を馳らかして、兄さんを迎ひに遣りませうよ。よ。眞個に——貴女とお二人、此處へ並んで下されば、私の今度の心願が叶ふ徴ですわ。ね、眞個に可いでせう。一寸……人を、使はすぐにありませんから。」

「あゝ、お光さん。」

と立つのを留めた。手の震を、煙管に縋つても止まないの、火鉢の縁へ火皿を極めて、壓へて、引いて、其につかま

るやうにして、

「お光さん、良人では宅に居りません。」

「えゝ、お留守。」

と言つたばかりで、それなり濟みさうな、梢の様子ではなかつたのである。

「お留守。」

と又言つて顔を見い、

「……」

黙つて引入られるやうに息を飲むと、

まじやうのふし

「お光さん。」
と顔と色を薄く染めると齊しく、堪へようとして、細目に閉ぢた、瞼がきりりとしながら、露で心と書くやうに、涙は弱く、沈む睫毛に、ツとつたはつて溢れたのである。

「先刻から、言ふまい／＼と思つても、我慢をしても、堪へても、口より前へ、何しても涙が出るんですもの。——口惜い私……察して下さい。お光さん、良人では餘所に情婦が出来て、私は最う棄てられました。」
と意地も、苦勞も、堪忍も、がつくりと抜けたやうに、氣の張が肩に弱つて、ハツと火鉢に俯向いた。手で支いた眞鍮の細い煙管に、前髪が、ふるへて附くと、其の吸口が頸許へ……あゝ、白々とある項を、刺が貫いたやうで慥々しい。

十六

胸算のお光は興覚顔

唯、また一息引きながら、

「まあ、そんな、そんな、姉さん、串戯ぢやありませんよ。——見棄てるの、棄てられたのツて、兄さんと貴女とはそんな中ぢやあないぢやあないの。第一さ。」

慌てゝ居寄つて、頬でもさすりたさうに、俯向いた其の梢の背を抱いた。が、顔を覗くさへ、いた／＼しい氣の毒らしいので、顔を頸にかさねつゝ、やり違ひに目を反すと、恰もぶつかつた障子の穴、化け衆もしないで、人參牛蒡が霜けて居る。

「第一、そんな事がないツて證には、見棄てたつてお言ひなさる先生が内においでなさらないで、棄てられた姉さんがお菜の買ひものをなさるわけがないぢやありませんか。」

と分つたやうな、分らないやうな證を取つて慰めた。お光は突詰めたらしい梢の様子に、つい通りでは慰めやう言葉の

術がなかつたのである。

顔を上げると、はらりとあてた、襦袢の袖口、濡々と、涙の中に美しく、

「良人ではね、お光さん、私を置いてきほりにして何處かへ行つて、——最う四日にも成るが歸つて来ません。——お野菜もね、ですから常があつて買つたんぢやあないんですよ。——察して頂戴。——誰か、ね、お腹を空かして、待つてると思へば、銀杏にも千六本にも、大根をちよき／＼囉すのが、痾處へ上手に當つて、いゝ心持に三味線が弾けたよりかどんなに嬉しかつたか知れないんですよ。——それなのに、私、當なしに成つて、何を張合もありやしません。不斷は市で買ものをするのに、良人に食べさせようと思ふ時は、寶の山へ入るやうな氣がしたものを、今日は一人で田圃へ迷つて、日が暮れて、目も何も茫として暗く成つて、勘定をするお寶が、雨滴が落ちるやうな、寂しい情ない氣がしたぢやありませんか。」

毎日さ、三度々々のお菜を記いて覚えて置く……野入の帳面を當にして、去年の今月の今日と、明日の分を買出して来たんだけれど、——其の帳面もね、お光さん、お佛壇の横の茶棚の上へ開けたまんまで、私は最う詰らなくつて、しめる元氣もなかつたんですよ。意氣地はないけれど、あとを書入れる張合がないと、帳面はしめる力もないものね。」

と昔馴染の隔てなさに、愚に返つて、とり留のない事ばかり。

お光も、思はず貴泣して、
「仲がよすぎて癡話喧嘩をなすつたんでせう、聞く方が堪りませんと、嘘にも串戯にする處ですけど、姉さん、濟みません、が、そこ處ぢやないやうにお見受けするわ。それに、」

と堅く成つて、居直つて、
「私……、聞いたばかりにして置けません……兄さんに情婦が出来て、とお言ひなすつたわね。」
梢は黙つて頷いた。

「洒落にもお言ひなさる事ぢやあないわ。そんな事——もしかですよ、萬々一眞個だとすれば、飛んでもない、兄さんは——そして、そんなにお言ひなさるやうぢやあ、姉さんは確な事を御存じてせうね。」
梢は答けて弱々と、

「知らなくつてさ、お光さん。」

「兄さんは……あら、一寸御免なさいよ。」

とひとりで驚いたやうに、先んじて詫を入れつゝ、

「……兄さんはとに角ですよ。……御様子だつて、學問がお出来なさるたつて、世間とも言はない、其處等に、あのくらゐる方なら幾干もあります。……怒つても——構はない。……私は言ふわ。私は姉さんの身ですもの。……だけれど、姉さんのやうな心意氣の人は澤山はない。いゝえ、ありません。其の貴女を向うへ廻して、兄さんと出来たつてのは、もし眞個なら、何處の婦です、どんな人です、え姉さん。」

「お光さん、太陽様が、西の山へおかくれなすつて目も心も暮れて行きます……其の野原の渺々と遠い處に、たよる灯影も何にもない。杖、柄杓も取落して、同行二人の菅笠さへ、野分の風に吹取られた、藝妓の果の巡禮が、亡者に成つたやうな目の前に、露に光つて唯一つ、うつくしい紫の茄子があると思ひよ。おなじ浮世に住んで居るから、お光さんの目にも留つたわね。兄さんの對手と言ふのはね、」
「ええ。」

「其の齒を染めた人ですよ。……お養さんと言ふ柳橋の。」……

「——其の日はね、二時頃でした。」

良人で、二階で、仕事をして居たのが、「お茶、お茶。」なんて、人が知らないから可いかと思つて、いつものやうに、おやつを強請るやうに、どん／＼茶の室へ下りて來ました。

私は何と言はうかと、熱と考へて居た處……

間の悪い時は仕方がない。番茶が罐の底に成つて、たしないのを、焙じて出すと、餘程乾かしたと見えて、熱いのをふう／＼やつて甘味さうに飲むんでせう。

お光さんも、先に知つて居なさるけれども、其の様子が、何うして此で、餘所へ年増のおつちもなんか拵へて、私を泣かせるだらうと思はれるんです。——でも、何うも事實なんだから詮方がない。

「濟みませんが私……」

ツて其の時、料簡を極めて然う言つたんです。

「折角下すつたんですけれど、あの煙管は頂きませんよ。」

「何さ。」

然う言つて、不意を食つて、一寸分らないやうな顔をしましたつけ、空惚けて居るでもなさうなの。煙管を私にく

れてから三月の上も経つて居るんですからね。

お光さんも知つての通り、先にね——皆一所に居た時分は、私はよく何か遺失したわね。煙管だ、紙入だ、一寸挿す簪

だつて、小間もの屋の荷と、水車の廻るやうに目まぐるしいくらんでせう。粗忽かしい上に酔つぱらつたと來て居るから、

でもね、慥は可恐くつてよ、世帯を持つてからは、拾はうとは思はないまでも滅多に落すもんですか。——自分のをつい夏頃まで持つて居ただけれど、煙草入も筒もあるのに、何處へかなくなつて了つたもんだから、一寸買ものに出ればつたつて、長羅字のは持つちやあ歩行かれず、此ばかりはなくなつては不自由だもんですからね。……どんなんでも可いから

一本買つておくんなさい。」つて、良人に頼んで居たんです。

「眞鍮でも可うござんす。」

「梅一枚買つたる事なし、——分つた、分つた、奮發をします。」

「あんな巧言い事を——決して當にはしませんから。」

二月ばかり経つてから、晝間。然も微醉で、可い機嫌で、出先から歸つて来て、土産がある。當て、御覽と、袂を突出して、肩を怒らかして、斜達ひに突立つて居るから、精々甘栗を二歩か知らと、私も何だか悦々して、支膝でお前さん、繪に描いた小笠原諸禮式の殿御に袴を穿かせる處——てつた形で、氣障だわね。

突立つてる人の袂を捜すと、コツリと當りました。

てんぐ帖で巻いて鬱金の切で包んで、お刺に桐の箱入なの、——一寸其處等を見渡した處で、お佛壇の外には、此のく

らる丁寧なお道具はないてつた工合でせう。

それが、あの煙管なんです。

——いま……お光さんのお話だと、お義さんは、其の茄子形を銜へて、皓齒のバツと染るのが、圓髻と一所に評判な人ですつて——世帯にかまけて居ますから、粹な處の、そんな話は、私は何にも知らなかつた。

ですが、そんなに珍しい形でもなし、第一私には些とお見立が妙だとは思つたけれど、婦の服装や持ものなんか、さつぱり分らない人ですもの。買つて来てくれた心が嬉しい、瓢箪でも、絲瓜でも、そんな事は構はない。茄子結構……胡瓜でないのが僥倖だと思つてね。

その後……お彼岸に行かれなかつた一月おくれに、市ヶ谷の焼餅坂にお寺があるんです。——聞いて頂戴。私の母様のお墓に詣つて、赤いお線香を點しました。蟲が鳴いて、寂として、薄が身體を包むやうです。——久しぶりで、暮六つの目白の鐘を聞いた時、ふつと私が小兒の

時、たしか、あれは兩國邊で、踊のおさらひがあつて、母様が、もう衣裳をつけた膝に抱かれて、顔を視ました、其の山姥が黒々と鐵漿をつけて居た處を——

其のまゝに、お石塔の薄の影で思ひ出すと、澄して、高慢な顔をして、筒から抜いて、お線香の火で、一服つけて、すつと吸つた茄子の色で、私も齒を染めたやうな氣がするとね、極りが悪いやら、可憐いやら、心細いやら、嬉しいやら。

「良人に買つて貰ひました、見て下さいな母様。」
と、花立の花の中へ、トンと置いて、涙も露も一所に成つて、手を合せて拜んだのが——あとで思ふと、恥かしい。其の茄子形は私が見かへられたお義さんと良人とが話合で、お義さんの手で小間もの屋へ誂へたものなんですもの……母様に恥かしい、極が悪い。——口惜いよ、お光さん。と、ひしと當てた又襦袢の袖が、雪の臉に血を流した。

「誰にでもお詫をします……それが悪い事だつたら、——ですけども、見つともない、さもしいぐらるには替へられませんか。……私はね、お光さん、其の人から良人へ寄越す手紙だけは、内證で見ないぢやあ居られませんか。——自分の身體と同じで、尙ほ其よりか大切な良人の事なんですもの、何處で何をして居るか知らないで居られますか、尤も、開封したあとの讀殺ですよ。良人ではね、何處の誰から来た手紙でも、葉書でも、何年にも唯の一枚だつて、棄てたり破いたりほしないのが癖ですからね。

私に見せまいと思つても、お義さんの分さへ何うする事もし得ないんですよ。でも其だけは、もしかを氣遣つて、他に見られて悪いのは、すたくに破いてはありますがね、……火にも灰にもし兼ねるもんだから、彼方の穴だの、此方の隅だの。厚い書物の底の方だの、秘しがくしにして置くのを、留守の時を見計つては、一枚ツて言ふよりか、一條つ……

「お光はして見るんです。字なんかうまいものなんです、女中にも氣を置いて、ぬすみものでもするやうに、其を密と讀む時の私の心にも成つて下さい。……字一つ、紙の切端が、其の時々で、鱗にも成れば、花にも成ります。火のやうに燃えもすれば、氷のやうに凍とする。最うね、私は自分の身體が一分だめしに成るやうですよ。活きながらの地獄ですわ。魔道にでも落ちたか知ら、日に三熱の苦と言ふのは、然うした思ひかと思はれますよ。」

お光さん、御覽の通りの世帯でせう、しみつたれた事を言ふやうですが、一日に一度つゝ、鯛比目魚でさへ息を吐くの、三日にあけず、あの人に茶屋遊が出来ますか。

何處で逢はうの、彼處で待つ、途中の塀にかくれて居ると、日が経つほど段々に、玉章も首尾も果敢く成る、露霜に成る、暗く成ります。……私も、こんなに瘦せただけで、……良人ではまるで青しよびれて病人ぢやありませんか。……秋の夜更けに大川端をうろつくのは我慢も出来る。夏の朝のしら／＼に、日比谷公園で逢はうなんて、其のくらゐなら、何もねえ。私に心中だてをさせないで、疾くからハイカラさんを細君に持てば可い。——私も構つて遣るのぢやあなかつた。

お刺に、臆病で神経やみで、氣轉も、かけひきも知りやしない。

此の春の末、梅雨時分なんかも、續けて出歩いたもんだから、さすがに極が悪かつたと見えて、「何處へ行らしたの」と私が聞くのに、

「活、活動を食べて、蕎麥を見て来た——
は何うですえ。」

そんなぢやあ、お茶屋の柱によつて居るなら格別、裏小路の逢曳は、とほ／＼として危つかしい。……待人の犬に躓つて、怪我でもしうで、はらく／＼する……

女房の前も憚らず、日ぶみ、矢ぶみで大切な亭主を銜へ出して取つ、き引つきは我慢しよう、明方散歩なんて、いけ

すかない。癪に障ると思ふ中から。……あゝ先方の姉さんも度胸はない、途に迷つて居る様子……

まあ、こんなぢやあ何う成るだらう。

私を姉さん／＼と、たよりにして下さつた、お佛壇のお祖母さんには可愛い孫さん——

私には大切な良人。

大切な良人が、恚うして居て臺なしに成らないうち……えゝ、一層の事、私の身體を入交へて、お義さんの身ぬけをさして、内へ入れて一所にせうかと……

「まあ、姉さん。」

「と思つても、手を見れば水仕事で、指の尖はざら／＼する、絲爪はなくなるし。」

「姉さんや。」

「否。」

「姉さん。」

「否、然う云ふが、心の中ぢやあ、矢張り私、あの人をお義さんに遣るのは可厭です。」

お光が泣きつゝ、

「姉さんてばねえ。」

十九

「……お互に、學校を知らない連中だから、口惜いけれども、元祿はじめ、名はオバルだつて横文字は讀めやしないわね……照々光澤のある、細かい字の綺麗な西洋の書物の間で、あの煙管の事が記いてあるお義さんの手紙を見つけたんです——何うしてだか、それが、つい此の頃なのよ。學者でない悲しさに、柔かい日本の本の中ばかり氣をつけて居たから

でせう。

讀めれば其處に、其の手紙なんか秘した處に、戀しいとか、逢ひたいとか、こがるゝとか、鳴かぬ蜚がとか、事ほど然やうにとか記してあるんでせうね、横もじで、……それとも良人の目には、字がすぐに染めた齒に見えるかも知れないし。細いから、あの人の唾毛のやうにちら／＼するかも知れないんです。

「樹はありまして、陰がなく、時間の都合で午に成つて、日が照りました。お歸り途が、お暑うございましたよし——」

と書いてあるんです。

「あれから私は一風呂ざつと浴びました、また瘦せました——」

と書いてあるんです。

「煙管がお氣に合ひ、奥様お喜び遊ばし候よし、御存じの通り私のと對のですから、どんなに私も嬉しいか知れません——」

光ちやん、聞いておいでかい。」

「……」

梢は物と吐息して、

「最うよしませうね、それからね、

「——代價の處を、御心配のやうですけれど、そんな事は構ひません、袋もの屋は懇意ですし、月賦と言ふ事にして置きました。どの道借が少なからずあるのでございますから——」。

お光ちやん、……私は火鉢の抽斗から、細長い箱ぐるみ、……其時良人の前へ、煙管をさちんと出しました。——何さつて、煙管なんです——」

然う言つたの。

氣を打つたり急込むと、舌が乾いて、もう口の利けない人ですからね、茶をがぶ／＼と飲んで居ます。

「貴方には買つて頂きたくつてねだつたんですけれど、お養さんに御心配を掛けようとは思ひませんでした。手紙を見せられた、ハツとしたらしい様子だつたけれど、それをとツこに取るやうな水くさい人ではない。

「可いぢやないか、取つてお置き、私も都合が悪かつたもんだから、……彼方で小間もの屋に懇意なのがあると言ふし……彼方でもいろ／＼お前の氣に入るやうに心配して、どんなのが可からうつて、そりやあいろ／＼、

「お楽しみでしたわね、どうして、弄んで遣らうと言つて、——いゝ處で、お二人で、ひそ／＼と相談なすつて——お前さん、こんなに私に氣を揉ませといて、まだ足りないんですか、足りないの、まだいぢめ足りないんですか。

「何時苛めた、苛めるとは何だ。

「苛めるんです、はぐらかすんです、二人でおもちやにするんです。

「お黙り

「否、否、……」

「黙らないか、——先方は、先方は、深切に——」

「そんな深切は要りません、——私をおいてさきへ死んだ……親の邪険が戀しい。

ツて、つい、くひしめて、私が泣くとね、蒼く成つて黙つて居ましたつけ。

「あやまる、とにかく煙管は取つてお置き、……」

「貴方が買つて下すつたんなら、眞鍮のでも嬉しいんです。……お養さんの、こんなもの、此が罪悪くて地獄へおちても、こんなものは要らないんです……」

突立つて飛びかゝつた——疼くはない、震へて拳ばかり堅くするから、三つ四つ、頬邊を……」

せうやうな人なま

彩色人情本

お光はせい〜と息を切つて、

「兄さんが」

「打つて置いて、うろ〜と見當もつかずに手を支いたのは、——其處を拜んだつもりでせう。……」

「佛壇を頼むよ——」

ツて然う云つて、棚から帽子を引摺つて、出たツ切……

晩には甘鯛のつき加減の食べさして、甘い、と言ふのを見ながら、禪をはづして前垂を取つて、まづ一服、と、ああ、私其の中でも思つて居たのに……」

二十

洋杖の銀の柄を、紺無地の縮入羽織の脇に軽く掛けたが、様子を繕つたとは見えぬ。……縮の製衣はして居るけれど、黒の中古の中折帽ばかり、此の時節に外套もなしで、袖を引合せた肩も寒さうな、手の冷たさを庇つたのであらう。

靴、バスケットの一つも持たないのが、——一雨々々に、年経たる木造の停車場の、さながら鐵に伐つて錆びて行く、濡色の半も寒く、まだしよほ〜と雨垂の落留まない、折からの時雨の晴間を、木曾街道で人の知つた、福島、須原の間の宿——

寐覺の床は聞えたが、山間の僻地は見ると寂しい、上松驛の構内から夕暮籠めてばら〜と溢れて出る、山一つ、里一つ、いづれも隣郷近在の客。然らずんば土地へ歸つた人らしい——それ〜さへ、頭巾も蓑も冬構、結束堅く、鐵胃の如くに見ゆる中に、其男唯一人、色が白いと云ふではない、面の露出しなのが、底澄んだ山氣に曝れ、血の氣を攫はれて白茶けたのが、都會から來たらしいだけ、洋杖一本の風體は、野武士に割れた落人に似て、怒目鼻立の都らしいのがふびんである。

が、それでも僥倖な處へ來た。

いま霽つた、あの雨の中なら何とする。

散々下駄の些とのめつたのに、紺の色も褪せた足袋で、馴れない土地へ、ト踏出して、四邊を視たが、傳らしいものも何もない。

構外の樹形は、雨が流れて、地がさる。

其處を、彼方の隅、此方の隅へ、ちよろ〜と急足に、汽車を下りた倦しい旅人の散る状は、巖を登ぐつた流許を風の走る趣がある……と言ふ中にも、家と家との空地を見れば、すぐにすかりと、黒い山で牙を剥いたやうに迫つて居るから、峰の影を蓬に落して、熊の踞るやうである。

燈はまだ何處にもなかつた。

時に、其の男は、袖を引合せたなりに、片手を袂に突込んで、ものを捜すやうに、目も又ものを捜すやうに——其處等を見廻しながら、がさ〜と遣ると……巻賣の袋の、ぐしやりと挫けたのを搦出して、

「ちよッ。」

と舌打を軽くした。

煙草が最うなくなつて、半分折れたのが唯一本、粉だらけで、袂くさと一所に掌へこぼれたのである。

「可厭なああ。」

——で、煙草屋でもあらば、と思ふ様子だが、總て體裁も此の通りと、煤行燈を軒に掛けて店前に人のない、御泊宿が山の根と、宿の入口に、二三軒向合つて居るくらゐ、正面に土間を開いて、夕雲の下に小さく成つて、居酒屋らしいのが別に一軒、申譯だけに、卓子を据ゑたのがあるけれど、白い切を掛けた々に、猿神に供ふる俎に見えて、然も女の影は見えず、乾固つた蜜柑と、硝子箱のビスケット、ビール正宗の類の覗かれるばかりであつた。

道を尋くにも、人を呼ばねば便宜が得られぬ。

「何うしような。」

袖にした洋杖を、地へ支いて、冷い銀の柄を熟と視た。行方の辻占に、倒して見さうな體であつた。

「持つて来う！」

と背後なる停車場の棟の出口に、忽ち起る野良聲あり。

「あはッ、はッはッ。」

と山に響く高笑。

二十一

と其ともにも、

「うゝいゝ。」と酒のおくびを放つて、高足駄の足はひよろつきながら、眼を白め、腰を据ゑつゝ、其の洋杖でイめる男を、四五尺、横に開いて前へ出抜け状に、じろりと振向いた紳士がある。

土地の紳士である。

たとへば、茶の山高帽を仰状に冠り、黒袖の五ツ紋の羽織、茶縹の嘉平次よれ／＼縞で、毛織子の古洋傘と、二重の折詰、眞白な風呂敷包を、メリヤスと襦袢の薄汚れた左手に提けたが、袴は其の甲にだらりと掛つて、衣紋ぐるみすり脱けた。横つちよなりに高々と腕まくりした右の片手に、ビールの飲さし——（飲さしと言ふ、汽車の中で喇叭をして居たのであるから。）を素振をくれて大手を振つた。年配は五十を越えた薄髯の生えた紳士であつた。

行抜けて、よろりと留つて、斜達に振向いた處を、

「もし、一寸失禮ですが。」

洋杖の男は帽子を取つて會釋した。

「少々伺ひたう存じます。」

「やあ。」

と木の字に立直つた——即ち洋傘を支いたのである。

「こりや、汽車の先生。」

と言つた——相違ない、次なる驛の福島から乗合せて居たのであるから。其處で、

「……何うも、先刻は失禮しました。」

「何の、決して……決して以て失禮な事はない、——決してぢやね。雖然ぢや、汽車の……先生——僕は福島から乗つたのであす、なあ先生。」

「然やうでした。」

「而してぢや、先生は當時既に、先んじて乗つて居られたな。居られたとすればぢや。一目にして瞭然たるものぢやらう。僕が當地方の人間であると言ふ事は、……此處ぢやでなあ。」

と折々ビール罎を突出して、

「僕は某會社創立の宴に呼ばれたぢやが、可うがあすか。うゝいゝ。」と踏躓て、ギクリと踏んで、

「で、然らばぢや、既に豫め汽車中に於てぢや、君が以て問はんと欲する處は問はれて然るべきぢやつたらうがね。あはッはッはッ、先生以て如何となす。」

と、ギロリと可恐しく睨むかと思ふと、仰向いて又笑つた。

「あはつはつはつ。うい、あ、い、心持だ。……實はぢや、少からず所謂對手欲やでな、一言ものを問はれんかぢや、奔流飛瀑三千言、あはつはつはつ——大に木曾の名所古跡を論じようと思つたわい。(ひよろりと成つて) おつと、危い、棧やか……棧や命を擲む葛かつらの如きは鼻息で吹飛ばすぞ。……尊況や、詩を横へ、歌を縦にするに於てをや。棧、寐覺、小野瀧、義仲はもとよりぢや、山吹も巴も共に壯に語らんと欲しましたて、何うちや先生。——君はいやに澄して居られた。殆ど近づくべからざる底のものぢやつたな。」

無論、此の紳士は、汽車の動搖に、右へ左へ、ぐたくと成る……其の都度、えい、と叫んでは股の幅一杯に嘉平次をバツと踏開き、喇叭飲、で、けえ、と鳴し、腕を張つて、ういと噴いて手首をドキンと膝につく、と、もに夥たび、肩を突掛氣味に、じろりくと向うから睨めた體は、餘り近づくべきものではなかつた。

此でさへ、汽車を出た外氣の冷たさにまだ醒めて居る——
 が、慙うと知つたら、無人相などは憚からずに、早く驛員に道を尋ねれば可かつた。

「——何うも濟みませんでした。少し考へ事をして居たものですから。」

「は、あ、——ふん、は、あ、けい、はてな。」

とべろりと舌なめづる。

面倒だ。

「やあ、暫く暫く……御無禮、大御無禮を仕つた。——酔うて居る、酔うて居ります。故に不可んと……不斷、妻が申す……ウイ、御無禮、大御無禮を仕つた。え、——と、けい、……何處をお尋ねでありますかな。」

「見返と申すんで。」

と、名が餘り名所めく、其のまゝ歌に成りさうなのを、や、口籠つて言つた。

「見返……駒ヶ根村、字、即ち見返ぢやな、宜しい。確に相分つた。……其は、此の廣場を、向の角から、ぢかに山の

根について行くぢやな。——相分つた。然らば矢張り、寐覺の床を御見物でありますな。」

「見物もとに角ですが、一寸訪ねます家があるんです。」

「お訪ねの家と……宜しい、確に……いや、些とも相分らん。何と申す家ぢや。」

「御存じでせうか、苺屋と云ふんです。」

言の下に、

「はあ。」

とぐたくと胸を揺つたが、忽ち肩を揉んで、仰向けにぐいと反つて、

「辨天の住家ぢやな。」

と、じろりと凝視める。弄らかすに相違ない。が、憎いはぐらかし方ではなかつた。洋杖の方は眞に受けて、

「寐覺には、其の御堂があると聞いては居ますが、直ぐに參詣に參るのではないのです。——苺屋と云ふうちを承り

たいのですよ。」

「やあ、君——汽車の先生。」

とついと折詰の腕を張つて、

「そ、そ、それぢやよ。其の苺屋なるものが即ち辨天、はつはつはつ(とけろりと成)——帝大出の文學士、目下は東京駒込に於ける、日灼學校々長苺屋周藏氏出處、搖籃の地だ——其の、其の在所であります。先生お訪ねなさるのには、

「御存じですか。」

がくくと頷いた。

「即ちぢやな、老御堂堂と、もに留守を守つて居らるゝ、苺谷夫人、……即ち周藏氏の細君の事ぢや。辨天と専ら稱へるのは……は、思つても御覽なさい。其は盡く以て美人ががす。」

と言つたかと思ふと、急に澁さうに口を歪けつゝ、額で撓めて、また目を据ゑた。

「君、先生は、貴公は、其の周蔵氏が留守と知つて、而して後に对屋家を御訪ねかい。」

「はあ。」

「……はあてな、いや、勢に乗じて、べらくと饒舌つたが、先生は誰方ぢやな、君は……此は既に豫め以てお聞き申さしやあ成らんぢやつた。——ウイ、——第一着にな。——人にものを、お尋ねなさるに、何が故に御自分お名乗りなさらんと、先づ最初にな、はッはッはッ、ウイ、……誰方ぢやな先生は。」

怒る土地柄の事である。どんな事で、ふと訪ねる方の知己縁類でないとも計られない。……

「横と申します。」

と酔漢に對して、丁寧に言つた。

扱は……禮之介は渠である。

二十二

峰の薄雲、木曾川の流を映して、中空に漾ふ下に、禮之介と思へば紫の影、煙管の幻が早と映る……が、其の茄子も風落ちて、時雨に暮れた一人旅……

酔漢は、がくりと成つて、山高帽子をまともに下げ、

「やあ御無禮——酔拂ひの雑言に對つて、然やうに然も御丁寧にお名告を蒙つては、強い何とも恐縮ぢや。……僕もなのります。……速かに申上げる。が、更めて申上げる。さ、此へ——お知己のしるしに一杯獻する。うんや、獻する。——然り而して名乗ります。……何うぞ此へ……」

と、よたく……戸惑をした幽霊の誘引が如く、件のビール罐で、恚う斜かひに手招きながら、よたくよたく……

「此へ、やあ君、此へ。」

胸を開けた、後退りに、ひよろ／＼とまた成つて、眞向うの白い卓子の店へ、する／＼する、どかんと尻から入つたのが、谷へ落ちて行くやうである。山々の深さ大きさは、つい鼻の前の人の形も遙である。

横はついて行くふりにして、衝と泊宿の袖に隠れた。

「おゝい、君、汽車の先生。」

と向うでは、一旦腰を掛けた椅子をむく／＼と撥起きた處を、其の時分漸と顯れた庇髪で塗つた婦が、頭は庇だが、九字を切るやうに、合はて居た袖の印を解いて、酔漢の背中を掌でトンと當てると思ふと、ビール罐が轉頭つて、折詰が宙に踊つた。洋傘がぐるりと輪に舞ふ。

あとは知らない。

どツどツとツと汽車が出た。

横は略見當のついた道へ、——そして、其までうつかり手に握つて居た蕘の袋を、爪先に浸すばかり低く走る流れに乗つた。

誰が手に清めたとはなけれども、山氣はおのづから澄んで埃をしづめ、雨のあとは土を洗ひ、石を磨いて、唯落散つた木の葉のほかは、蓋に乗つるもの、目に立つ芥と成るのを憚つたからである。

あれに、山々、偉なる山の背に、入りが染めた金色の雲を掛けた、薄藍の峰は駒ヶ嶽、奥に白いは御嶽であらう。漆したのも、灰色なもの、青いも高く重つた。

前途も墨の山である。

横は初対面の衣紋を直した。

廂の低い、柱の暗い、店頭の縁臺に、黒く成つたきざ柿と、乾からびたうで栗を笊に盛並べ、草鞋を釣して、同じ柱に

鮎、やまめの、夜は光を放ちさうな真黒なを、すく／＼とさしてある。ト土間の隅に、人影がほんのりして、ほつと白い顔の寂いのが一人居た。

が、此の際、それよりも目についたのは、谷に一枚、断つて、真紅な山蟹の這出したやうな、葉煙草の看板が反對の山の裾に、家並を五六軒かけ離れた小家の腰障子に描かれた事である。

停車場を起點として、一寸した軒並の其處が丁ど出はづれらしい。

取着の、御泊宿から、兩側に、下駄屋、小間物屋、菓子屋、荒もの店、古着も釣した小さな反物屋——下駄屋の店にはつま皮が並び、小間もの店には薬の看板、化粧品、淀屋の煙草入……筒持のには、不思議な青玉、怪しい珊瑚さへ交つたが何處にも煙草は賣つて居ないのに、ふと見つけた煙草屋は、呉服店の友染の時雨だより、草鞋の陰の白い顔より、此の山中に鮮麗であつた。

飛びつくやうに、其處へ立つ——とまた、事も明白に、板敷の店の真中に、硝子戸の、煙草一通の箱を置いて、上に燐寸の包を重ねたほか、がらんとして何も無い。

「煙草をくれませんか。」

「一寸……」

「おまけに人まで居ない。」

「煙草をください——御免よ……煙草をくれませんか、——御免、煙草をくれませんか——煙草ですよ……」

「ちよッ……」

舌打ちなんぞして追着くものか。

「弱つたなあ。」

前途を見ると、銚色の濡れた道が、石と噛みく、一方はがつくりと田圃へ落ち、一方が高い崖に添つて、爪先あがり次第に薄く、やがて深い霧に入つて行く、——木の葉も、枝も、露霜も黒く成つて、燈火一點染めたほどの色も無い。藪も樹立も處々に、ほつと煙つては居るが、伸上つても家らしい屋根は見渡されぬ——目の前を走る谷の細流も、早や遠くの方からさら／＼と湧いて寂しく響く……

「當がない、……煙草を買ふのに。」

先刻の廣場の飲屋まで、戻ればもしや、とは思ふが、あの酔漢を何うしよう。

「……祟られたかな。」

横は啗然として胸ヶ嶽を仰いだ。

方角は知らないが、恰も其の峰が高く遠く都を遮つて居るやうに見える。

「煙草——」

と呼棄てに出ようとしつゝも、未練らしく立淀んだ時である。

其處へ、もと来た荒物屋の草鞋の陰から、色の白いなやかな婦が出た。

ほつれたまゝの圓鬘に、薄桃色の手絡が幽で、大嶋まがひの目立たないのを着て、襟はかくれた。かるさんとか、もんべとか言ふ、裁袴の形したのを穿いて居る……此の邊の山家其のまゝの風俗で、其がなよ／＼して見えたのであるから、すらりと装つたらどんなであらう。

紺の風呂敷包の、大分に嵩のあるのを、しなやかな肩に掛けて、襟へ取つて引結へた、むすび目の、ふつさりと乳のあたりへ垂れたのさへ、此が當世の肩掛だつたらうと思ふのに——咽喉をくびりさうで疼々しい……

重さうにうなじを垂れて、骨太な番傘の、すほめても持餘るのを抱くやうに兩袖で抱へたので、荷の重さの釣合を取るのであらう。

唯、吾妻下駄らしい、其の新しい爪皮ばかりが、濡れた淺葱で際立つて、然も鹿の子で、媚めかしくも、床しく、胸前へ影が映すまで、色に出て目に立つた……麗々と並立した、いまの下駄屋の此見よがしの爪皮の中にも、鼻緒にも、不思議に此の色は一色もなかつたから。

「先生……」

「あ。」

横は聞耳を立てた。

小間物屋の軒から、ちよこくと駆出した、赤毛を堅い庇に結つた、十二三の女の子が、其のもんべ穿いた圓髷の呼んだのである。

丁寧にお辭儀をして、何か早口に言つて又お辭儀をした。……其の言ふ事は聞取れなかつたが。

「難有う。」

と其の婦は、細く透る、まことに優しい聲して、

「否、可いんですよ。」

と一寸結びめを壓へて言つた、手の白さ。

「重くはないんですよ。」

と、小女の顔を見て、嬉しさうに莞爾したが、涙ぐんだらしく、瞬間の面影は露を誘つた花のやうで、尙ほ美しさが勝つたのである。

又……學校でするやうに、きちんと恭しく膝に手を下げた小女に、靜に會釋して、別れて、淺葱の鹿の子が靜に近寄

る。

とまで、うつかり見て居たので、忽ち向直つて續け様に呼んだ。

「煙草をくれませんか。何うしたんだ、煙草屋さん……煙草だよ。」

「あ、貴方。」

「は。」

と言つた。が、思ひ懸けない、其の優しい、しかも落着いた聲を掛けられて、慌氣味に、一寸驚いたやうに顔を見た。見られて、薄色に透る、色を、淡く陰に染めながら、

「あの、誰方もお見えにならないのでございますの。」

「これは……何うも。全く煙草が欲しいものですから。」

「さつきから、大分お呼び遊ばして在らつしやいましたんでございますね。」

「お喧しう、……何うも相済みません。」

「あ、貴方。」

「一向土地不案内なものですから、何うもおやかましくございました。」

「まあ、貴方。」

二十四

「いや、何うも……」

とばかりで、横は用もない袂の手巾を探つて、

「しかし、最う結構です。何、可いんです。多分、誰も居ませんのでせう。」

「でも、折角、貴方。」

と横の傍を静に一寸軒下へ出抜けながら、

「裏かも知れません。……誰か居ますでせう。」

と、其の優しい婦人は言つたまふ——此が更めて、見て上げます、とても言ふのだと、其の柔な肩に、ぐい、ぎしくと重量の掛る風呂敷包の荷につけても、勢、遮つて辭退も斟酌もすべき處、眞の深切は口よりも身が動く——婦人は、いまま然う言つたまふで、煙草屋の廂はづれを横手の羽目、傍が内だけの用に充てたやうな、大な菜の葉に、ほつん／＼の葱の坊さんが子を捉ろ子捉ろと交つた、畑は可いが、歩行く足場に肥料桶が遠慮なく出してある。其を、厭はし氣もなく、すれ／＼に通つて踵の白い後姿が件の荷もつに押れて行く。

足許の小流が、むくりと裂上るやうに冷たく流れて、音はさら／＼と寒い風を誘つて鳴つた。

膨れた顔を仰向けに、暗い天井を薄目で睨んで、両手を懐中に、布子の下で、其處等中を、ごり／＼と掻き／＼、血肥りに肥つた大女房。

「おいでなつし、何上げますね。あゝ、あゝ」と欠伸する。

「敷島を三個……」

と言ひながら、ついと横手へ目をひかれたのは、裏からすぐに、山の根を、其の菜島のうしろをむかうへ通る、うつくしい鳥のやうな同じ婦人であつた。

とのみで、間が一寸離れたから、頓興な聲を出して、此方から挨拶もされず——半ば無意識にたゞでもくれるやうに大女房の邪険に押着ける巻賣を受取りながら——見送ると、畑の一方へ出張つた同じ山の樹の雑樹の崖下へついて、ものゝ半町ばかり、横が行かうとする前途の通り路へ出るのであるが、深い水が、ちよろ／＼と其處からも一條道端へ流れて居る。

で、……いま、我がために、廂合の肥料桶を厭はなかつた、其の功德によつて、婦人の戻道は、水に清められたものゝ如く、淺葱爪皮は、碧瑠璃の珠の履を穿いたやうである。と思ふも身勝手。

しかし、また目に立つた。

婦人は、一廻りして、道へ出しな、會釋をする心か、振向きはしないが、軽く圓髻を俯向けたやうだつた。が、其のまゝ、山路を獨り行く。

石、泥の荒れたる道、梢はすいて、根に残る、夜も其處からの黒い木の葉に、はら／＼と色に出て、濡れた淺葱は……又媚かしい。

すうと伸ばせば、肩へも背へも、追着くほどの距離だつた。

が、其は何となく憚られた。

横は禮心に、其の場も動かさず、腕を張つて、したゝかに煙草を吸つた。

「持つて来い……」

低い屋根ならびの空を隔て、いま着いたか、出ようとするか、むく／＼と立騰る、機織車の魔法で噴出す、煙なんぞに術を較べて負けるものか。

まして況や、煙草屋の化女房の、消え際の如きは眼中にない。

二十五

風も告らず、暮の色は迫つた。駒ヶ嶽の背にたなびいた金色の雲は、雲の斑の一つ／＼、眞中を残してまはりは颯と鶏卵色に薄く成る。左右に、前後に、仰ぎ又差覗いて、曇る山は灰汁に晴れたのは藍に、澄めるは青く、暮れんとするのは

早や暗い。

と視ながら、横は爪尖上りに道を辿つた。なだらかとは雖も、崖の雜樹の出入りにつけて、婦人の影は最う前途に見えぬ。

其を鹿の通路で、こゝを、あの白い足、淺葱がちら／＼……と思ふにつれて、木の葉が腫を呼んで、行く／＼幽艶なる色を露す。

露、霜、雨に朽ちて、唯黒く積り、灰色に落ちたと、一わたり見た目も、慙くて注意を促さるれば、それ／＼に艶である。縁を赤く残して、中の破れたのがある。中を紅に染めて、縁の残つたのもある。腐蝕が櫻貝のやうに見えるのもあれば、裂目が蝶の翼を容つくる。……蜘蛛を銀で鏤め、松蟲を烏金で象嵌する……

——中に、缺けず、裂けず、もみぢの葉の完くして、真紅なるは、皆小さく、恰も紅玉を刻んだやうで、落溜つた落葉の堆き底に、宛然黒髪塚の中なる、燃ゆる心に似て居た。

「あゝ、綺麗だ。」

一枚手に捧けたのがあつた。……漆の艶も濡色に濃く、深く縁を刻んで、さび一つなく、中が楓の葉の形に燃立つばかり紅である。透かすと——其の染分けた割に、四邊の嶽々、峰々の、藍も、青もすら／＼と透徹して、葉の筋は、目のあたり、駒ヶ嶽の雲の金色を、其のまゝに黄金に蒔いた。

「……真個にするだらうか——知らないものに、繪を彩色をして見せたら……話をしたら……」

横は奇蹟を觀て、神祕を感じる如く、且つ翳し、且つ透し、空に裏表を覗しながら、片手を上げて浮か／＼と成つた。「お柳(妻、梢の事)は秋がすぎだつけ——然う言へば柳橋も……」

ハツとした。忽ち、裂くが如き水の音。

足は激流にのぞんで、爪に橋の袂が掛つた。岸、左右に巖を削つて、槽も漆も倒に生ゆるが如く、磊々たる石青く、暗き谷を、矢の閃めくが如くに流るゝ、谿河がどつと道を横切つたのである。

横は思はず退つた。

左手の岳の小高き處に、青五輪と古塔婆が立つて、松が一株寂しく植つた。……其の下に、葎かと思ふ破傾いた草の家が一軒甍低く、穴に似た奥に、ちよろ／＼と焚く爐の火が漏れて、煙は軒を騰らず、迷々として却つて屋根の草に浸む。

「此處が見返り橋と言ふのかも知れない。」

殆ど一軒家で、見渡した處、問ふべき家は他にはなかつた。

「あ、何處へか。」

心着くと、……凄い流に一鷲を吃したトタンに、何う落したか其の木の葉を知らない。

それに、いま葉を翳しながら、どんな風をして、榎焚く此の家の前を通つたらう。

横は且つ惜み、且つ恥ぢて、逡巡しながら、たそがれの其の一つ家の軒に寄つた。

一段低いので、がくりと成つて、又吃驚しつゝ、慙う覗くと天狗様やら、狼やら、人形の首のやうな杓子やら、朦朧として異形な姿のあらはれた、幾枚かのお札の傍に、やゝ形に出て新しく、目に立つ札に、(獵師)として、岡宅平と認めた——獵師……と山暗く、故郷遠く見られたのである。

二十六

「前刻は何うも——お底様で煙草にもありつきました……」
と横は敷島の袋を見せながら言つた。
それも、親みを表はす一つの手段だと思つたが……

「全く、奥さんとは思ひがけませんでした。何うも失禮しました。しかし、何ですか、此が當前で、然もあるべき事やうに思はれて成りません。」

と其も此も一齊で……口早に挨拶するのが、山々の夕暮の影が、麓の霧で一度中絶えて、また、菜、大根、葱の根から潮のやうに湧いて擴がる、畑續きの、此處が背戸で——居室が二間竝んだ縁側を横にして、先刻の婦人と向合つて立つて居る。

「お見それ申したと言つては嘘に成ります。菊屋君とは、まことに不斷誰よりも、御懇意を頂いて居りますけれども、奥さんは御結婚——間もなく、此方にお留守だもんですから。……それに……」

と一寸言流んだ。——（談話はいづれ出ようが）——高島田に鼈甲の花櫛、花笄、裙襖様の振袖で、嬢嬢に唯さしうつむいた菊屋周藏氏——新夫人利佐子と知つたのが、もんべ袴に、いまも着て居る——紺緋の筒袖、且つ背負荷もつに、抱へた番傘。餘り變つたと思ふのを憚つて、胸に疊んで黙つたのである。

利佐子は白い指さきで、其の上被衣の襟を刻んで、

「は、あ、あの。」

と何やら心急いだやうに、然も内端な會釋を、——此處で顔を合せてから、二度三度繰返した。其が……

「は、あ、あの。」

とばかりなので、……思ひ掛けない客に氣惑ひして、含羞むとのみは思はれない。——あの、靜だが優しく透る聲が、何故かかすれて、恚うじれつたく柔かい咽喉に引擽る。

で、あ、あ、と何かあとを言はうとしては呼吸せいで、空咳きに紛れるやうで、何故か、切なさうに見える。

「で、何は、御機嫌よく、おかはりありませんで。」

「は、あ。」

とほつと薄皮の臉を染めた、が、情愛が色に出たばかりではない。聲の掠れるのを、惱むらしい。もう、此の時は、軽く顔を横に振りつゝ、指先で咽喉を擦りさへしたのであつた。

唯見はしたけれど、黙つて顔ばかりは見えて居られない。

「突然に生まれて、飛んだお邪魔をいたします。」

「は、え、え、え。」

何うも弱つた。

氣易く、少し笑ひかけて、

「菊屋君とは、あんなに御懇意にして居りまして、まだ一度も此の御郷里へはお供をしません。まるッ切はじめの土地だもんですから、御存じの通り、大まごつきにまごつきましてな、此方様も、何でした。あの、橋向うの一軒家、——岡宅平。……」

獵師としてありませう。獵師は珍しいので、名もよく覚えましたが、が獵師と言ふのが船頭と言ふのと違つて、何ですか、心細いやうで、

と胸にある事を、つい喋舌つて、

「其處で、尋ねましたつけ。よく教へてくれましたのに、畦道を取違へたと見えます、こんな裏口から、……」

「は、あ、あ、え、えん。」
と幽な咳までして、今度は明かに、何故か切なさうに血を染めた。
いや、何故どころではない。

停車場から、やがて半道はあらう。……だら／＼のほりを、あの荷を背負つて歸つたばかりでも大儀は思ひ遣られるのに――いましがた獵師の家で、場所を尋ねて、橋――矢張見返橋であつた――を渡つて、右へ畦道へ切れて、畑中を來るとほけ立ち、亂伏した尾花越に、一つ孤屋の屋根が見えて、白壁の蔵はないが、下屋を藁に、棟と瓦の交造――教へられた通り、其が紛ふべくもない苧屋の家と思ふ。裏手に森を抱いて、流の音が鋭するやうに響いた……其の森を離れてまた菜畑へ見える中を、荷で水桶を兩方に荷つて來る婦人があつたのである。
間は離れたが、春恰好、ものゝ様子が、先刻の婦人に寸分違はぬ。絶對とは言ふまじきが、容色、もの越、小間使にも婢にも、あれだけの奉公人があらうやう譯はない。とすると、

「細君だ、や……細君だつたか――利佐子さん――」
親友の妻であるから、名も、年紀も、其の生立もよく知つた。

「が、あれは何うだ。」
天秤棒で水を汲む。――ぎよつとしたが……

「苧屋の辨天……」
いたはしさもいたはしけれど、美しい人の其の姿。實にこそと領かれて、土地で辨財天と風説するのを思ふにつけても、細君が自ら、あゝして、水を荷ふのではなしに、寐覺におはす、おなじ名の天女が、こゝに頑健にして、強情我慢なる人の知つた姑に事ふる、嫁御寮を憐んで、かしこくも身代りに立たせ給ふ……われらも、面影に導かれた……淺葱の玉の服のあと……

二十八

唯、其處に、折伏した尾花にまじる芋苗の中に、戸惑をした兜蟲の如き、黒の中折帽を露に残して、彼方に水擔へる婦人は樹の下になびいた霧の中にかくれたが。

「御免下さい、御免下さい。」
辿りついて、音訪ふ聲に、

「あ。」

と云つて、廂の横手から、ばらくと出た人は、瓔珞も掛けず、天衣も曳かず、もんべ袴のありのままで、しかも素足に摺切れた草履である。これではなくては擔へまい。

無理な力業に胸が挫けて、さそくに聲の出ないのは、何故どころでない、――其のためである。

横は目を外して、舊來た小山の上の、あの寂しい松を視た。偶と、其の枝に釣される照手姫を思ふと同時に、大慈觀世音の御身がはりを念じながら、やつと一息して、

「御萱堂は……何、御老母はお變りもありませんか。」
と、妙に聲さへ低うした。

「お利佐あ。」

驚破呼ぶ、しやがれ聲が。

「利佐よ。」

あゝ……呼ぶぞ、猫魔が。
「は。」

此に利佐子は音を立て、

「唯今——あの、御老母は、一寸風呂に入つて在らつしやいます。……はい、唯今。」

と手敏く、筒袖の紐を解くと、めりんすの、萎びた帯の折目に、あはれや、もう、紫の色の褪せた褌を用意に挟んで居て、

「御免遊ばせ。」

片手を、白く濡らすうち、片手は最う、一寸丸けて、その上被を縁の隅。

「……すぐに、お目にかゝりませうし、あの、御緩り……まあ、とにかく……」

と後や、前。そのうちに又可厭な聲。今度は、底力をねつくりと引いて、

「利佐え、ム。」

と呼ぶ中で、ぢやぶく、成程、ぢやぶく、廂の裏と思ふ處にぢやぶりく、と谿河の音には似べくもなき、生ぬる

き、音を立てるのが、猫魔の舌舐する氣勢である。

「あ、容易な事でない、細君は、肉も皮も喰散らされはしないだらうか。」

横は、利佐子の駈出したあとを、猛獸に魅込まれて、毛を憎かすやうな片隅の其の緋の筒袖のしをたれたのを視ながら

利佐子が、それを脱いで置く時、褌をちらめく雪の腕に、うつかり持ったのを縁に落した、中折褌の傍で、とほんと腰を

掛けて悄然とした。

駒ヶ嶽は暗く成つた。

「やあの、ごしくごしくと、のえ、——これ、力を入れるだけや。」

は、あ、背中を洗させる。

「極り處は、ちやんと極つて、のへ。柔かいばかりが能ではねえだに、のへ。東京のお客様ござつたば、婆々もめかさ

んば成るまいし、ふあつはワ。」

「南無、觀世音。」

横は思はず佛を念じた。

「のえ、のえ、——のえ。——あッ、あちッ、ちッ、ちゆッちゆッ、こんれい加減をせうてばえ。親を煮るか、のえ。」

「……………」

「ふあつ、はワ。和女がのは邪険でねえてば……邪険でねえだで許すだい。行届かん、不束ばいの。のえ、のえ、よう

氣を着けるだえ。」

「……もし。」

「は。」

横は呼覚まされたやうに、利佐子の顔を視た。

「あの、お老母が申されます。何うぞお上り遊ばして、」

「否、出直して参ります。」

「あれ。」

「勿論、出直して参りますが、一度失禮を致します。」

「貴下。」

「實際はじめから一旦旅籠を取りましてな、……それからと思つたんですが、まるで様子が分らないものですから、此

方で伺つて、と然う存じて……」

「利佐や。」

「はい、く、……まあ、貴下、飛んでもない……」

「お利佐よ。」

「はいく。」

とまだ掠れて。

「あ、屹と更めて出ますと、然う何うぞ、然う何うぞ、と絶呼びに、言絶つて、

「……弱つたなあ。——」

「——あの、貴下。……あんなにお親しく遊ばして下さいます、お友だちがお出で下さつて、内へお泊り下さいませんでは、何うしませう。お老母も申されます。私も濟みません。」

「否、決して、……然う言ふわけでは。」

「何うぞ、あの、とに角、お上り遊ばして下さいませ。こんな旨い恰好をして居りますから。……唯今、足を洗ひますと、お火鉢をお取り申します。何うぞお上り下さいませ。行届きませんから私が吐られます。何うぞ、私を可哀相とお思ひ遊ばして。」

横はしめやかに聞いて、ほろりとした。

「どうかい。」

と、のさりと廂の裏を出て、

「こいシよ。」

と一つ、掛簪をした姑は、澤庵のむれたやうな湯氣を立てたしみだらけの丸裸體。が、——紺の布子を、皺手の張腕に客の方へたくしかけたので、や、身の半ばの、脇の下から腰少し蔽うたのみ、へちまに似た乳を露骨に、七十に垂々たるのが、何處へつける禁厭やら、まるけて持つて其の布子の中に、汚れた赤い切を少々、不氣味に湯氣にだらけさせつゝ、

ちよんほりとした切髪をびよと振つて、頭を出して、首を据ゑたなりで、ト出て客に向つた時、ひよいと、手拭を肩に掛けた。其のまゝ、又横向に首を据ゑて、角を取つたもの置の土間で足駄を脱いで、木臼を轉がしたやうな踏段を、
「や、どうかい。」
と、跨ぐ時、……餃のやうな尻の皮をふはめかせながら、次の室の壁際を、のいゝ、たそがれの納戸へのたりと入つた。

二十九

湯上りの薄化粧……縞の寝衣にぞろりと成つて、若々しい淡紅色の披帯を、胴をくびつて、緩かに腰に結んだ。圓籠の利佐子の姿を——此が堅氣でなく、否々堅氣でも主人が日華學校の校長で——それも宗教の學校でなかつたら——もう少し、委しく明かに御目に掛けたい。
寢室の電燈の三燭の、剩へ木曾山の暗い事……
部屋は、禮之助が暮方此家へ音訪れた時、其の縁の外に立つて居たのと同じ、廣い方の八疊で、其處に、寢床が二つ並べてある。樟腦の薫がする、敷布は掛けずに、對の友染の、花模様揃つた處は、細君が當家へ嫁入の調度に疑ひない。實家は松本に、名のある料亭旅館だと言ふ。此の一组は納戸の長持から取出された事を、禮之助は、それとなく知つて居た。
尤も、姑が手傳つて、二人で抱へては、二度、三度、利佐子の方は、其のふうはりとしたのを胸に、恰も花の雲に乗るやうだし、姑の方は鉈で櫻を伐るやうだつたが。——此のあたり、山家の寒さは、爐端に居ても膚に透る。樽あかりに燻つた。茶釜の黒さ、松の古根の時雨るゝばかり、冷たい谿河の音も通ふのに、筵に浸みた灰の色は、火に向つて霜を結ぶやうであるから——入交りつゝ運ぶ其の夜の調度も、我のみに設くる厚衾か、と膝を薄くして覗いたのであつた。

いざ、寢床へ、と成ると、枕もところ隙はあつても、びたとついで、殆ど八疊一杯に、……かの雪鈴と言ふ難處を越えて、辛うじて生命がけで視ると聞く、高山絶所のお花畑のやうな、對の褥に一驚を吃したのである。

勿論、其の一方のは、姑のためのものでは決してない。姑の床は別に敷かれた。場所、枕頭の床傍の二枚襖の蔭に成るに——方角は鬼門だらうか——佛間らしい小部屋であつた。寝しなに、其の襖から立身で覗いた。……古布子の裙はだけで、可恐い事には、舌のやうな赤いものをちらりとさせたが、得體の知れない、幅廣な紐をだらりと下げ、黻手に、長羅宇の煙草を構へて、

「や、御免され、俺は早や臥りますまい。」
 「は。」
 の爾時、禮之助は、……桐に鳳凰、櫻に短冊と言つた形で、友染の對の夜具の、とにかく坊主枕のある方へ、かたく成つて附着して居ると、

「のえ、横しやアん。」
 しやアんと聞える、ふはくくと頬邊を揺笑して、

「屏風さ、のえ、此處と此處とへ。」
 折から爐端で、まだ片づけものをして居た、利佐子が來べき塗枕と、襖際とを、姑はトン／＼と煙管でたゞいて、

「のえ、隔てに立てべきでんするが、縁の方から風が來るでや、裙の方さへ建てたではえ。」
 成程、其處に六枚屏風。で墨繪で描いた仙人が朦朧として此方を下り目でニヤ／＼と不氣味に笑ふ。顔が押附いて並んで居るのを、和合神かと思へば、箒を持つてるやうだし、寒山拾得かと視れば、遠くの山の端に、鹿だか、飛出した人間だか、ものゝ怪しい形がある。鐵柵にしては本體が同じ處に二つある。

給の方はよし、それは化ものでも仔細ない。
 が、猫魔でない、白髪が、仔細らしく矢張りニタ／＼と立つて居て。……

「ふアツ、ふアツ……横しやアん、餘所他の姑は、のえ、若いものと、老人の寢所の中さ屏風で割るが、のえ、夜半何程でも其の屏風の上から顔を出して覗くと、のえ、俺が流儀は開放しぢや。」

胸で掬つて、衣紋を抜いて、
 「開放しぢやと言つて、襖はちやんと閉めるんでする。しめた上にのえ、枕は彼方だてばえ。」

と横向の頬邊に、また可厭らしく笑を含んで、件の煙管でついと指した。寢床の位置は、佛間の其の姑の足を、此方に寝て細君が圓髻に頂く事に成るのである。

「のえ、横しやアん——氣の通つた事は、御本陣の天井板のやうぢやろがや。悴が寝る時も此通りぢやてばえ、——なあ、悴え！」

と其の悴を、干鱈の骨を搔しやぶるやうに、嘎れて且つ、筋張つて言つて、
 「のえ、横しやアん、返事せうてば、……なあ、悴え。」

「は。」
 とばかりで、すくんだ頭を、横は其のまゝ俯向いて、

「おやすみなさい。いろ／＼何うも。」
 「いろ／＼利佐と話さつしやい。氣の通つた事は、御本陣の天井板ぢや。……なあ、悴え、返事せうてばえ。」
 「は。」

と又言つた。——實は——周蔵と兄弟同様の親友であるから、今夜は棒が歸つたと思ふ、「棒と思つて宿をする。」然う言つて、姑に引留められた次第なのであつた。

一體考へて見れば、禮之助も些と蟲が可い。此の姑とは、東京に居た時からの知己で、其の頃は、周蔵が、禮之助とも卒業前の大學に通つて居て、……二人は言ふ通り親しかつたが禮之助の方は、はじめから此の姑とは反が會はない。何處か、女學校へ通つて居た姪だと言ふ女と母子三人ぐらしの住居へ、一週間に三度は缺かさないうで遊びに行くほどで居ながら、周蔵が留守だと聞くと、聞いたばかりで、禮之助は玄關から遁けて返つた。周蔵さんはお留守でございませうが、唯今」と姪が老母に取次がうとすると「決して、決して」と後退りをして門を出る。遁けやうが遅いと、垣根にも、辻にも、まだ身體のかはし切れない前に、老母が黒く成つて門へ出る。また可恐く話すきで、つかまつたら最後だ、猫背の顔出し切髪の額で睨んで、長煙管で拍子を取つて、トンと拂いては、灰吹の蓋を一々取つたり蓋したり、で、神道、佛法、唯今未法、後生安樂、仁義禮智立身出世、米から天氣、物價高値、十三代前からの苧屋の系圖に到るまで、息も吐かせずまくし懸ける。それ、此を恐れて遁ける奴を、「こんれ、待ちせよ。周蔵さん今に歸るべい。」で——「横しやアん——」だ。唯——「は、は、は。」とばかりで、遁け狀に、千の矢さきと降かゝる、白髪の影を追ふ如く、帽子をくるくると廻しながら、洋杖の捨鞭で、砂利を乗切る例が数々あつた……と云ふ次第で。

梢のお柳が、お光に話した——其の事情で、家を驅出したまゝの禮之助は、ひとり心に思ふ仔細あつて、周蔵の故郷を訪ねるのに、旅費らしい用意も持たず、支度一つあるでなし、泊も宿も、實は此の苧屋の家を志した。で、蟲のいゝと言ふ事は倒れ伏すとも秋の原、婆々は化けても軒の夕顔、あからさまに言へば黒塚に咲く女郎花で、面影ばかりも、新妻なる利佐子を心だよりにしたのであつた。

が。最う、姑が、あの襷がけの白い手に、湯の垢をかゝせて、あちゆツ、ちゆツの時分には、洋杖と、もに足をあとへ引いて居て、皺だらけの半裸體が、湯氣を立て、顯れたのを見ると、蛇身の惡氣を拂ふやうに、帽子を胸に廻して居た。——けれども利佐子に引留められた。

灰も冷い火鉢の前に、悄然と座に着くと、利佐子が焚落しの僅ばかりの火を、佗しさうに持つて来て、しかし炭をドンと糺いで、折から颯と通る風に、所帯崩して、熾す處へ、姑が帯をしめて出て来て「こんれは、横しやアん」と真中へどかりと坐ると、横が手をついて挨拶するのを横目に見ながら、利佐子が炭をおさへつゝ、顔も横に成つて吹いて居た火箸を、ぐい、と引たくつて、じろりと目配せをしたので、何やら支度に利佐子が立つと、まだ後、妾が襖際を隠れぬ前に、搔發つて、打撒けて、積んだ炭を、ぐわしやくに突崩して「こんな事で火は熾ろかてば——何と云ふ不器用つらあえ。」聞けがしの獨言で、積直す下から、ごそくと疊の暗まぎれに、炭を炭取へ引戻すのを視て、第一番に遁けたく成つた。次には、晩の支度が出来て、此は、更めて爐端へ呼ばれた時であつた。横が何心なく楷火に繞るやうに、あいた處に坐らうとすると「やあ」と留めた。姑の引拂ふ手がぶるくと動いて「横座ぢや、其處はえ。先に逝かしやれた俺が旦那か

のえ、いまの周蔵か、のえ、苧屋家の主人でなうては、はい、誰様でも坐るべきでねえです。其處さ嫁が歩行いても、主人の頭を踏む同様に成るでんですてば。ふアアと、あとをさまして、「東京の借家なら構ひまつしねえと、いま、のえ周蔵の力で——一旦微祿した家邸を再興中の、瘦せても此が苧屋家です、横しやアん、田舎はものは堅いてば——頑固のやうぢやが禮儀が正しい。貴方も、のえ、腹さ立てすと、書物の外の學問ぢやで、のえ、……さ、客座は其處でんす。——はい、はい、何もござるませんねど、澤山まるつて、はい。」と言つた、横は見當違ひの腹を立つより、利佐子の其の時の心を思つて泣きたく成つた。

膳、椀は南天の實と、百合の蒔繪で見事であつた。が、ぜんまいの煮つけ。生のまゝで、ざくに切つた青芋苗の酢浸。串ざしの山女の焼もの……までは、論ずるものはないが、惱まされたのは椀の清汁で、鹽出しの田螺と金魚鮓を種に、満々と汁を漉へた、蓋が、泳ぐばかり波を打ちつゝぬるくして且つ惡甘い。東京ものゝ口に合ふやうに「俺が加減をした

てえ、さあ、かへてのえ。」と言ふ、もう一品、姑が自慢の早吸ものと稱へて、酒の肴にも飯の菜にも、此のくらの鹽梅のいゝものはない、世帯持は且つ覺えて置けと言ふ日附で、と見ると、澤庵を賽の目に刻んだ奴に、湯を注込んで、椀でむらした奇品である。臭く變に臭つて、ぬる／＼といきれた加減が、たとへるも可憐い。湯上りの其の姑の乳首をしやぶるやうで、口許へ持つて來ると忽ち其の舌が釣つて、自から、目が白く成るやうな氣がして、けつと言つてこみあける。

「あゝ、東京の内に居れば、たしな世帯の、八杯豆腐の惣菜にも、梢が煮出しを引いてくれて、木皿で一寸加減を試みて、味醂をたして、……指環もない手で、花袖を騎つて、さめないうちに……と火のつくやうに思ひ出すと、其の白く成つた目が、底涙で、ほつと霞む。處を、さあ、まるれば、いゝ鹽梅だ。のえ。」と強ひつける。是を想へば、無鹽の平茸を旭將軍に搔食された、猫間殿はお仕合せ、と禮之助は貝吹いても遁けたく成つた。

「横しやア、これは更めて一つ思ひ指でんす……悴ちやと思ふで、俺とおや子の堅めちやてばえ。」で、袂から紺地の緋のやうな斑の入つた切を出して、盃のふちを、しなくと拭いて獻された時は、嘘でない、肝を冷した。禮之助は、嘗て東京の或停車場のM.O.に於て——聊か尾籠で恐るるが、此とよく似た婆々が、袂から出した同じやうな切で洗はない手を拭いて、腰を振動かしながら、又袂に藏つて、健かに出て行つたのを見た事があつたのである。

とは言ふものゝ、傍に膳も控へず、塗盆を膝にして、まだ湯にも入らないで、もんべ袴のまゝで、うつくしい手古舞が犠牲に上つたやうな、あはれな姿で、しかも、世に唯一人の夫の親友と云ふのを、嬉しさに視つゝ給仕についた細君に對すれば、よしや狐にしる、恙う化けた女の手なら、馬糞と雖も斷念められよう。——
然も、姑は、菊屋家の留守として、家に空閑を守る此の人を慰むるために、禮之助を伴として、周藏が不意に歸省した事にして諸事萬端を待遇する。——其處で、おや子のかための盃だとさへ、且つ拭つて言ふのであつた。禮之助は、遁けるも、引くも、出来なかつた。

然うかと言つて、細君には猪口一つさす事も、虚氣とは成らない。家憲とあつて、坐どころさへ煩かしい姑の所謂菊屋家である。許を受けないで、つけざしなどしようものなら、承塵に、長刀、槍はないが、納屋には鋸、鎌、鉞が見えた。
——思ひ懸けず、但、閨には枕が並んだのである。——

長煙管の撞木と、ともに、黒塚どのが、壁の隅の煤を呼んで、消えたあとを、禮之助は、すつと寄つて、及腰に成つて、其の襖をびたりと壓へた。

何う云ふものであらう。

唯、横手の襖が細目に開いて、圓鬚の白い顔が覗いたのに、其の舉動を視られたので、ひよいと摺つて、床の端へ戻るとして、素性は何うでも、女房と名のついたものゝある、いけ年を仕つた男が、二ツ三ツ續ざまに頭を天邊を搔くのに、不思議に、姉でもありさうな親みのある微笑を見せて、利佐子がすつと入つて、

「御免遊ばせ。」

と袖を通つて——其處に一對、新しさは金具の光る、此も嫁入道具に相違ない、簞笥の並んだ、真中處へ、一寸膝を置いて肩ぐるみ項で傾いて、ものを考へるやうにした。ト箱でも浴びたやうに萎々とした、其の時は、もんべを取つて居たが、下の抽斗をそつと開けて、一寸覗いて、細腰で居直つて、數へる如く、二つ三つ、何やら衣ものに、扱帯を添へて、ばつと色に出たは長襦袢、袖で包んで、内端に立つて、

「御免遊ばせ。」

と又靜に出て行く時、聲が掠れて目を拭つた。禮之助も、ほろりとした。

何だ、何だ、——松本の料理屋の名代娘ともあらうものが、何を發心して、學者の、教育家の、校長の妻になんぞ成つたんだ。

浪花節。八木節とまでは我慢は出来ない。せめて地方まはりの壯士役者と駈落でもすれば可かつたものを。

周藏は、親孝行で、教育家だから、家と云ふ、刈屋家と云ふ家のために、留守をさせて別居をして居る——即ち老母の命のまゝに——

「ちよッ。」

家が何だ、家が呆れるぜと、茶枕を引摺むと、投遣りに胡坐に成つて、巻簾の灰をボンと引拂つた。

其處へ、細君が寢衣姿で……せめてもの心ゆかしであらう。艶に媚くまで、姑に祀つて着換へたのである。

三十二

「あり難う……あり難う……結構ですとも。——結構ですが、奥さん、寐覺の床を見物どころではありません。……實は私は宿なしも同然なんです。——同然ぢやありません。今夜恚うして、貴女のお傍に御厄介に成るが、お恥かしい次第ですけれども、打明けました處、貴女にと言つては餘りに厚かましい、御隠居にでもお頼み申して、幾干を拜借した上で、木賃へでも行かないと、……しますとね、寢ます處は辻堂か、縁の下つきりなかつたのです。」

「御風流でございますこと。」

と靜におとなびて、然う言つて、音を忍んで炭を繼ぐ。

禮之助は一呼吸、黙つて首垂れた。

正しく面を上げながら、

「奥さん……何も彼も恥を忘れてお話しませう。——聞えても構ひませんが、成るべく。」

と、まだに脱がない、羽織の袖を引しめつゝ、

「何うも恚うもないのです。……家内の奴と、大喧嘩を遣附けましてな、家を飛出して參つたんですよ。」

「……まあ、貴方。」

「壯に遣りましたぜ。」

と何か氣競つて、手柄らしく言つたあとを、寂しい顔する、

「貴方、まあ。」

「散々です、然も私の方が非常なまけ軍の上、御覽の通り落人の身と成りました。」

「不斷、刈谷から窺つて居りますよ。おなかよ過ぎて、あの癡話とやら、口説とやらを遊ばしたんではございませんの、——でも一寸、」

と面を合せた、目をそらして、

「癡話だの、口説だのツて、知つたかぶりな、粹な方に失禮でございますわね。」

「恐入ります、恐入ります。」

禮之助は手で其の言を頂くばかり恐縮して、

「飛んでもない——私の方は雜兵の落武者ですし、家内の方は何がなしに噂々左衛門、と左衛門と名のつく奴です。貴方の前でなんぞ噂にも成るのぢやありませんけれども、お話をしないでは分りません。とに角、義理は明白なんです。今度の事なんぞ、……恚う申してはのろいやうですが、義理は明白です。何一つとして、家内に悪い處、越度、不都合、何にもありません。此方と言ふと、からきし箸にも棒にも掛らんぢやないんです。苦々しいを通越して、弱つた顔をして佛壇から覗いて居る、先祖や、兩親に對しても、いざと言ふ、そんな場合に、家内に向つて出て行けなぞとは言はれた義理ぢやあないんですから。」

箸にも棒にも掛らないと言ふうちにも、夫婦喧嘩をして、野郎の方が家出をしたのは、私を以て元祖とします。心得違な亭主は此を以て、模範として可いくらゐるが、せめてもの取柄でせうけれど、さあ、勢よく駆出したはと言つて、實は居た、まらなく成つて遁出したんですが、……あとの始末が着きません。慙う言ふ時、懐中へ潛込んで、膝を抱かうと言ふのは、親友とも、先輩とも、唯一人の兄哥だとも思ふ苧屋君なんですが、他の事はともあれ、今度の事に限つちやあ、苧屋君の居まはりへも寄附けない、理由が……こゝにあるのです。

藝妓の世話をして、夫婦にして遣つたと言つては、苧屋君は身分にかゝはる……」

一段と聲を低めて、

「第一、御隠居がです……どんなに不心腹だか、御立腹だか知れないから、それへは極内に成つて居ますが、貴女には差支へない、お話をしても決して差支へないと、私は信じて、お話をしますけれども。——家内と一緒に成りましたのは一切、苧屋君のお情なんです。何を措いても、のつびき成りません、金子を川立つて下すつた。

勿論、堅くお返し申す約束には成つて居ますが、月賦です。月賦、然も、苧屋君が自身で帳面を拵へて、墨をくろく」と上書をしてくれたんです、——年——月——日——改之。横家繁昌記……は何うでせう。」

と言ひせまつて、聲が曇つた。

「苧屋君の其の厚情に對しても……」

三三三

禮之助は、言掛けて差備向いた次手に、内端に巻簾を吸つけたが、ふと火のついた尖を翳すやうに透して、

「あゝ、お旨い。」

と又吸つて、

「先刻は……更めてお禮を申上げます——御馳走さま。」

「まあ。」

と、白い頸を横に見せて、一寸背きながら莞爾した、寢衣の姿は初々しい。

「で、處で今のお話です。——こんな場合に……誰を措いても一番に頼らねば成らない、御主人——苧屋君の傍あたりへも、氣が咎めて、極りも悪し、可恐くもあつて寄着けないには、譯があるんです、(知つてゐる通り僕は酒も飲まん煙草も吸はない)ッて苧屋君が言ふんです——(たかく)飯を食ひに牛肉屋へ上るか、一寸した西洋料理へ入るくらゐなものだが、其だつて一人ぢやあ。よう行かん)と然う言ふんです。が、眞個で……つい、酒を飲まんのだから、そんな處へ出入るのは面倒なんぞでせう。其の癖つきあひの可い男で……」

——何うも貴女の前で、大將の噂をするのに、饒舌り方が時々敬意を缺くやうですが御免下さい。」

「否、否、結構でございますわ。」

と膝を合せて聞惚れる……道理だ、こんな山家に、三月も四月も空しき閑を守るのである。唯其の人の一言さへ、どんなに身うちに響くだらう。あゝ、苧屋君、と言ふたびに、襟から脇明へ衣が搔れる。

「他が銚子を三本倒して、濟まない事ですけど、可い加減とろくと成るまで、悠然として、葱でも白瀧でもついで附合つて居てくれます。」

「御飯がほんたうに、ゆつくりなごさいますよ。御一所に何しますのに、御迷惑を掛けますこと。」

「迷惑……迷惑なんて飛んでもない、とお世辭を言ふべき場合ですが、何うして、吐言を言はれますよ。眞面目にね、可い顔をして、飯は悠揚り遣らんと毒だよ——嚙んで、嚙んで。」——此處等が又兄哥らしくつて嬉しい男なんです……私と言ふものが、何の能もない癖に、可恐く早飯なんですから。——飲んでる時は可いんですが、景氣なしで、朝飯を遣

る時などは、お香々をばくり——「嚙んで……嚙んで」——ごつんと咽喉へ支へると言つた始末で。」

「ほ。」

と忍び音ながら笑が出た。

「目を白黒して一口茄子を……。」

唯、行詰つたやうに一寸支へた。濃い紫の煙が亂れる。貰の灰を、火鉢の縁に忙しく刻んで、

「……聊が大袈裟です。……いや、串戯はよして、苺屋君が、既に、實は大早飯食だつたんださうですよ——中學校……」

中學校は、私は一所ぢやあなかつたんですが、其何處かへ、秋季の遠足。……然う箱根だと言ひました。乙女峠へ腰を

掛けて、すらりと並んで、富士も蘆の湖も眺めながら、竹の皮つゝみを開けて、大な握飯の晝辨當。——此奴を腹は空い

てるし、二口ぐらゐに、がくぐ遺るのを、並んで皆とおなじに兵糧を使つて居た、有名な學者の校長が見て、「飯はゆ

つくり食んなさい。——嚙んで、嚙んで——」實に有難く深切に聞えたさうで、此が肝に銘じて、それから熱く咀嚼をす

るやうに成つた……身體の丈夫なのは全く其のお底だつて歴史つきの御意見」

「あの、私も吐られますんですよ、御飯が早いもんですから。」

「貴女も……此は難有い。」

「ゆつくりおあがりと申しては、あの……。」

「嚙んで……嚙んで——」

「まあ、肖如ですわ、——お聲まで、」

「いや、此は何うも……。」

禮之助はやゝ寛いだ。

「——其處で、……苺屋君が、屹と成つて私に言つたと言ふ、其の事ですが、(僕は、それ酒煙草の味も知らん。意氣だ

不意氣だ、そんな事の境も分らん。)とまだ其の頃は男世帯の、私の内で、牛肉鍋をつゝきながら、私に頭を掻かせて置い

て、(何うも、あの意氣な婦と、君との間は、あのまゝにはして置けない。——是非取極め給へ、一所にさせよう、いや藝

妓人だから何うの斯うのと、今更言つたつて仕方がない。僕はあの婦には見どころがある。)と、苺屋君の言つたのには、

一寸した譯があつたんです。

此の以前に——苺屋君が私を訪ねて来てくれた時、……春の半ばで、うつとりするやうな月の朧の夜でした。彌生町の

露地の門に入る。——私の家は奥の方で、入つてから二三軒、他家だの。庭だのがあるんですが、其處へ入つて來ると

前へ立つて行くものがあつたんですな。」

「貴女の奥さまだつたんでせう。」

「え。」

「存じて居ますわ。」

「何うして……？」

「主人がおうはさをしましたもの、貴方の祖母さんの手を曳いて、湯からお歸んなすつた處だつたんですつてね。……」

竹垣の中に、連翹だの、山吹だの、ほつと咲いて居て、奥の井戸端には、櫻にしてはまだ早うございましたさうで、紅

梅が散りかゝつて居ます處へ、其のお話の朧夜のゑ、しつとりと、濡れて霞んだやうな御様子で、投鳥田のいゝお髪で、

縞のお召で、若い方が、……」

お祖母さまは、かはいらしい、脊の小さい方でしたつてね、杖をおつきなすつた、此方の方の手をお曳きなすつて——

失禮ですけどあの其の意氣な藝妓衆が、お二人分の手拭と石鹼は御自分のをお持ちなすつたんでせう。……花にも霞にも

「浸みるやうに、芬とい、蒸がしましたつて……(うしろを歩いたばかりだが、まだ、こんな香がする。あゝ、い、香だ。)、と刈屋が自分の手を、袖を……」

と利佐子が優しく、其の手を唇に當て、袖を視て、

「貴方がお聞きなさいましたら、嚙ぞ可笑うございませう。(おい、移り香と言ふのは、こんな事かな。……然う言つてあの人の事ですから、また手を袖を。)

「あゝ、……、うゝ、ぐちやく、」

と隣の納戸で、姑の舌の音。

「……お姑様……お手水でございませうか——姑様。」

が、其切りで返事なし。

爐端と思ふに、駆廻る鼠の音。此の猫魔があるものを、木曾の鼠は豪傑である。

「よく、お寐つて。」

と利佐子は鼻筋を白く一寸小耳を澄したが、唯横に膝をすらして立つと、はらりと、紅入襦袢がこぼれた。

屏風の蔭へ隠れると、今度は、手に、ものを、何か捧けて出た様子が初菊の兜に非ずで、山姫が狼の首、いや、狐の面を袖にしたと美しく、一寸凄くも見えたのは、小さな盆一杯に掛けた布巾で、こんもりと高い處は銚子が下に成つたのである。

禮之助は、吃驚したやうに、

「おゝ、此は何うも。」

其の思はざる高聲の、密と下を潛らして、

「何にもございませぬのですよ。それに些ともめしあがりませぬし……此だけ、……あの、先刻お口に合ましたやうで

から。」

味噌漬の香のもの。……其のくらなる事は心得た。となりへ音のきこえぬやうに、細かく柔かにはやしてある。

お酌も待たず、會釋もなく、ぐいと取つた銚子のめかたで、殆ど尻餅をつくばかり。

「いや、活返りましたなあ。」

三十五

「貴方、まだ、お爛が。」

「さあ、……其のお爛を頂くんですが、一寸お待ち下さいよ。此の鐵瓶へ入れますと、翌日屹と匂ひます。」

と思はず、となりの間へ目づかひして、

「其こそ、飛んだうつり香です。——御迷惑ついでだ、此が可い、」

と火を押つけて灰を立てた。

「御亡爛。」

とうつかり言つたが、

「下徒は此に限ります。」

「あれ、そんな。」

と利佐子が、懐紙をきちんと畳んで、其の銚子の底へ灰に敷く。……

「此はまた本寸法、お花見酒に成りました。……が、きなッ臭いと大變です。——其こそ眞個に飛んだうつり香……」

と言ひかけて、

「まあ、お聞きなさいました。」
と杉箆を、客の前へ揃へながら、

「苧屋は、かう見て、貴方のお祖母様で在らつしやる事は、すぐ分りましたんですけれども、お連さまの御様子が御様子だし、それだし、まだ一度もお目に掛つた事のない方ですから、間が悪くつて少し、後れて、おあとへ附いたんでございますつて——立關の格子戸をお入んなさる時、お祖母さまが、しつかりとお掴んなすつて在らした、藝妓衆の手を取つて、二度ばかりお頂きなすつて、姉さん、難有う、難有う。……とお言ひなすつた、其のお背を抱くやうにして、お入れなさいますと、御一所か、と思ふと、一寸、あとへお残んなさいましたんですつてね……
お祖母さまが、歸るのかの、歸らんと家に居さつしやいよ。の、居てくれさつしやいよ」とお言ひなされると、しばらくして、甘へるやうに、お祖母さんの肩へ、白い横顔をおつけなすつて、ふいと横へ曲つて、お臺所口へおいでなすつたんでございますつて——

其の頃の御境遇ですから、御緩りともおできなさりはしまい。とに角お寄んなすつたんだらうが、それにしても、一所にお立關からお入んなさらず……苧屋が申しますには、あの……お祖母さまはお氣がつかなかつたやうだけれど、藝妓衆の方は、同じ露地を誰か知ら、背後に人の來た事を御承知のやうだから、それで遠慮をなさつたんだらう。
すぐにお祖母さまに伺つたが、其の晩は、貴方はお留守だつたさうでございますね。」

「……」
禮之助は黙つて俯向いた。

「まあ〜とおつしやるのを、御遠慮も申上げて、直ぐに歸りましたと言ふんですが、（私は涙が出た、あの手を引いた所を見て……）然う言つて、……移香だと言ふ袖の上へ、ほろりと涙をこぼすんですよ。」
「實に濟まない、濟みません。」

とがつくりするまで又俯向いたが、

「……こんなしだらをお目に掛けては、全く貴女にも申譯がないのです——いえ、實の所、それなんです。苧屋君が、……其處で私に言つたのも、それなんです。（傍で見ると呆れ返る、苦々しくて、話に成らん、——君には實はあいそも盡きたが、相手の婦人の、としよりの介抱をする、あれを見ては黙つて居られん、夫婦にしよう、取極め給へ〜）と想う苧屋君が言ふんです。」

何、奥さん、むかしからも言ふ事です。親の手水に手を曳けば孝行の名が賣れると。……冷淡で、高慢ちきで、言種は憎いがまつたくですよ。」

と浮り言つて、はつとした。

こゝに今しがたの様子では、利佐子は時々、手水に起きる姑の世話さへするやうであつたから——

三十六

其處で、忘れたやうに、兩の掌で銚子の膚を抱いたのであつた。

「お燭は？ 貴方。」

「唯今。すぐに。」

と、慌てたものかな。反對に挨拶しながら、

「ばあさんの手を曳くのが孝行なら、客の便所へついて立つ藝妓は皆貞女です。しかし家内は僥倖でした。いゝ人に見られました。むかし、徳川の何代か、道中をするのを見ると言つて、八十幾歳の婆さんを負つて、麥の中から街道へひよこりと出たばかりで、水のみ百姓が田地を貰つたと言ふ果報ものゝ話があります。家内に對する苧屋君の恩徳は征夷將軍以上のものです。」

で、其の時にういづれ、主人、抱ぬし、就ては、借金とか義理とか、苦界に居る身體の償の金子が要るだらう、其は僕が都合する、引受けた。」と言はれたので、女の身請など、言ふ事は、芝居か狂言でなくつちや出来るわけのものではないと、断念めて居ました、素寒貧な私は、夢も夢で、茄子……

お、お酌では恐入ります。」

煙管も酒も鳩呑にして、

「其の……茄子が鷹に代つて、富士の山を飛越す夢を見るのかと思つた程です。まさか、いきなり、苧屋君が抱着きもしますまいけれど、何と言つたか覚えて居ません。(しかし横……)と苧屋君が言つたんです。(あの婦と夫婦に成つた以上は、決して不品行はしない、僕に對してまたその婦に對して、不品行……浮氣とか言ふ事は決してしない)と楔を打つて、慙う、屹と念を入れたんです。」

奥さん——

……此。此ですから今度の事ぢやあ、何うして苧屋君の身のまはり、五町四方は寄れはしません。

弱りました——あ、此は……」

と言ひながら二三杯立て續けた。

「就て、貴女にお願いがあります——折入つた御相談もあるのですが、——頂戴します——圖々しいやうですけれど、泊りは知れて居ます……此の上追出されては行く處もないのですから、我ながら度胸を据ゑて、——せめても、貴女に申譯に、苧屋君の男振を話させよう。御主人の噂をさして下さい。聞いて下さい。」

「は、何うぞ。」

と思はず、膝も近いまで——桃太郎でも聞くやうな、嬉しさうなものごしに、猪口の口をためらつて、ふと其のへりを齒に銜へ、

「いまの續きです。で、(何しろ、金子はいくら要る)と箸をおいて、ふつくりと腕を組んで、卓子臺の向うへ乗出された時は、ドキリとしました。何ですかね、こゝが一生の生命の瀬戸際かと思ふほど胸がドキ／＼して急には口もきかれなかつたんですよ。極める處はきつぱりと極めなきやあ不可ん。僕は詰らん遠慮をして、金高を内端に見積つて、間に合せな事をして、あとに借金が残るやうでは面白くない。雖然、然うは言ふもの、僕——も神通があつて天から降らせる金子ではない、學校の維持費なり、何なりに豫算で預つて居る金子の中から、融通をするのだから、——尤も差支へのない限りだ、それに心配はないが、餘り額が多くては、男が一旦口に出した恥を忍んで引退らなけりや成らん。けれども、何うだい、たかは(と)言ふ其のうへにも打開けて相談をしてくれます。」

ひかせるの、世話をすると云ふ方角はないのですが、愚癡なり、内證話なりに、大概借金のたかは知れて居ましたから、おほよそを言ふと、其のくらゐなら都合が出来よう。尙ほ取極めをした額だけ、手紙で言つて寄越し次第、すぐにも調へようと言ふので其の晩は別れました。

——何うも貴女に、いまお話をするよりか、お目に掛けたかつたのは、金子を渡してくれた時の、苧屋君の態度と風采です。」

「——そんな時の事を讀めるのは可笑いやうですけど、もう、貴女だから構はない……として置きます——」
家内と内相談をしましてね、直ちに一寸學校へ飛んで行くと、生憎、教員會議がある、今日の間には會ひかねるから明日何時に、銀行まで、と言ふ都合で、其の翌日、また飛ぶが如く、銀行へ行つたんですが、場所は本郷通りで學校から近くもありました。けれども、苧屋君は最う來て居て、黒の背廣の膝を伸して、床几に掛けて、兩方の手を衣兜へ入れて、背後むきに成つて、天井をゆつくり見ながら、表通りの騒々しい電車なんか知らん顔で、超然として居ました。

丁度晝飯のやすみの時間で銀行内も静です。

駈込んだ登音を聞くと、振向いて莞爾々々として、いきなり「さあ。」と言つて、もう引出してあつた紙幣束を衣兜から掘り出して、それが、優しい小父さんが、小兒に玩弄品をくれるやうな顔色で——別に……又何枚か「晩に祝杯を挙げ給へ——何だっけか、それ、お取膳とか言ふ奴で……いづれ緩り……学校の時間がある。——榎家、萬歳、萬歳——」と帽子を両手でポンとはめて、すたくと行つたんですがね。

うららかな春日をうけて全身が光つて見えた——金剛石で彫刻をしたやうです。

藝妓をひかせてお取膳、いろ男の氣だらうか、土手に咲いた蒲公英で、此方は吹くと飛びさうです。

面がほてるほど嬉しい中にも、何とも言へず心細くつて、四邊が寂しうございました。

いや、實にお見せ申したかつた、更めて言ひますが、利佐子君の其の風采を……尤も當日、御歸宅次第、貴女は御覽に成つたんですか。」

利佐子は黙つてはなじろむ。

「ト確、其の時分はまだ東京に御一所でしたな。」

一段低聲で、

「御老母も。」

「え、あの前の年の暮ほどに縁附きましたばかりですから。」

「然う、サツと年暮に、精養軒で御披露で、貴女の高島田、花笄、お振袖を拜見しました。」

いや、お話をするにつけても思ひ出します。苺屋君の家ぢやあ、姪と言ふのが居なくなる、新しい女中が来る、と言ふうちに、結婚の話聞く。祝すべし、祝へくと景氣ばかりが大きいつて、眞個の一ツ葉、松の葉で「間の手に味噌漬の香のもの。」

「御祝儀に罷出ました時は、苺屋君が留守で——ですから通出して……辻へ曲る處で、此奴がスタコラだと洋杖を廻したたほど餘裕もありましたし、精養軒で赫燿として銀燭映紅華でツた時は、偏に新夫新夫人、お二方を祝するほかはなかつたのですが、あけて、新年に成つて、慇懃不沙汰で、まだお宅へ御年頭にも何はないうちに……恥を申さんと分りません。厄年ではなかつたのですが、暮のうちから八方塞り、茶屋小屋は暗剣殺です。蒲團も火鉢も要らないわ、大人場に潛込むんだつて木戸錢だけなければ成らずで、不義理ばかりで顔向けも成らない友達の處へ金策に廻つて、何處でも工面のつかないで日が暮れました、其の擧句に、丁度一人……」

貴女のお宅へ、しかも其の日、年始に行つた、と言ふ一人の友達が、苺屋君の家は素ばらしいぞ、金屏風が立つて、根こぎにしたやうな大な梅が活かつて居た。と話したわけで、貸しません。……おなじく工面が悪いのですから、酒はなし腹はすきます。とほくと迷つて出て、もう一町で不忍の方へ明る成る、暗い横町の隅の方で、へだつて黒塀に立ちました時、其の話にききました、お宅の金屏風がきらりと目の前に光つたんです。自分のうちが思はれました。——暮から、障子の穴も張らない、湯すきな祖母に、まだ初湯さへ使はせない。——自分は、と見ると、紋は汚れる、下着は典す、裾は破れる、足袋は褪ける、あと齒は減る、鼻緒は緩む、溝板は反つて居る、のめれば、葱の流汁へ身投をして死ねばかり、苺屋君の金屏風、振袖の新夫人。

こんな時は抱合つて、肩をくはへて泣かうと言ふ、いやそんな芝居には木戸があります。何と血迷つたか、もう一軒、學校でも遠くに居て、別に口を利いた事もない友達の新學士を、しかも千駄木の森の中へ訪ねました。

玄關が寂然として、奥で歌留多を取つて居る。百人一首を半分ばかり、……もう立つてるのも苦いほどで、生垣について踏んで聞く……お宅の花は梅だと言ふのに、其處の垣根は終です。地獄、極樂の境……漸と、一句切つて、哄と聲の湧く處で、おつくと取次を頼んで、其の新學士を呼出しますとね、脊の高い男だから、上櫃から手をのばして土間へ宙

おとやうとふん入屋

彩色人情本

乗をするやうに、格子を覗いて、暗い方へ下さる私を見て、やあ、と吃驚した顔をする。(月給は暮に使つてしまつたんで、弱つたなあ。)が眞實で、貸されたよりは、尙ほ恐縮。(待ち給へ、……歌留多を取つて行きませんか、まあ、上つて)此方あ、いろに逢ひたいんだ、歌留多を取つて居られるか。ふてたやうに引退ると、わつと又奥の賑かさ。キャツ、オホ、と女の高聲、鹽煎餅の音楽入で、蜜柑が踊るやうです。え、世の中は、貴夫人と令嬢で面を打つてらと、仇も報もないものを、我がひがみから、私は……貴女。

「あ、姑様、お手水ですか。」

「利佐え……」

其の利佐子は立つた。

慌て、禮之助がつかみさがしに布巾を取つて、銚子ぐるみ盆を蔽ふと、戻橋には鬼が出る……狼でなく、狐でなく、今度は猫魔の顔に成つた。

利佐子が、ぞつと身に沁むやうな、そして怯えた聲をして、

「あれ、雪に成りましたよ。」

三十八

空は曇つて陰気だけれど、町は露地も花やかで、山玉の森にまだ鳥も啼かない、やつ下りと言ふ時分、赤坂池の藝妓家樹見家の軒へ、涼傘も持たず、ばら／＼と散る柳と、寂しく音信したのは梢である。

唯、内の子を祝するやうに覗くと、土間の御神燈に、婦あるじ、家の姉さん、升子と言ふ名がしるしてある。

傍へ並べて、三津代とかいた、上へ、鼻紙の切端を、いげぞんざいに附着けたので、其の字が透けて見えるのであるが、はりめが少々、べろりと口を開けて居るので、守宮を呑んで居るやうで、何となく、其の三津代の身さへ酷たらしく想は

れる……

四谷の古道具屋、桑小の姪なる其のお光が、此の抱ぬしの家から行つたり來たりは、既に前段に於て御承知の通り、身を堅めるのに派手なひき祝などをする質でない。親許身うけとか言ふ類のであるから、要するに泣を入れるので、抱ぬしの方で嬉しがる筈は、まあ、なさ／＼な處へ……貼紙。

それに、ものゝ経緯が、最う身も拭けて了つたあとではない。お光はまだ此の家に籍もあれば、身體もある。あるのに御神燈へ怒うした仕向けは、何ぞ、其の折合話の行きが、りに、升子と言ふ抱主が、自分か、或は其の意を受けた奉公人か、三津代へ面あてに、え、怒うすりや」と癩癩まぎれに違ひないのは、べつと唾でも着けたらう、べら／＼と名を嘗めて、紙の動くにつけて察しられる。

升子の氣象も略分つた。

「ために格子から覗いて見つ、梢のお柳は、ふと袖を合せた、袖口の手の甲を片手で軽く壓へてためらつたやうである。が、やがて思ひ返したか、小腹をしとやかに、靜に開けて三和土に立つた。

「御免下さい。」

「誰方？」

用心も寝も可い。……すぐに顔を出したのは内箱と言つた、しかし土氣の失せない、三十ぐらゐの横肥りに肥つた女中、

のそりと立ちながら、

「へい。」

と其處へ一つ、蒨玉のやうに、返事を搦んで投着けて、「どちら様。」

「姉さんはお宅でございませうか。」

「孰方様ですか。」

「は、あの、私は四谷に居ります、横と申しますもの……。」

と言掛けて、一寸口籠つた——御神燈の影はさゝぬが、臉が幽に翳つたやうな、心の裡が思はれる……

「……ものゝ、家内でございますが、お家の姉さんはおいでとございませうか。」

女中が、些と故とらしくはあつたが、妙な顔して、

「誰方ですか、姉さんと言つて。」

「此方様の。」

「お嬢さんですか。」

「升子さん。」

「え、お嬢さんはお出掛ですよ。」

お柳に漸と分つた。此家では、あるじの升子の事をお嬢さんと言ふのである。

「然やうでございませうか、——では、三津代さんは？……。」

「居ます。」

とぶつきら棒に言つて、立體のまゝでぐつと下目に見た。

「一寸、然うおつしやつて下さいませうか、——四谷の横ですつて、然うお言ひなすつて。」

三十九

「何う言ふ御用事？」

「一寸お目にかゝりたいんですが。」

「ですから、何う云ふ御用事(間)てんですよ。御用向によりまして。」

梢のお柳が音信れた用と言ふのは——未練らしいが、紫の煙管の事。——あれは、昨夜だ——桑小の住居で、やがて三

津代が「眞に姉さんには申譯がない」と言つて打明けた處によると、……實は其の煙管は、唇に當てると、色が齒に沁むま

で我がものにしたかつたので、叔父が店の古道具だからと、たかを括つて、赤坂の樹見家へ持つて歸つたのださうである。

それが、姉さん、否、お嬢さんの升子の目に入ると、妙に乗懸つて、欲い、譲つてくれまいかと言ふ「今朝目の覺める

間際に、富士の山の夢を視た。それに、此の茄子の煙管、こんな縁起のいゝ事はない」とさへ言ふ。……眞個か虚偽かそ

れは知らない、年紀はまだ若いし、升子と言ふのは、——本名がお琴で、小柄で細りした、評判の美人で、然も旦那が男爵の

富豪であるから、界限の茶屋小屋で、かけて紳名をつけるにしても、手近な處で、姫ます、小ます、とても洒落べきもの

を。——奈何せん。擧つて、指して(代官升)と稱ふる。高く留つて、ツンと澄して、横柄なのに、かねて、虐けるばかり

計込むと言ふ意味で、聞えた溜屋の、儉約家であるから、掘出しものと睨んだので、富士の夢などは何うだか知れない。

が、たつて望む。

三津代の方では、それほど貯蓄屋のお嬢さんに、いくらか損をさせても、身拔けのしたい談合の弱氣の最中、しかも我

身に筋も、由緒も、因縁も何にもない。……其の時は實際なかつた——がらくた道具で、屑屋の賣もの。譬喻は聊か過激

だけれど、お葬式の洲濱で御機嫌が取結べるやうな、もけつの僥倖。さりながら、其處はぬからぬ胸算ゆる、叔父が、桑

名で、桑名屋と云つて、桑名の殿様の春雨時分、桑名の御守殿から、むかし拜領をしたやうな勿體をつけた上で——「お

譲りどころか差上げます。縁起ものですから、故と……。」

「坊ちやまのお手から、……はい、ママさんに。」

(註。梶子には男爵の兒があつて育て居る。)

と言つた次第。

「ですが、ですが、ですが、否、姉さん、」と其の懺悔をしたあとで、三津代は其時、梢の胸に嚙りつくやうにして、涙をほろ／＼と溢しながら「あなたが構はない、もういゝから構はないと言ひだつても、屹と煙管を取返して、お返し申さないでは置きませんから」——梢はそれを、さすがに「もう要らないから。」とは言はなかつた。出来る事なら「お光さん、何うぞ、一生の恩を被ますから。」で、杯を納めたが……

四十

却説、此の日、まだ正午前であつた。横の臺所口へ、ほんやりと音信れたものがある。内には梢が、——茶の室へ坐つて、鐵瓶を撫で、視ても、立つて出窓から覗いても、座敷の片隅へ退つて、縫かけの襦袢の袖を撫で、見ても、箆笥の底を覗いても、又玄關へ出て視ても、何處にも禮之助は居ないから、もう一度茶の室へ坐つて、座敷へ行つて……と我ながら、立つたり居たり、うろ／＼して、人の見る目も恥かしいので、さしてもない買ものに女中を出して遣つて、其のあとで、針箱のまた傍へ来て、針を持つ處を、もの差に取違へて、抱くやうに、取つた男の襦袢、いけ年を仕つて、うっかり横撫でを遣つて汚すから、着換への分に、と、數寄屋町に出て居た頃の、襦紗だか、もつと以前の頭巾だか、自分の紋の葛が一枚、こぼれたやうに出て居るのを、京染に遣つて濃く染めたが、紋が矢張り臙に視える。其を、いつか苦に病んで、氣を揉んで、臙が切れて、頭痛のするまで、腫で焼めて、奥口に工夫したのを……いま手に取つて、もの差を杖に熱と視て、思はずキヤ／＼と取詰める、切ない胸を、縁に開くと、あかり取の小庭がどんより曇つて、一人寝の衾のやうな寒い風。縁日を買つた秋草の、尾花ばかりが煙のやうに枯残る。……其の庭も、誰のために綺麗に掃いて、手水鉢をかへた水の、柄杓を濡して、平する。……はかないほどな水の音。

ハツと泣いて、颯と颯と染めた處へ、——其のいまの臺所の人氣勢。ごめんとも木綿とも古綿とも、ほやけた聲は、肩屋が来たか、毎日来る突拍子な聲八百屋かと出て視ると、桑名屋小兵衛、桑小さん——

「おや、小父さん。」
茶の室へ通すと、ほう／＼と勢のない吸呼を向うへつきつゝ、凍んだやうな、両手を鼻の下でふは／＼と揉みながら、唯入つたが、何にとつちたか挨拶もせぬうちに、こゝみ腰にさした曲尺を、扱き／＼、ひよ／＼と火鉢を向うへ突切つて、中腰に成つて、揉手を合掌にをがみ／＼、佛壇の前へのほりと立ち、「寸法は何うござりませうか。秋濕氣から以來、お屏のあげたてにくるひも出はいたしませぬか。」否、結構よ」と云ふうちに、びたりと天地へあてるのだけれど、此だけの職人で居て、威勢の悪さ。……めくらが、手捜をするやうで。今度は尺をだらしなく懐中へ突込むと、其の懐中から、ぐたりとした紙袋を取り出して、「御失禮ではござりまするが。」と其處へ備へたのが痰切鉛で、「おう／＼お見事にお飾つけを。」と言ふ、——過去帳の、さて、どの志にも當らない、……今日は命日ではないのだが、禮之助が、茄子形の煙管のために梢の横頬をぐわんと撲つて、眞赤になつて、突伏して、「お佛壇を何うぞ。」と言つて駈出して行つた廉がある。……お料の品も整と揃つて、花立の花も新しく、コスモスもしをらしく、濃い浦島草、雁來紅も鮮麗に、庭はかれても、こゝは錦、「おう／＼奥様、御丹精。」と、鼻を詰らせて言つたと思ふと、牙えた音で、チーン。
なも／＼なも／＼と、口も頬邊も、此の時木魚の如く膨らまして、……小兵衛さん。あとびつしやりに成つて、棚の下へ潛つて、壁の隅へ附着いて、「さて、奥様、何とも早。」とつんのめつた拳の上へ、皺額を揉込んで、もう一息退りながら、お光は勘當いたしますわの、此、此、此を御覽じ下さりまして。」と、井から引出して手紙が一通、朝の間に赤坂から、三津代が使にもたして寄越したと言ふのは、——
(叔父さん、助けて下さいまし……)——
……樹見家のお嬢さんは、昨夜中絶つたが、煙管を返さない、と言ふのである。

四十一

然るに、立はだかつた女中の様子が、南瓜か、薩摩芋とても言ふならば知らぬ事、唐突に、煙管だ、茄子だなどと言はうものなら、八百屋ぢやあござんしない、と向腹を立てさうであるから、其處で、もう一度、

「お目にかゝれば分りますんですが。」

と梢が言つた。

「ですからね、お取次をしますからね、御用をおつしやいよ。」

と向面に成つたかと思ふと、其の拍子に、あと言つて、框の板を一段下りると、慌てたやうに、肥い腰が、夜着を被せて箕を倒にした形に、突のめつて、一つ裏返つて居た小さな編上靴だの、まだ一足駒下駄をちよこくと、搔寄せて、逆上せた顔を上げて、

「此方へ、此方へ、……此方へさ、あなた。」

とつんぐりとした手を目の前へ振つた。が、ハテナ、急に土下座をするばかり、更まつた態度は、以前同朋町あたりで工面のいゝ時、いくらかはすんだのを思ひ出しでもした女中かと、思ふと（此方へ、此方へ）と、言ふのが、此方へ上れと言ふのでなくて、手を振る方へ（片寄れ、退け）と、推退けるやうでもあつて、一寸まじつく。

「……退いて下さいよ、傍へ。」

思はず下駄箱の方へ、——ハツと梢が身を寄せる。と、最う其處へ——

孔雀がスツと下りたやうに、燦と、きらびやかに立つた、淑女がある。

一間、奥から、ばたくと一人、また駆けて出た。仕込か、下地子と言ふ年ごろだが、家風と見えて、庇髪で、ボンとお太鼓を高く背負つた、顔も襟も真白なのが、遠棚などに掛けて居たらう、手に持つた艶布巾を、帯へ一寸挟むと、もに

框へ横に手をついて、

「お歸り遊ばせ。」

「お嬢様、お歸り遊ばせ。」

扱は樹見家の、このお嬢さん、升子が餘所から歸つたので、——分つた——其のお歸りの通り道とて、客は下駄箱の方へ片附けられたものである。

家風と見える、家風と見える。

升子は、跪いた二人と、横に立つたお柳とを、恰恠さうな口を結んで、大な目でじろりと視た。

此の間に、恐しく、半纏も股引も氣取つた車夫が、いま送込んだ、——入口は横の角家だから、——ほんの露地を三歩ばかり別に買ものもなかつたらしい、——丁寧に叩頭をして、格子戸を引く處を、客が居るから、汗を拭いて、黙然でスツと出て行く。

柳にサラ／＼と風が添つた。

二階から階子壇、トン／＼と登音して、引掛帯の横顔で、障子から覗いたのはお光の三津代。唇へ墨をなめたから陰気な顔で、

「あら、姉さん。」

と言ふと、トンと坐つた。——場所と言ひ、時刻である。……湯上りの石鹼の香を芬と蒸はせて、膚脱の身じまひで、バツと化粧つて、紅を含んで、乳をくびつた伊達巻で、も顯れようと言ふ處を、例の胸算が、別しては此頃の仕詰だから、二階の部屋に堅く成つて、主人の臺帳と自分の手控。呉服屋、小間もの屋の通帳、筋向の俵帳場から、四角の煙草屋、おごりつこの蕎麥屋の掛まで、反故にした起請文が午王の烏に成つて、取巻いたやうな裡に閉籠つて、一心不亂に算盤を弾いて居たので。——お柳のおとつれやうが、もの靜だつたから、聲も氣勢も、それは何にも聞きつけなかつた。小

間使のばた／＼に誘はれて、あゝ、お歸り、と出迎へに出た處――

「誰方？」

と升子は、つめたいほどの澄んだ目で、其の三津代を屹と視た。

三津代はうろたへたやうに、ト息を吐いて、

「は、私が前に、大變にお世話に成りました――いつもお話をします、あの下谷の姉さん……。」

あれ、悪い事を言ふと、お柳は思った。

「ふん。」

と小升が冷に頷いた。――其の時、金剛石でも嵌つたらうと思ふ、鮮く柄の、薄色の涼傘をトンと離した。其を、やゝツと気合がかゝりさうに女中がうけて、カんだ機に、膝を開けて、手渡しに小間使の両手に授ける。

土間は狭いのである。お柳は肩を窄めて慇懃に會釋をして、

「お初に……失禮をいたします。……四谷に居ります。積と申しますものでございますが、あの……。」

「三津代さんに、御用事？」

「いゝえ、失禮ですけれど濟みませんが、……お嬢さんで在らつしやいますか、……貴女に、一寸……。」

「私に。」

と言つた切、さきへ立たせた小間使のあとから、框を蹴るやうに衝と上つた、香水の薫滴る如し。

「一寸……。」

とばかりで、お柳の前を、ほつかりとした草履が宙を行くと、がたく／＼と下駄箱へ……其の手で／＼と髪を掻き掻き、女中も引込む。

三津代の膝に置いた手が、落ちるやうに疊につく時、お柳の袖が聳としまつた。

奥で爽かな衣摺れの音がする。

唯、三津代が寂しい顔を上げて、障子を縦に拜むのに、ふと目を合せて、何にも言はず、二人は其のまゝ俯向いた。

「三津代さん……。」

「……………」

「お通し申したら可いぢやあないの。何をしてるのよ、をかあしな。」

「あゝ、姉さん何うぞ。」

お柳は目まで頭を掉つた。

「あゝ、何うぞ、奥さん。」

お柳はきつぱりと、

「御免なさいまし。」

四十二

「もしく。」

ほゝと痢のまじつた升子の笑聲が、襖は開いて居るが、奥深く、向うから聞えて、

「貴女が、そんな事をなさいませんが、……三津代さん、宅には奉公人が居りますから、其がいたしますから。……唯今、お客様にお褥をさしあけますから。」

三津代は、トお柳の前へ取つて、火鉢をさしよせて居たが、火も入れない前に、火箸で灰へ、（ヒステリー）とかいて見せて、寄添つて居たのが、ついと退いた。

「其とも、お手加減で、貴女がなさらなければ、其の方のお氣に入らなアいの。……一寸、内の奉公人ぢやお氣味が

悪い？……氣味が悪いはないでせう。ほゝゝ。」

あとが又險な調子で、

「早くしないかよ。……お敷ものや何かをさ……えゝ、煩い！ 二人附着いて鬱陶しいぢやあないか。チョツ。」

と背負上か、何か振飛した。

小問使の方が、別誂の金紗の色蒲團と……續いて、桐の丸火鉢を据ゑたが――

「一寸、駒……。」

「はい。」

「何をしてよ氣の利かない。お蒲團はね、お客様にお敷かせ申すの……知れてるぢやあないか。袱紗ぢやあるまいし。前へ据ゑてお目に掛けるつてもものではなアいの。」

「恐入ります。」

とお柳が當てようとする處を、

「薄汚れた足袋なんかで、お乗んなさるやうなお人柄ぢやあないつてばさ。」

お柳はぐいと折かきみを――しなつた縁の友染の、色の褪めたのを密と視つゝ、鼻紙でコハゼを外して、足袋を脱いでくるりと捲いた。素足の白さ、清らかさ、娘のやうに袂を曳いて、足袋をかくして、すつと乗つた。

「ママ、ママ。」

「そらくママぢやまお歸りです。」

と臺所に聲がすると、すほんとはずんで、ほかくと駈込んだは、緋、筒袖におなじ羽織を裾まで着て、小倉の袴を高くと穿いた三歳か、年弱の四歳かと思ふ、くりくりと栗蟲のやうに肥つた、旦那似だらう。升子の面のやうでない男の兒で、妙な好みは、土耳其形で、長くリボンを撥ねた。帽子を大な額に被つたのが、ひよいと出て、鹿爪らしく、腰に兩手

を突張つて、顔を横つちようにお柳を視ると、

「誰？」

「……。」

「おい！」

「此の方はね、坊ちゃん。」

と三津代が言ふのを、……續いて臺所から入つた年倍の。――遣手と此ばかりは肥つたのがいゝ、――大な乳母が、

「餘所の小母さん。」

「馬鹿。」

「……。」

「きさまなんか来る處ぢやあないや。」

「まあ。」

「坊ぢやま、そんな事を。」

と三津代と乳母が聲を合した途端に、

「馬鹿。」

と言ふと、蒼い靴足袋で、高く前髪を狙ふばかり、お柳の胸をボンと蹴た。

ハツと肩すかしに、身を躲して、さそくに袖を翳した。散らさぬ雪の小手冴えて、四天を投げる花の枝。――下谷で聞

えた踊子をと、三津代は面を伏せたのである。

發奮でストーンと尻餅で、

「めいイ。」

と轟のやうに泣出したが、引抱へた乳母の手から、手足を跳ねて、ママの居間へ、
「馬鹿、馬鹿、畜生！」

「何うしたの。」

聞かぬ振して乳母が、

「山王様の小橋の處に居たんでございますがね、ママ様がスツと、此の横町を俵でお歸り遊ばすのを御覧になつて。」

「ぢや、遠くから、——鷹のやうだよ。」

と、ぞろ／＼と裾を曳いて、帯を除つた、用たしの出の大柄の大島ながら、ダリヤを縦に抱いたやうな紅入友染のしどけなさ、朱鷺色獨鈷の伊達巻一つで、火鉢の向うの座蒲團へ、づつほりと沈んだやうに膝をのせる。

附添つた小間使が、茶のお給仕は銀瓶で。

お柳は、何と、手持無沙汰の煙管の眞鍮、

「あら、火がないぢやあないの、——一寸……木で拵へて悪かつたわね、——おい、眞個に悪かつたわね。……一寸、駒や。」

「は。」

「木でさ。」

「へい。」

「え、火だつてんだよ。火だつてえの——木で拵へて済まなかつたつてんだよ。宅の火鉢は。——もし……金の火鉢でなくつちやあ。火は入れられないんですか。何うしたの、お客様に灰を差上げるんぢやあないことよ。——灰をめしあがるかよ。一寸。」

「はい。」

「煩いね、灰をめしあがるかつてのさ。お客様がさ。——火を上げないかい、間拭けだね。——箱屋さん、……箱屋さん……もし、お林さん。」

と奥を呼んで、

「爪取をおくれ。」

「其處にございましたつけが。」

と、林と云ふ、例の女中が、のそりと出て来て、黒檀らしい、茶棚の傍から、炭取を取つて出す。

「チョッ、霜枯のこほろぎぢやあないよ。炭取を何にするのさ。——つめとり、つめとりと云つて、銀で拵へた小さな剪刀。」

と突つた顔でしやくひながら、

「あなたのお國ぢや何て言ふの。はーさーみー」

「あの、お持もの、中ですよ。」

と小間使が注意した。

七重八重なる懐中持、緋裏の間から、きらりと抜いて、猫板に敷いた懐紙の上へ、目と指の先で撓めながら、華奢に、アツリ、コチンと鳴して、指を見詰めて傍目も觸らずに、爪を寄せてニツばかり搔込みながら、鷹揚に言つた。
「入らつしやい。」

四十三

「はじめまして。」

と其處で、梢が會釋をすると、伸びては居ない爪だから、剪刀の尖と中指を腫で撓めて次手に肩を擧めながら、

彩色人情本

彩色人情本

「はあ、はじめまして。」
と升子は目もくれず返事をする。世俗にも、謙遜つて、一方に交情を求むる時は、お目掛けられてと言ふくらゐである。ものを言ふのに、爪を取りく、瞬一つしないのでは、對手が腕んだより接穂がない。

「お初に……。」
と梢がまた言った。

「お初はないでせう。ほ、ほ。」

と急に忍笑をしながら、矢張り傍目も觸らないで、

「お初は最う。今しがた下駄箱の處で濟みましたつけね。」

「まあ。」

と、其の眞鍮の煙管を爪探つて、

「何うも濟みません——失禮をいたしました。」

「おや。」

と目を大きく冷く開けて、然も眩しさに仰向いた。

「最うお歸りですの、何うもまあ、せつかく遠方お越し下さいましたのに、一向お構ひ申しませんで。」

傍で三津代が堪りかねて、

「姉さん。」

と雙方へおどくする。

「お嬢さん。」

と、煙管を落して、梢が少し更つて、

「飛んだお邪魔をいたしました……すぐにお暇をしなければなりや成りませんのですけれど、實は、貴女に少々お願があつて参りましたものですから。」

「お願があつて——私に。」

「はあ、實は……。」

口も利かせず、

「あら、然う。……お願があつて——私に……些とも存じませんでした。それは、何うも、はじめまして……。」

「……………」

「はじめまして、一寸お初にとおつしやいよ。此處等で仰しやる處ですわ。おつしやいよ。……お初にとさな。」

「……あの申すんでございますか。」

「奥さん。」

と三津代が涙ぐんで見る顔を、目ませで堪へて、梢はせん術なさうに、

「お初に、」

と沈んで言った。

升子は故とらしい上調子で、

「一寸お初はないでせう。——先刻下駄箱の處で濟みましたよ。ほ、ほ、貴方があれで状態を持つて、おいでなさるとか、み山の火の見櫓で、芥箱にお躓きななさる處だわね、お氣をつけなさいまし、手前ども露地には悪い犬が居りますから、

チヨツ煩いことね、があくがあく。」

居間にも雲が掛るやうに、鳥が鳴いたのである。

小さな傘を、坊ちゃんは一小兒の癖に毛深いから、

光線の工合で、もやくとむく毛が見える——黴の生えた團子の

やうに握りながら、餘所の小母さんを睨んで立つた。(勇ましいのを、股へ挟むやうにして、肩から壓へて、奥の敷居際から頼だけ出して、様子を窺つて居た乳母どの。

「そらく、鳥が、鳥が。」

と託けに、模様が悪いと視て、ひよいと抱いて、どしどしと二階へ上る。上りしなに小兒が、びよいと唾を吐掛ける眞似をして、

「馬鹿あ、畜生。」

四十四

「馬鹿は其方だよ。」

と升子が険い目で二階を見上げて、

「雁ぢやあないんだ——鳥を見物つてのがあるものか。見せる奴も見せる奴だ。」

と呼つた瞳に、廂髪の顔の白い大な鳥が映つて、尾を翻々と紅に階子壇を上へ、また、すつと行くものがある。

「おい。」

と升子が鋭く呼ぶと、いま乳母に續いて上りかけた……今度は其の小間使が中壇で一寸留る。

「故々呼ばなくつても可いんだよ、あとで然う言つて遣るから……畜生。」

「いゝえ、乳母さんを呼びに参るんではございませぬの。」

「おや、然う、……椋鳥かと思つたら、お前も矢張り鳥を見物なの。おや、然うなの。」

「いゝえ、一寸干ものを見て参りますんです。」

と横狀に、ぬすみ見をしながら、すくんで上つた。

「ふゝん、そんな、お前のそんな、油揚のやうな禪なんざ、疾に高が擡つてら。」

「畜生。」

と忽ち身を震はすやうに、剪刀を疊にたゞきつけると、敷居に留つて、チンと鳴つた。

「見たが可い——……鷹が鳥に成つたぢやないか。——御前様の、御前様の……私の……私の……大事な坊やを、縁起

でもない、誰だ鳥にしようとするのは。」

と、肩も髪も揺るかと思へば、颯と顔を赤くすると、升子は唇を嚙んで、唐突に泣きじやくつた。

ヒス、ヒスと疊の目へ、(テ)と(リ)をうろ拭きに、すつと指のさきで棒を引いて、梢に密と見せながら、三津代がほろりと又涙を流す。

梢は黙つて、俯向いて、膝で手首を握つたのである。

「ど、どうなさいました。」

臺所に引込んで居た女中が、障子からのそりと出て、むくくと疊すりに膝を寄せると、

「へい。」

「鷹が鳥に成つたんだ。」

「おや、まあ。」

とうつそりと生真面目な顔をするのを、振上げた顔で、自棄に睨んだ。

「馬鹿。搦子木に羽が生えたんだい、引込んでるが可い。——第一ね。」

ゆきやうろつをんぢま

彩色人情本

女中が、うつかり釣込まれて、

「何でございますか。」

「煩いね。味噌汁の噴溢れた話ぢやあないッてば、鍋蓋の棧のわれたやうな顔を突出して、何だい。……引込んでおいでッてんだ——第一ね……一寸、三津代さん。」

「は。」

「何故、何の怨があつて、あなた、何うして私の家へ、けちをつけようとするんです——いゝえ、つけないとは言はせません。さかのほつて御覽なさい。」

と、言語も大に瀾つて、

「あなたは、第一、三樹家の人に成つて……内の抱妓に成つて、そりやあべこべの七三にしろ、分にしろ、可ござんすか。くばりものゝ、手拭まで私に見立てさせてさ、暑い最中に、涼傘をさして私がついて、此の土地でお披露目をしてからどれだけ経つと思ふんです。あしかけ三月……てつた處で、まる六十日稼がないぢやありませんか。いゝえ、そりや、物質上の損益は別の話として、勿論今度おひきなさいます。おひきなさいますに就ては、ちやんと計算はなさいますのさ。……計算はなさいますけれども、よくお聞きなさいよ。」

梢はとにかく煙草をのみ得た。

四十五

升子はいよく、薄いが切れさうな鋭い聲で、「内で可ござんすか、三樹家で抱妓を置きます……まあ、何にしてもですね。藝妓衆の世話をしたのは、あなたがはじめてだと思つて下さい。置けば置けます。幾らでも……今までに。……ですが、何だの彼だのッて面倒だし、少し考もあつたもんですから、家來はこんなに大勢居ても、——變な顔をおしでない。」

と其處にまだ手持不沙汰な女中をじろりと見て、

「お前たちの役に立たない棚おろしをするんぢやあないから、……水口が開いてるぢやないか。おい、またお前の親類が顔を突込むよ……一寸、向裏のむく犬がさ。」

と追込んで、

「抱妓は一人も置かなかつたんです。それをです。……斷つてと言ふお話で、私もつい其の氣に成つて、お世話をするやうにしてからは、何うせ藝妓を置く以上は、二人や三人ぢやあ、此の看板に對しても、見つともなうござんすからね。次々に後を仕入れて、燦と賑と思つてる處なんぢやありませんか。——あなたが出勤から、日もないのに、土地ぢやあ大した評判なんです。よくお座敷がありました。決して手前どもの看板故とは、は、申しません。いゝ藝妓衆だ。別してはですね、お客一人、藝妓一人さしむかひのお座敷に持てる事は、一寸三津代さんぐらゐの妓は、土地にも少なからう……ッて、待合さんの人氣でございましてね。」

とニヤリとしながら、

「賣れなけりや可かつたんです。——失禮ですけれども、懨かお稼ぎなすつたもんだから、内に三津代さんて妓のある事は、最う此の土地で知らないものはありません。ほんの暫くの間にです、……其の暫くの間にですよ、それだけよく賣込んだ癖に、急にふいと引込むと成つたんぢやあ、何か、然も私に、届かない、不都合な氣に入らない事があつて——ええそりや然ですともさ、……氣まゝに外土地へ住替をなさるんぢやあ、何だつて、承知をしません。けれども、約束をした男がある、お嫁に行く、堅氣に成ると言ふんだから、それを可厭だつてつちやあ道に背きます。ですから不可いとは言はないのです、承知はしましたけれど、世間の評判は、詰る處、私の家が居づらいつつて、多勢賑はしようとするのに、彼家ぢやあ、と世話をするものが二の足を踏めば、抱へられようつても、胸に手を置くに極つ

てるぢやありませんか——三津代さん、あんたは何の怨があつて、三樹家の看板と、私にけちをつけるんです。」

「まあ、姉さん。」

と泣聲である。

「私ばかりぢやありませんよ。」

と音をさして、火鉢の縁へは背を離して、

「大事な坊やにまで、けちを着けてさ。それを言ふんですよ。煙管の事ですよ。私が富士の夢を見たから、縁起に欲しいと然う言つたら、「まあ嬉しい、一富士です、三茄子と言ふんですから、鷹のやうな坊ちやんの手から、はい、ママさんに」——然う言つて故と坊やの手に持たして、私のものにしたんぢやあないの。切火を打つて、縁起棚へ飾つたものを、一寸、盗賊だつてお佛壇の中へ手を入れるつて奴があるものか。」

言語道断である。

此で、倒伏しも、駈出しもしない梢は、相手のヒステリーより餘程気が狂つても居さうに見えるが、あはれな婦は、たとへば暗い路に迷つたもの、賣卜を頼んで、卦の上に於て、其の運命を罵られ、酷らしきまで悪状に、火難、劔難、盗難と覺みかけられた上を、牛命は旦夕に迫るぞ、と言つて威嚇されたも同然で、失望落膽、悄乎ればとても、恐れ戦けばとて、此の際怒り憤る氣は聊かも起らなかつたのに相違ない。

何故と言ふに、晝間、事の経緯を告げに来て、姪の三津代の手紙と、ともに、くしゃくしゃに恐入つた桑小さんの様子を視て、わが事ながら、弱い其の人たちのために、我が手で立派に煙管を取戻して、二人にほつと安心させて喜ぶ顔を見ようと思つた。うまれついた立て縮の達引氣の、不斷着の袖に凜と籠つた、其の三分の俠氣さへ、いまはハタと消耗せて、かくは、唯、運の定業を待つばかり——梢は、煙管さへ返つたら、禮之助は其の時歸る。……あの、義吉さんの茄子形をこゝに掌にする時は、禮之助の姿が内を横飛びに飛出した時の、外套に碌に鈕を掛けなかつた其のまゝで、四谷の坂町の

世帯の門の戸を開ける時だ——とばかり、現の境に、茫然として、思ひ詰めて居るのであつた。

四十六

「はい、はい、はい、はい、はい。」

「明樂だらう。」

と升子が——電話に掛つて居る女中に、振向いて、仰向いて、聲を掛けた。

「はい、え……へ——い。」

「直ぐ行くから。」

で、唯今、と云つて受話機をゴトリと掛けた女中を、顔で指揮した次手に、衣紋を繕つて、一寸軽く膝を立てると、伊達巻ばかりの着もの、裾に、投遣りな長襦袢、胸まで亂れて媚かしい。

「拾つて、拾つて、……金貨は落ち、やあ居ないんだよ、爪剪が其處で、何ぞ煙管を……煙管ぢやあない、私を拾つて下さいまして、口を利いて居るぢやあないか。鈍間だね。然やう、然やう、お拾ひなすつたら、丁と其をもとの通り、懐中持の中へ入れて、持ものと一緒に、はい、と言つて、私に下さるつて次第なんですの。」

「へい……貴女。いま爪をお取りなすつたんでございますか。」

「知れた事さ、癪に障るお客の前ぢやあ爪をとつて、なし崩しに少しづつ、弾いて遣るんだよ。」

いや、聞いて居られない。

「これから行く。明樂の客と言ふのがね、お寶もない癖に、悪く片着けて取澄ました、何とか學士とか言ふんですね。「貴女」とか何とか言つて、氣障で、しみつたれるつちやありやしない。奇特に、お約束だから行くけれど、さしむかひの杯洗と、お銚子の間へ、鼻紙を敷いて、「失禮、遊ぶ隙はあつても、ついねえ、ほ、ほ。」か何かで、チョコキン／＼「結構

です。何うぞお構ひなく、今日は快晴仕り恐悦至極。で、うそ／＼と顔を見い／＼手酌で飲むのを「おや、憚様。」とか何とか言つて、ぶちんと白茶けた鼻の尖へ此の缺片を弾いて遣るのさ。」

あゝ、私がついて居ない時、うちの人もなど、どんな目に逢はうも知れない。うっかり酒でも飲まねばいゝが、と梢はこんな中でも思つて居た。

「しみつたれたお客には、大概然うするもんですわね……ねえ、奥さん。」

と不意に眞向からあびせられて、

「まさか。」

とうっかり、そして梢は寂しく笑つた。

「まさかはないでせう。」

と急に雲が晴れたやうな、明るい顔で、

「こゝは赤坂よ。」

と衝と立つて居室へ入つた。

其の様子が、何か、打解けて、事の叶ひでもしさうに見えたので、あはれな此の二人の女は、息を静めて、凝と、もの越を伺つたのである。

そのうち、蘭奈薫じたが、

「もつと、もつと、端を引いて、其處を緩めて、然う、此方だよ、此方をさ。其方で極めたんだ。ぐいと——一寸しめるんだよ。解くんぢやあない。すらかすんぢやあないよ。アレサ氣味の悪い、替女のお化が取憑いたやうな風をおしてないつて言ふのに、衣紋がツゝ張るよ、前褌が崩れるぢやあないか。何のために肥つてるんだい。こんな時に力を出さないぢやあ、今時ア場末の縁日にもいちやくの姉さんは流行らない。あいたく痛いや。馬鹿。いくら緩錦だつて、内ぢ

やあ不斷手掛けさせて居るぢやあないか。横へ一寸ばかり其處を引くんだつてのに、分らないね。およし、畜生、馬鹿、鈍問、えゝ、鳶、どうするんだい油揚。」

と、出の小紋の冴えた色が、さつと、奥から浮いて出ると、敷居際でぐるりと廻つた。褌をはらくと捌くとゝもに、鳳凰の翼を金粉で彩つたやうな、錦の帯を襟と輝かして、さら／＼と長く曳いて鱗の如く狂つて出た。

「来やがれ、油揚。」

嘘ではない。……二階から這つて下りた小間使が、はらくして支膝で、

「晩のお惣菜でございますか。」

と白い顔して言つた。

「何がお惣菜だい。お菜つて柄かい、鹽をなめてりや可いんだ。おしな、帯を手傳ふんだ。此方へ廻つて、それさ、あれ、畜生、口惜い。」

と泣聲で、身悶を、ばた／＼すると、凄く、綺麗な尾の尖で、殆ど女二人巻倒して、

「勝手にしやがれ。素裸でお座敷へ出て遣るから。」

主人も主人、女中たち……何それほどの帯一筋、したがあれでは占るまい、と下谷で聞いた派手すきの、世帯で瘦せた手をさすつて、もう先刻から腰を切つて、帯の結目を壓へては、いや／＼差出るものでない、と氣を落ちつけて控へたのが、此の時堪り兼ねて、つと寄つて、

「お氣味が悪いでせうけれど。」

と低聲で然う言つて、ト掛を小腕で白く取つて、ひらりと肩をつけてぐいと占めた。

升子もきこえた女である。しめ加減がきちんと當ると、嵐にすさんで疲れたダリヤの、葉も花も眠るやうにしなやかに成つて、其ま／＼つとりと立つた。が、唯思ひがけず、女中二人が兩隅へ避けて突立つて居て、引添つたのが梢、と見る

と、ぶる／＼と身を震はして、

「よして、頂戴。」

両袖を左右に振つて、

「あら、堪らないねえ。」

とぼた／＼と、両手で袖を拂きながら、

「糖味噌臭い！」

「光ちゃん、心配おしないでよ……。」

四十七

見附を掛けて、辨慶橋は一面の霧である。

目に立籠めて濃い霧は、不忍の池の一面も、町中も、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、心の描く影にかはりはない。

梢のお柳は、袖も薄れ行く霧の裡に、記憶にばかり判然と、以前下谷に居た時の我が面影を思ひ浮べた。

然うだ。

さうして、丁どこんな霧の中を、禮之助の借家に音信れて、六疊の二階の書齋に逢ひに行つた光景を、睫にばかり露と成る涙の霧の濡色に、艶あるばかり描き出す……
然もそれは、秋の末なる夜中であつた。

抜けられない酒の座敷に夜は更けて、一旦は家へ歸つたが、左袂を両方に引上げる間もどかしい。紫紺のコートに友染のだてを包んで——大目には見てくれても、勤の義理ゆる主人に忍んであの黒堀の裏木戸を、密と開けて、するりと抜けると、鷹揚で居て、ハイカラな辭に、こんな處を嬉しがる、オバルが座敷歸りを近道して潛るのに出會すと、ハタと白い顔は逢ひながら、それでも互に見透かさねば成らないほどの霧だつた——「お楽しみ、お土産。」と年下の背中を一つ敲かれながら、棄て臺辭を言ふよりか其のお土産で胸一杯。

生憎、不意の通路に、今夜は餡も甘納豆も煎餅も持つて居ないのが、禮さんの祖母さんに、もの足りない。いつもは、丁と心掛けて、たしなみの袱紗を摺らして「はい。」と言つて、甘いもの、紙袋を、袋ながら、お祖母さんのちよこんとした膝に置く時の、あの嬉しさうな顔の見られないのが残念だ。が、それは榮耀の餅の皮と、翌日の餡子を考へて、お祖母さんの目の前で、私のすきな栗焼の皮ばかり食べて見せて、餡子を大事に手に握ゑて、小兒らしいと笑はれよう。禮さんには何が可い、女中の心づけも、大丈夫と、帯の間に氣を入れて、襟で、懷中を覗くやうに、氣はうか／＼と町を行く。人にも逢はず、また逢つても見えまい、人ツ子一人通らない。然も調弄はれるのが口惜いから、交番のある處はわき道へ外れて、霧の中を、霧にも縫はせ縫ひもして行く。途中で、前後唯一人糞を着て、ほつと糞の肩の浮いて来るものにつた。其の時霧がふは／＼と白く動いた。(糞脱げば黒羽二重の雪見かな。)いつか座敷で、學生さんで若い辭に、發句とやら俳諧とやらに大層凝つて居るのに聞いて、一寸端眼になりさうな、好いたらしいと覺えて居る……何故か、姿が似たやうな、あれを脱いだら、禮之助に成りはしないか、迎ひに來たのぢやないか知らと立留つた時、ふつと消えんと、急に寂しく成つて前途を急いだ。

ひた／＼と窺音が、靜めて行くが耳に響く、地には霜でも置くらしい。
根津と上野を見透しの小高い廣い處へ出た——さきの辻を一つ曲つて、此からが晝も寂しいけれど、生垣板塀を奥に縫ふと、其處の地内に、小ぢんまりした小さな二階屋。大方今頃は、まだ勉強をして居て、裏の小窓が、高い處に、屹と窓

明がほんのりと映すであらう。其とも寒いから、しめたか知ら。近頃は身體が弱い……煩ひでもしなけりやいゝが、二三度咳を聞いたから、と思ふ我身にもゾクリとして、……それまでふらく微醉に、突手に投げた袂を引いて、兩袖を胸に搔合せた。

霧の海から、靈地の光明、燈明臺でも探るやうな、いまだ遙にして影もない、彼方の小窓を大空に憧憬れて、蹈みしめながら浮くやうに前へ出た時、思はずハツとして一步退つた。

三間とも隔たるまい。此から曲らうとする辻の角に、きら／＼と細く閃いて、鋭い光るものがある。ゆるいが稻妻のやうに霧を切つて、丁ど立留つた此方の乳から肩のあたりと思ふ處、腕つて閃々と喰を切る、寸法といひ、もの凄さが、見紛ふべくもない、抜刀をひらめかすに相違ない。

いつもの夜なら如何に更けても、そんな事は考へぬ、慙くまで深い霧である。通魔に誘はれて、もの狂か何ぞの、憚らず、町に刀を弄ぶのであらうも知れない。近よれば浴びせかけられると、悚然として立すくんだ。

交番へ駈つけようか、思ふ男に逢ひに行くのに巡查さんは送つてくれまい。此のまゝ内へ遁けようか、顔見た時の嬉しさに、此の可恐さはかへられぬ。——何の懸路は水の底、火の中とさへ言ふものを、とかつとあつく成るまで引立つて勇氣がつくと、兎乎と振廻すらしい其の白刃の手の内が、隙間だらけで、突いて來たらかはされさう、沈めば空を切りさうだし、裾を拂へば飛べさうなり、肩をすかせば流れさうに見える、と思ふ。踊の立廻りを、人が見たら、此の方が狐が狸の憑いたであらう——一人ではつと氣合を掛けて、肩をそらし、袖を濡らし、身を沈め、ひらりと飛ぶ。身振を一人でして居るうち、其の勢、霜の尾花に飛つくやうに、衝と白刃に突當ると、ひよろ／＼と光つて流れて向うへ抜けたは、寢衣に烏打帽を着た男が、自轉車の積古をして居たので、ぐらりゆらりと見當つかず、おなじ處を、踏はずしては、横縦十字に乗つてはゐる、眞新しい輪が其の向々に、白く腕つて、光るのであつた。

禮さんの二階家は、一番奥で、左右に二三軒、邸路の入口に石段を上つて木戸がある。梢はとかくして、其の木戸へ辿着いた。が、門がさつて居た。逢ふ約束の通じた時は、こゝに仕掛をしてあるのを、其がない。もう先刻から心當りの窓の灯は霧に遮られたか見えなかつたし、樹立は暗し、門は遠い。呼ぶ高聲は憚られる。強く敲かぬと聞えないし、梢は、途中の白刃より、此にトンと氣を打つて、悄乎とした懐手、袖も襟も今は濡れて、霧に身を沈めて消えさうに成つた。一つばんが、ジャンと鳴つた、

地を踏む、すたく／＼と蹻音して、

「來たのか。」
「禮さん。」
火よ。火事よ。燃ゆる炎よ。相濟まない事ながら、戀の闇には松明であつた。
「流もとの板が危いよ。」
と言ふと、言ふうちに、
「冷いなあ。」

ひしと抱いて、軽々と、臺所を茶の間へ入つて、お祖母さんの枕許でトンと下した。

妙な女中で、給金の額さへあれば、夜具に金を掛けたから、厚綿の大衣具を、高く深く大きく、ぬつくりと茶の室一杯に成つて寐て居る。……其の傍を抱かれて抜けた。

「あれでも門は雨戸と一所に、二重にしまりがあるからね、じれつたくつて臺所から飛出したんだ。うつかり机で坐睡をするとお前が來たと思つてさめた途端だよ、——馬鹿な、藝を被て、酒を買ひに行く夢を見た。あしたは飲むぞ。翻んて、ものゝ内職が、一寸、いま一句切つく處だから。」

と言ふだけ言つて、すたく／＼と高くもない二階へ飛上つて、……寂然とした。

また一つ鐘を聞きながら、臺所口も、次の襖も、梢が立つてしめて來た。

となつかしさに頬を寄せたが、すやくと眠つて居た。

枕頭の火鉢に坐つて、埋火に旅をつぎもせず、ちつと坐つて、うつとり二階を見つゝ、バラ／＼と忙しく繰る、あの大きな字典のページの音に合せて、火鉢に指で、二上りの調子を取つた。

やがて衾は、すきゝれがして、がさ／＼と、綿は薄の糞であつた。が、霧を被いた鴛鴦の翼は、……黒羽二重と緋縮緬。忘れもしない。其の翌日の三時頃、数寄屋町から、俵を飛して、いまの三津代が駈つた。――折からの日曜で、二時にうけた宴會のお約束を、忘れはしないがうか／＼として居た、めで。

「道順が可うござんすから、すぐに茶屋へ行らつしやい。大變な御催促。帯も衣服も持つて来ました。」

と、其處はさすがに、胸算だつた。卓子臺には、銚子が乗り、火鉢には鍋が掛つて、梢は、臺所の手傳ひに、男ものを借りた浴衣の上被を、いま取つて、藝妓島田の姉さんかぶりの手拭をはづしたばかりの處。――出の衣ものより紋着に、その時しめた竹屋町。

「これは驚いた。怪しからん。僕のとこを何だと思つて居るだらう。」
と帯を手傳ふ三津代の肩越しに、火鉢から覗いて居た禮さんが、蹴出しの襪に水際立つて、すちりと裾を立關へひくのを見ると、残惜しさうに未練らしく立つて来て、

「まあ、よからう。」
前で留めたが、うしろへ廻つて、

「一寸。」
と言つて、帯へ手を掛けた時、

「見つともない。」

と片袖で衝と拂つた。

「藝妓の形に成つた時は、そんな真似をしちやあ不可い。」

「あゝ、其の罰が當つたか知ら……何故かう私は弱く成つた――。」

梢は一人濠端に、四谷へ歸る道も忘れ、辨慶橋へ入りもせず、見つけの坂の上を取つて、うつかりと歩行きながら、櫻の中の小さな柳に、しよんほりと身を寄せた。町中も水の面も、たゞたそがれの霧であつた。

四十八

「火事ですか――」

いつかうとくとしたと見える半鐘の音だと思つて、偶と目を覺したが、其切寂然として臺所に鼠の駆ける音と、もにカーンと響くのは其の鼠が金盃か何ぞ踏荒した餘波らしい。

と思つても、禮之助には一ツ半鐘の音に成つて何時までも耳を離れなかつた。熱と胸に手を置くと心臓がカーンと鳴るやうである。

戸の外は木曾山中の雪である。

禮之助は彌生町の霧の夜ふけを思ひ出さずには居られなかつた。いまの聲にも心着かず、尤も寐惚け半分で人を呼覺すやうなものではなかつたが、河谷の妻は天鵝絨の襟深くすやくとよく寐て居る。

姑が廁へ起きたので、話の腰も折れ氣も抜けた上、夜も更けたのに然までは、と憚られて、先刻は、二人とも聲を濟めて枕に就いたのであつた。

暇に近き髪の艶、薄化粧の香、袖の色、……屋根には雪を被いたであらう、霧は尙ほ濃く重かつた——鴛鴦の衾が思はれる。

禮之助は寢返りして、利佐子に背を向けながら、横状に衾を抱いたが寐られなかつた。——時刻も丁度然うらしい……はる／＼と田圃つたひに、いや、寂しい町を、木戸へ来て其處に、またたど／＼ともの置の裏あたりに、お柳が一人で居さうで成らない。

背戸島の樹立は早や眞白からう、霧だと影を包むけれど、雪は姿を浮出させて、彩色で刻んだやうに尙ほ面影が目に映る。

其の袖に、其の袂に、ちら／＼さら／＼とかる雪。

—あの、日本中の毛蟲嫌が、
情なればこそ潜つてくれた、本郷に棲んだ家の、門にも背戸にも、總地内一面の李の樹を思ひ出す。
白雪に紛ふ麗かさ。

通ひ路も春は花やかに、其の中をちら／＼と小走の紅入友染が、やがて淺葱の襟に映つて、颯と顔の色を青うした。青葉の毛蟲の夥多しさ。夏の浴衣も質素に成つて、秋の露の濡色も霧にさみしく包まれて、次第に流許の霜に所帯じみた。たゞ一とせのうちにはさへ、膚の瘦せたは誰がためぞ。

あゝ、又騒ぐ……鼠の音が可恐くはないか、あの心細かつた眞夜中の鍋焼餛飩が今頃は、坂の上から聞えるだらう。風でも吹かぬか、……犬の遠吠。

四谷を案ずるまでもない——まさ／＼と其の背戸にお柳の姿が目に着いて、木曾の雪の風情には、言譯のないにもせよ、さら／＼と其の女にかゝるは、白い大な毛蟲である。
井戸を覗いて、

「きやつ。」

と云つた、内側にも釣瓶の棹にも、李の下は赤いやうな毛蟲が一杯。
姑が使つた風呂桶にも雪の積むのが目に見える。

禮之助は、幾度か、がばと起きて、雨戸に手を掛けようとしたのであるが、晝の苦勞と疲勞と、氣あつかひを思ふにつけて、我が心の迷のために、利佐子の眠を驚かすに忍びなかつたのである。

糞も笠も納戸で視た。引被いて、いのち懸に驅出したら、夕暮煙草を買つた處あたりで、コートの下に襪を取つたお柳の魂とすれ違つて、我が夢は歩行くであらう。

あゝ、あの時の夢を實にして、見えない姿にも逢ひたい。

と思ひ詰めるのがうつ／＼に成つて、魂は此糞を被つて、雪の中をうろつきながら、衾の中に身悶えした。

慥くして、夜具の袖さへ動かさず、憤ましやかに、するりと抜けて、ほんのりと人膚の花の香ともにも、此の降雪に最う起きた苅谷の妻の、襟掻き合せ、帯しめる音を聞いたのである。

「もう、お目覺！」

と遺瀨なさに、縋つくやうにして言はうとしたが、さて利佐子の、起きて、それからの苦勞を察すれば、胸が切つて聲が涙を誘ひさうなので寐まれた。

四十九

「……其の女ですか、お糞の事ですね、——其は何うも然う更めてお聞きに預つては、何とも家内に向つてよりはお話

がしにくいですよ、實は……」
お糞の事を、利佐子に尋ねられた時、禮之助は又内々で酔つた中にも眞個弱つたやうに然う言つて一寸枕に面を伏せた。

彩色人情本

彩色人情本

翌夜——最う其の時は二人とも寢床に入つて居たのであるが……
今朝木曾の山家の雪の一處此のさながらの孤屋に夜が明けてから姑もやがて起出で、後の事は作しやも預らう、婆々がつきについての系圖しらべ、蓮如の説法、悴の自慢、料理の講釋、嫁の讒訴をしたのなんぞ讀者も悚毛を震はれるであらうと思ふお察し申す……

處で、一種の息氣は可恐しかつたが、炬燵をたよりに、姑が菓をくふ佛間の四疊半に小さく成つて引籠つて居た。はじめ禮之助の考へでは、主人周藏の許へ利佐さんから、今度の一坪の手紙を出して貰つて、善悪ともに其の返事を引籠んで、目を瞑つて其の周藏の東京の寓居へ飛込まう。で、其の口添で横頬を撲つた戀女房の内へ歸らうと言ふ下心であつたのだが、莉屋家の恚うした様子が二日一日はおろか半日片時も居た、まれさうでないのである。今は最う返事どころか、利佐さんの手紙まで待ちおほせない、旅費だけ借りて雪の上へ轉出ようぐるるに思つたのに——困つた事は、然うした経緯は姑へは内證で——昨夜も爐端で澤庵の賽の目とも存せず吸もの、蓋を取つた頃、實は少々歴史上の著述の事につきまして、寢覺の此のあたりの實地調査に——御迷惑ながら兩三日御厄介にと言つた口がある。

またあれで居て、飯をもちつける事と、悪どめをする事は、病と言つていゝくらゐしつこいのであるから、五通りや六通りぐるる廻つて歸る口實の腹案さへ立て、見たが、どれもものには成らなかつて、……雨とさへ俗に言ふものを、禮之助の頼む樹蔭は大雪である。おまけに晝頃から山嵐が添つて吹雪に成つた。

で、時々炬燵から這上る如く壁際に立つて、東向の小窓から外を視ると、野も山も濛々として人らしい、獸らしいもの影もない。眞白な荒海の如き中に、まだ凍らないさうで唯動くものは裏の小流の水車のいと、大いのが雪に包まれて倍嵩に成つて、ぐるりくと廻るのであるが、難破した幽靈船の大車輪が經帷子を着て、地獄の方へ、家ごと曳いて行きさうにさへ思はれる。

彼處が、來がけに路を聞いた獵師の家のあるあたり、と仰上つて覗く心覺えの小高い丘の、下には屋根も窓も視えない

で、たゞ折曲つた一つ松の直く成つて、ゆさぶれ、突立つたのが、胡粉で塗つた可憐い大なる鬼の態に見える、とも見れば、山深き雪の精が名も知れぬ犀の如き猛獸の装して、中空に躍まれる趣もあるのであつた。

「四面楚歌の聲だ。」
取つてもつけな事を言つて、うろくと爐端へ出て、自在鍋で煮ものをする救主と思ふ人の傍へよつて、二つ三つ言

を交したのがせめてもの心遣りで。
しかも爾時に、利佐さんから、其の年の春のはじめ寒の中根雪の時、思ひ掛けず薪を切らして、此の田の奥の山寺の庫裡まで、其の薪を借りに出た。丁と恚うした吹雪の日——今日の此の雪は一度消えませう——半町ばかりの道だけれども、往に分けた足跡がもう消えた、一歩づつ踏分けて歸る寺からの道の中ほどで、背に負つた薪の重さで、どつちの足も雪の深さに動かなく成ると、吹きつける風に押伏せられて、俯向けに倒れると、粉雪が目口に染みて助を呼ぶ聲が立たず、薪の上へ見る／＼うちに降積る、もう息の絶えさうな處を、向う岳の獵師の悴の折よく通か、つたのに救はれた事がある、山路の雪は心得と用意がなくては、分けては風に吹雪の時、うっかり門へも出られない、と、其の寺までも歩行いて見たい、と言ふ禮之助を留めながらに利佐さんの話を、納戸の姑の大生欠仲の中に聞いて、相火に袂を濡しもした。
待兼ねたのは、夜である、夜も晩食の後である。——約束はなけれども、利佐さんが屏風の裡で、湯沸で一銚子、と沙漠のなかの緑水とか。——其の時の待たるゝにつけても、早寝はやびけを心掛けて、

「少々かぜをひきましたか知ら。」
憐むべし……居候根性が早や交つて、故と晩食さへ半ばを減じて速かに昨夜とおなじ綴糸さへこほれ松葉の美しい二つ並んだ衾に坐つた。
雪はまだ降留まない。
「悴と思ふぞ——今夜は積る話かの……悴と思ふぞ、悴やすめ。」

彩色人情本

彩色人情本

と納戸から白髪で覗いた。
其の姑も早く寝た。

富士の山が湧いたほどに、例のお銚子が出たのである。
密と居寄つて、襦袢の揃む白い手で、

「お酌をませう。」

今夜は、いくらか利佐さんも、松本の料理屋の娘に成つた。

禮之助が飲むうちに、周蔵への玉章をしたゝめた、が、誰にいつ習つたやら、机はなしに巻紙を筆で捌いてすらくと

憎いくらゐの姿である。

肩に雪がしみさうで、小搔卷をだしぬけに、ふはりと掛けると、

「まあ。」

と筆を斜めに、慌てもしないで、

「こんな事を遊ばして……誰方かお迷はせなさいましたね。」

と莞爾。

禮之助は尻から半ば袂に潜つた。

とかくしてお蓑の事を聞かれたのである。

五十

「何ですか、藝妓に對手があると言ふと、榮耀らしく聞えますが、其も、矢張り所帯の苦勞から起つた事です。——
所帯のたしに茶屋酒を飲むと言つては太く矛盾して居るんですが、もともと其の榮耀や浮氣からはじまつた事でないのを

貴女にも申譯をしますんですが——

一昨年の暮でした。……無理に無理をしいく、潰れて居ましたのが、何うにも凌ぎがつかなく成つた處へ、……郷里の友だちで、工面のい、代議士が丁ど季節だから上京しました。恥もしみつたれもありません。此にいくらか頼まうと思つて築地の旅館へ出向いたんです。いくら友だちでも久しぶりで逢つたのに直ぐに無心を言はうとするのですから、心もさもしけりや、此の容子つたらお察し下さい。手取り早い話が、然まで大金でもないのですから早速承知をしてくれました。が、まあ晩飯に附合へ、と言ふので、自動車で同伴を仰せつかつたのが柳橋の或料理屋で……其處で七八人來た中に糞吉が居たんです、はじめて逢ひました。

酒ばかり發奮むけれど、内證で紙入を見せてくれないから終りが着かないでせう。氣が氣ぢやあないのに、お酌の踊るのを視てあざやかだ。

と人間慙う成ると情ないものです。對手は踊らせて飲んでるのに、然うかと言つて催促も成らず、そこちするうち十二時に成つて歸ると言ふと若い妓が二人で送つて、一所に又築地の旅館へ引上げたんです、此の時だつて一所に乗つた若い妓たちにも極りが悪い、……お先へと言つて深く場が切れなかつたぢやありませんか。

次の室には、最う床が取つてある。上座敷の食卓臺で、ウイスキーを持つて來いで、酔ばらひの政治家は、……其其大機嫌で引掛けるうちに、女の膝を枕にしてぐうぐうと寐て了つた。私は泣きたく成つた。此奴、何をして居るんだ、と女は顔を見るでせう。お剰に、女中頭が上つて來て、貴方お泊り、と藝妓の顔と見較べて言ふんだから、居堪れますまい……最うそこち一時半。

本郷まで歸る車賃で、米が三升買へるのだと思ふと自棄に成つて、其の三ヶ一で大川を向岸へ渡つて、——御存じないでせう——洲崎と言ふ妙な處で……昔馴染の引手茶屋の大戸をトンと押すと開いたから飛込んだんですが、遊ぶ金子はないんだから、酔つた酔つたと狸々の憑ものがしたやうな事を言つて、寢惚け顔をして、むつくり起上つた女中の、堅い蒲

團の藻脱けた中へ、のめずり込むと、此の女が若い癖に、主婦には内證らしい懐爐を樹へひそめて居たのが遊女よりは難有い。すつほり入つて、長火鉢の前で裾を合せて、ぶつ頂面をして、鐵瓶の下を搔廻して居る女中を招いて、後生だ入つてくれ、なんのツててれかくしを言ふうちに、ぐつすり寐込んで、枕頭の縁臺の外は早や人通りのカラ／＼下駄の音に目を覺すと、女中は居ません。朝歸の客を迎ひに行つたと見える。年よつた主婦がふつと湯氣の立つ鐵瓶の向うに坐つて居ます。よくお氣味が悪くなく、そんな中で寐られましたね、と言はれた時は、沁々と赤面しました。勿體ない、女中の寢床に心ぢやあ、訛を言つて、禮を言つて出ましたが、

朝歸るのを見届けたのが、主婦だから此は臆が据つて居た。僥倖に、洲崎の引手茶屋へ河童が泊つたとも狸が寝たとも新聞に出ませんでした。——それなり女中で御覽なさい、旭に照して、屹と聲のあしあとの足痕を捜したに相違ないのです。

勿論、四谷の宅へは歸りません。すぐに築地の旅館へ出向いたんですが、かれこれ十時。

政治家はまだ寐て居ました。——襖を開けて、ふらりと緋縮緬の長襦袢のが、水から離れて錦に寝て居た金魚のやうにふら／＼と弱つて出て来て、大い眠さうな目でお早う、と私に言ふから、昨夜はお楽しみ、とうつかり言つた白癡さ加減が堪らない。此を聞くとつんとして、羽織を引ふるつて着たまま、澄して廊下に出て行つたんです。

其つ切口を利かない——風呂場へ行つたんです。もう一人の方は、一足さきへ湯に入つて居るのです。代議士はまだ起きません。

其處へ、中年増の容子のいゝのが二人、どつちも昨夜ので、一寸素人らしい外出の風俗で、階子段を上つて来ました。あとへついて上つたのが養吉です。風呂へ行くのが、此の寒い處を廊下の障子を開放しにして行つたから、よく見えませんでした。

其の養吉が、壇を廊下へ上る時、ひたりと裾が返ると、淺葱の勝つた羽二重の蹴出しに擦んで、大島お召の裾が、切れ

て薄汚れた綿の出たのがちらりと視えた、爪足の白いだけ、貧乏の蛇が魅込んで居るやうだし、尾花にかゝる雪のやうで姿のいゝ細い腰は、枯野に消えさうに見えたんです——洒落や風流ではありません。女のかうしたありさまは、萩に倒れて死ぬと言ふ俳諧師より尙ほ可哀です。

風呂に行つた緋縮緬は言ふまでもありません、昨夜の誰それ、いま来たつれも、兩手に五個ぐらゐるづゝ、五色の玉を飾つて居る——其の癖、裾綿の切れたのは、三味線も唄も立派でした。

私は慄然したんです。四谷の内でも、おなじやうな裾綿のほつれたのを着て居たんぢやありませんか……」

雪
靈
記
事

「此のくらのな事が……何の……小兒のうち歌留多を取りに行つたと思へば——」
 越前の府、武生の、怪しい旅宿の、雪に埋れた軒を離れて、二町ばかりも進んだ時、吹雪に行惱みながら、私は——然
 う思ひました。

思ひつゝ、推切つて行くのであります。
 私は此處から四十里餘り隔たつた、おなじ雪深い國に生れたので、恙うした夜道を、十町や十五町歩行くのは何でもな
 いと思つたのであります。

が、其の凄じさと言つたら、まるで眞白な、冷い、粉の大波を泳ぐやうで、風は荒海に齊しく、ぐわうぐわうと呻つて、
 地——と云つても五六尺積つた雪を、押搦つて狂ふのです。

「あの時分は、脇の下に羽でも生えて居たらう。屹と然うに違ひない。身輕に雪の上へ乗つて飛べるやうに。」
 ……でなくつては、と呼吸も吐けない中で思ひました。

九歳十歳ばかりの其の小兒は、雪下駄、竹草履、それは雪の凍てた時、こんな晩には、柄にもない高足駄さへ穿いて居
 たのに、轉びもしないで、然も遊びに更けた正月の夜の十二時過ぎなど、近所の友だちにも別れると、唯一人で、白い
 社の廣い境内も抜ければ、邸町の白い長い土塀も通る。……ザツツ、ぐわうと鳴つて、川波、山嵐とも吹いて來ると、
 ぐるぐると廻る車輪の如き濃く黒ずんだ雪の渦に、ぐるぐると舞ひながら、ふはぐと濟まアして内へ歸つた——夢では
 ない。が、あれは雪に靈があつて、小兒を可愛がつて、連れて歸つたのであらうも知れない。

「あゝ、酔いぞ。」
 ハツと呼吸を引く。目口に吹込む粉雪に、ぱつと背を向けて、そのたびに、風と反對の方へ眞俯向けに成つて防ぐので

せうやうな人々とお

雪 靈 記 事

あります。恠う言ふ時は、其の粉雪を、地ぐるみ煽立てますので、下からも吹上げ、左右からも吹捲くつて、よく言ふこととですけれども、面の向けやうがないのです。
 小児の足駄を思ひ出した頃は、實は最う穿ものなんぞ、疾の以前になかつたのです。
 しかし、御安心下さい。——雪の中を跣足で歩行する事は、都會の坊ちやんや嬢さんが吃驚なざるやうな、冷いものでないだけは取柄です。ズボリと踏込んだ一息の間は、冷さ骨髄に徹するのですが、勢よく歩行して居るうちには、温く成ります、ほか／＼するくらゐです。
 やがて、六七町漕つて出ました。

まだ此の間は氣丈夫でありました。町の中ですから兩側に家が續いて居ります。此の邊は水の綺麗な處で、軒下の兩側を、清い波を打つた小川が流れて居ます。尤も其れなんぞ見えるやうな容易い積り方ちやありません。

御存じの方は、武生と言へば、あゝ、水のきれいな處かと言はれます——此の水が鐵を鍛へるのに適するさうで、釜、鍋、庖丁、一切の名産——其の昔は、聞いた刀鍛冶も住みました。今も鍛冶屋が軒を並べて、其の中に、柳と／＼に目立つのは旅館であります。

が、最う目貫の町は過ぎた、次第に場末、町端れの——と言ふとすぐに大なる山、峻い坂に成ります——あたりで。……此の町を離れて、鎮守の宮を抜けますと、いま行かうとする、志す處へ着く筈なのです。

それは、——其許は——自分の口から申兼ねる次第でありますけれども、私の大恩人——いえ／＼恩人で、そして、夢にも忘れられない美しい人の宿住居なのであります。

宿住居と申します——以前は、北國に於ても、旅館の設備に於ては、第一と世に知られた此の武生の中でも、其の隣一の旅館の娘で、二十六の年に、其の頃の近國の知事の妾に成りました……妾とこそ言へ、情深く、優しいのを、昔の國主

貴夫人、籠中のやうに稱へられたのが名にしおふ中の河内の山裾なる鹿杖の里に、寂しく山家住居をして居るのでから此の大雪の中に。

二

流るゝ水と／＼もに、武生は女のうつくしい處だと、昔から人が言ふのであります。就中、葛屋——其の旅館の——お米さん（恩人の名です）と言へば、國々評判なのであります。

まだ汽車の通じない時分の事。……

「昨夜は何方でお泊り。」

「武生でございます。」

「葛屋ですな、綺麗な娘さんが居ます。勿論、御覽でせう。」

旅は道連れ、立場でも、又並木でも、言を掛合ふ中には、屹と此の事がなければ納まらなかつたほどであつたのです。往來に馴れて、幾度も葛屋の客と成つて、心得顔をしたものは、お米さんの事を渾名して、むつの花、むつの花、と言ひました。——色と言ひ、また雪の越路の雪ほどに、世に知られたと申す意味ではないので——此は後言であつたのです。

……不具だと言ふのです。六本指、手の小指が左に二つあると、見て来たやうな噂をしました。何故か、——地方は分けて結婚期が早いのに——二十六七まで縁に着かないで居たからです。

（しかし、……やがて知事の妾に成つた事は前に一寸申しました。）

私はよく知つて居ます——六本指なぞと、氣もない事です。確に見ました。しかも其の雪なす指は、摩耶夫人が召す白い細い花の手袋のやうに、正に五瓣で、其が九死一生だつた私の額に密と乗り、軽く胸に掛つたのを、運命の星を算へる如く熟と視たのでありますから。——

また其の手で、硝子杯の白雪に、鶏卵の蛋黄を溶かしたのを、甘露を灌ぐやうに飲まされました。ために私は蘇返りました。

「冷水を下さい。」

最う、それが末期だと思つて、水を飲んだ時だつたのです。脚氣を煩つて、衝心をかけて居たのです。其のために東京から故郷に歸る途中だつたのでありますが、汚れくさつた白糸を一枚きて、頭陀袋のやうな革靴一つ掛けたのを、女關さきで断られる處を、泊めてくれたのも、螢と紫陽花が見透しの背戸に涼んで居た。其のお米さんの振向いた腫の情だつたのです。

水と言へば、せいぐ米の磨汁でもくれさうな處を、白雪に蛋黄の情。——萌葱の蚊帳、紅の麻、……蚊の酷い處ですが、お米さんの出入りには、はらくと螢が添つて、手を映し、指環を映し、胸の乳房を透して、浴衣の染の秋草は、女郎花を黄に、萩を紫に、色あるまでに、蚊帳へ影を宿しました。

「まあ、汗びつしより。」

と汚い病苦の冷汗に……そよくと風を惠まれた、淺葱色の水圍扇に、幽に月が映しました。……

おなじ年、冬のはじめ、霜に緋葉の散る道を、爽に故郷から引返して、再び上京したのでありますが、福井までには及びません、私の故郷からは其から七里さきの、丸岡の建場に俣が休んだ時立合せた上下の旅客の口々から、もうお米さんの風説を聞きました。

知事の妾と成つて、家を出たのは、其の秋だつたのでありました。

こゝはお察しを願ひます。——心易くは禮手紙、たゞ音信さへ出来ませぬ。

十六七年を過ぎました。——唯今の鯖江、鯖波、今庄の驛が、例の音に聞えた、中の河内、木の芽峠、湯の尾峠を、前

後左右に、高く深く貫くのでありまして、汽車は雲の上を馳ります。

間の宿で、世事の用は聊かもなかつたのでありますが、可憐の餘り、途中で武生へ立寄りしました。

内證で……何となく顔を見られますやうで、ですから内證で、其の葛屋へ参りました。

三

門、背戸の清き流、軒に高き二本柳——其の青柳の葉の繁茂——こゝに名み、あの背戸に團扇を持つた、其の姿が思はれます。それは昔のまゝだつたが、一棟、西洋館が別に立ち、帳場も卓子を置いた受附に成つて、葛屋の様子はかつて居ました。

代替りに成つたのです。

少しばかり、女中に心づけも出来ましたので、それとなく、お米さんの消息を聞きますと、葛屋も葛龍館と成つた發展で、持の此の女中などは、京の津から來て居るのださうで、少しも恩人の事は知りません。

番頭を呼んでもらつて訊ねますと、——勿論其の頃の男ではなかつたが——此はよく知つて居ました。

葛屋は、若主人——お米さんの兄——が相場にかゝつて退轉をしたさうです。お米さんにまけない美人をと言つて、若主人は、祇園の藝妓をひかして女房にして居たさうであります。

知事——其の三年前に亡く成つた事は、私も新聞で知つて居たのです——其のいくらか手當が残つたのだらうと思はれます。當時は町を離れた虎杖の里に、兄妹がくらしして、若主人の方は、町中の或會社へ勤めて居ると、此の由、番頭が話してくれました。一昨年の事なのです。

——いま私は、可憐い吹雪の中を、其處へ志して居るのであります——

が、さて、一昨年の其の時は、翌日、半日、いや、午後三時頃まで、用もないのに、女中たちの蔭で怪む氣勢のするの
 が思ひ取られるまで、腕組が、肘枕で、やがて、夜具を引被つてまで且つ思ひ、且つ惱み、幾度か逡巡した最後に、旅館
 をふらりと成つて、たうとう思人を訪ねに出ました。
 故と途中、餘所で聞いて、虎杖村に憧れ行く。……

道は鎮守がめあて、した。
 白い、静な、曇つた日に、山吹も色が浅い、小流に、苔蒸した石の橋が架つて、其の奥に大きくはありませんが深く
 神寂びた社があつて、大木の杉がすらくと杉なりに並んで居ます。入口の石の鳥居の左に、就中暗く聳えた杉の下に、
 形はつい通りであります、雪難之碑と刻んだ、一基の石碑が見えました。

雪の難——荷擔夫、郵便配達の人たち、其の昔は数多の旅客も——此からさしかつて越えようとする峠路で、屢々命
 を殞したのでありますから、いづれ其の靈を祭つたのであらう、と大空の雲、重る山、續く嶺、聳ゆる峰を見るにつけて、
 凄じき大霧の雪の風情を思ひながら、旅の心も身に沁みて通過しました。

暇道少しばかり、菜種の畦を入つた處に、志す庵が見えました。怪しい一軒家の平屋ですが、門のかゝりに何となく、
 むかしの狀を偲ばせ、菅葺の屋根ではありません。
 仲上る背戸に、柳が霞んで、こゝにも細流に山吹の影の映るのが、繪に描いた螢の光を幻に見るやうでありました。

夢にばかり、現にばかり、十幾年。
 不思議にこゝで逢ひました——面影は、黒髪に、笄して、雪の襦袢した貴夫人のやうに遙に思つたのとは全然違ひまし
 た。黒縹子の襟のかゝつた縞の小袖に、些とすき切れのあるばかり、空色の絹のおなじ襟のかゝつた筒袖を、帯も見えな
 いくらる引合せて、細りと着て居ました。
 其の姿で手をつきました。あゝ、うつくしい白い指、結立ての品のい、圓髻の、情らしい柔順な鬢の耳朶かけて、雪な

す項が優しく清らかに俯向いたのです。

生意氣に杖を持つて立つて居るのが、目くるめくばかりに思はれました。

「私は……關……」

と名を申して、

「萬屋さんのお嬢さんに、お目にかゝりたくて参りました。」

「米は私でございます。」

と顔を上げて、清しい目で熟と視ました。

私の額は汗ばんだ。——あのいつた額に置かれた、手の影ばかり白く映る。

「まあ、關さん。——おとなにお成りなさいました……」

此ですもの、可憐さはどんなでせう。

しかし、こゝで私は初恋、片おもひ、戀の愚癡を言ふのではありません。

……此の凄い吹雪の夜、不思議な事に出あひました、其のお話をするのであります。

四

その時は、四疊半ではありません。が、爐を切つた茶の室に通されました。
 時に、先客が一人ありまして爐の右に居ました。氣高いばかり品のい、年とつた尼さんです。失禮ながら、此の先客は
 邪魔でした。それがために、いとと拙い口の、千の一つも、何にも、ものが言はれなかつたのであります。
 「貴女は煙草を吸いますか。」
 私はお米さんが、其の筒袖の優しい手で、煙管を持つのを視て然う言ひました。

お米さんは、控へて一寸俯向きました。

「何事もわすれ草と申しますな。」

と尼さんが、能の面がものを言ふやうに言ひました。

「關さんは、今年三十五にお成りですか。」

とお米さんが先へ數へて、私の年を訊ねました。

「三碧なう。」

と尼さんが言ひました。

「貴女は？」

「私は一つ上……」

「四線なう。」

と尼さんが又言ひました。

——略して申すのですが、其處へ案内もなく、づかくと入つて来て、立狀に一寸私を尻目にかけて、爐の左の座についた一人があります——山伏か、隠者か、と思ふ風采で、ものゝ鷹揚な、悪く言へば傲慢な、下手が畫に描いた、奥州めぐりの水戸の黄門と言つた、鼻の隆い、髯の白い、早や七十ばかりの老人でした。

「此は關さんか。」

と、いきなり言ひます。私は吃驚しました。

お米さんが、しなよく頷きますと、

「左様か。」

と言つて、此から滔々と辯じ出した。其の辯ずるのが都會に於ける私ども、なかま、なかまと申して私などは、ものゝ

數でもないのですが、立派な、畫の畫伯方の名を呼んで、片端から奴がと苦り、彼め、と蔑み、小僧、と呵々と笑ひます。

私は五六尺飛退つて叩頭をしました。

「汽車の時間がございませうから。」

お米さんが、送つて出ました。花菜の中を半の時、私は香に咽んで、涙ぐんだ聲して、

「お寂しくおいでなさいませう。」

と精一杯に言つたのです。

「いゝえ、兄が一緒ですから……でも大雪の夜などは、町から道が絶えますと、こゝに私一人きりで、五日も六日も暮しますよ。」

とほろりしました。

「其のかはり夏は涼しうございませう。避暑に行らつしやい……お宿をしますよ。……其の時分には、降るやうに螢が飛んで、此の水には菖蒲が咲きます。」

夜汽車の火の粉が、木の芽峠を螢に飛んで、窓には其の菖蒲が咲いたのです——夢のやうです。……あの老尼は、お米

さんの守護神——はてな、老人は、——知事の怨讎ではなかつたか。

そんな事まで思ひました。

圓鬚に結つて、筒袖を着た人を、しかし、其一人は却つて、お米さんを秘密の霞に包みしました。

三十路を越えても、寝れても、今も其美しさ。片田舎の虎杖になぞ世にある人とは思はれません。

ために、音信を怠りました。夢に所がきをするやうですから。……とは言へ、一つは、日に増し、不思議に色の濃く成

る爐の右左の人を憚つたのであります。

音信して、恩人に禮をいたすのに仔細はない筈。雖然、下世話にさへ言ひます。慈悲すれば、何とかする。……で、恩人と言ふ、其の恩に乗じ、情に附入るやうな、賤しい、浅ましい、卑劣な、下司な、無禮な思ひが、何うしても心を離れないものですから、ひとり、自ら憚られたのであります。

五

「あゝ、彼處は鎮守だ——」
吹雪の中の、雪道に、白く續いた其の宮を、さながら峰に築いたやうに、高く朦朧と仰ぎました。

「さあ、一息——」
が、其の息が吐けません。
眞俯向けに行く重い風の中を、背後からスツと軽く襲つて、裾、頭をどつと可恐いものが引包むと思ふと、ハツとひき息に成る時、さつと抜けて、目の前へ眞白な大なる輪の影が顯れます。とくる／＼と廻るのです。廻りながら輪を巻いて巻き／＼巻込めると見ると、忽ち凄じい渦に成つて、ひゆうと鳴りながら、舞上つて飛んで行く。……行くと否や、續いて背後から巻いて來ます。それが次第に激しく成つて、六ツ四ツ數へて七ツ八ツ、身體の前後に列を作つて、巻いては飛び、巻いては飛びます。巖にも山にも碎けないで、皆北海の荒波の上へ馳るのです。——最う此の渦がこんなに捲くやうに成りましては堪へられませんか。此の渦の湧立つ處は、其の跡が穴に成つて、其處から雪の柱、雪の人、雪女、雪坊主、怪しい形がほつと立ちます。立つて倒れるのが、其まゝ雪の丘のやうに成る……其が、右に成り、左に成り、横に積り、縦に敷きます。其の行く處、飛ぶ處へ、人のからだを持つて行つて、仰向けにも、俯向せにもたゞきつけるのです。
——雪難之碑。——峰の尖つたやうな、其處の大木の杉の梢を、睫毛にのせて倒れました。私は雪に埋れて行く……身

動きも出來ません。くひしばつても、閉ぢても、目口に浸む粉雪を、しかし紫陽花の青い花片を吸ふやうに思ひました。

——「菖蒲が咲きます。」——
螢が飛ぶ。
私はお米さんの、清く暖き膚を思ひながら、雪にむせんで叫びました。
「魔が妨げる、天狗の業だ——あの、尼さんか、怪しい隠士か。」

雪靈續記

機会がおのづから来ました。

今度の旅は、一體はじめは、仲仙道線で故郷へ着いて、其處で、一事を済したあとを、姫路行の汽車で東京へ歸らうとしたのでありました。——此列車は、米原で一體分身して、分れて東西へ馳ります。其が大雪のために進行が續けられなくなつて、兎方武生驛（越前）へ留つたのです。強ひて一町堀ぐらゐるは前進出来ない事はないが、然うすると、深山の小驛ですから、旅舎にも食料にも、乗客に對する設備が不足で、危険であるからの事でありました。

元來——歸途に此の線をたよつて東海道へ大廻りをしようとしたのは、……實は途中で決心が出来たら、武生へ降りて許されない事ながら、そこから虎杖の里に、もとの蔦屋（旅館）のお米さんを訪ねようと言ふ……見る／＼積る雪の中に、淡雪の消えるやうな、あだなのぞみがあつたのです。で其の望を煽るために、最う福井あたりから酒さへ飲んだのであります。が、酔ひもしなければ、心も定らないのであります。

唯一夜、徒らに、思出の武生の町に宿つても構はないが、宿りつゝ、其處に虎杖の里を彼方に視て、心も足も運べない時の儂さには尙ほ堪へられまい、と思ひなやんで居ますうちに——

汽車は着きました。目をつむつて、耳を壓へて、發車を待つのが、三分、五分、十分十五分——やゝ三十分過ぎて、やがて、驛員に其の不通の通達を聞いた時は！

雪が其まゝの待女郎に成つて、手を取つて導くやうで、まんじ巴の中空を渡る橋は、宛然に玉の棧橋かと思はれました。人間は増長します。——積雪のために汽車が留つて難儀をすと言へば——旅籠は取らないで、すぐにお米さんの許

へ、然うだ、行つて行けなうな事はない、が、しかし……と、そんな事を思つて、早や壁も天井も雪の空のやうに成つた停車場に、しばらく考へて居ましたが、餘り不寐だと己を制して、矢張り一旦は宿に着く事にしましたのです。ですから、同列車の乗客の中で、停車場を離れたのは、多分私が一番あとだったらうと思ひます。大雪です。

「雪やこんこ、
雪やこんこ。」

「雪やこんこ、
雪やこんこ。」

大雪です——が、停車場前の茶店では、まだ小兒たちの、そんな聲が聞えて居ました。其の時分は、山の根篋を吹くやうに、風もさら／＼と鳴りましたつけ。町へ入るまでに日もとつぷりと暮果てますと、

「爺さいのウ婆さいのウ、
綿雪小雪が降るわいのウ、
雨戸も小窓もしめさつし。」

と寂しい怪しい唄の聲——雪も、小兒が爺婆に化けました。——風も次第に、ぐわう／＼と樹ながら山を揺りました。店屋さへ最う戸が閉る。……旅籠屋も門を閉しました。家名も何も構はず、いま其家も閉めようとする一軒の旅籠屋へ駆込みましたのですから、場所は町の目貫の向へは遠いけれど、鎮守の方へは近かつたのです。

座敷は二階で、だつ広い、人氣の少ないさみしい家で、夕餉もさびしうございました。若狭蝶——大すきですが、其が附木のやうに凍つて居ます——白子魚乾、切干大根の酢、椀はまた白子魚乾に、とろゝ毘布の吸もの——しかし、何となく可憐くつて涙ぐまるゝやうでした、何故ですか。……酒も呼んだが酔ひません。むかしの事を考へると、病苦を救はれたお米さんに對して、生意氣らしく恥かしい。

兩手を炬燵にさして、俯向いて居ました、濡れるやうに涙が出ます。さつと言ふ吹雪であります。さつと吹くあとを、ぐわう／＼と鳴る。……次第に家ごと揺るほどに成りましたのに、何と言ふ寂寞だか、あの、ひつそりと障子の鳴る音。カタ／＼カタ、白い魔が忍んで来る。雪入道が見える。カタ／＼カタ、さーッ、さーッ、ぐわう／＼と吹くなかに——見る／＼うちに障子の棧がバツ／＼と白く成ります、雨戸の隙へ鳥の嘴程吹込む雪です。

「大雪の降る夜など、町の路が絶えますと、三日も四日も私一人——」
三年以前に逢つた時、……お米さんが言つたのです。

「路の絶える。大雪の夜。」

お米さんが、あの虎杖の里の、此の吹雪に……

「……唯一人。」

私は決然として、身ごしらへをしたのであります。

「雷報を——」

と言つて、旅宿を出ました。

實はなくなりました父が、其の危篤の時、東京から歸りますのに、(タダイマココマデキマシタ)と此の町から発信した……偶とそれを口實に——時間は遅くはありませんが、目口もあかない、此の吹雪に、何と言つて外へ出ようと、放火か強盗、人殺に疑はれはしまいかと危むまでに、さん／＼思ひ惑つたあとです。

ころ柿のやうな髪を結つた霜けた女中が、雑炊でもするのでせう——土間で大釜の下を焚いて居ました。番頭は帳場に青い顔をして居ました。が、無論、自分たちが其の使に出ようとは怪我にも言はないのであります。

「何う成るのだらう……とにかくこれは尋常事ぢやない。」
 私は幾度となく雪に轉び、風に倒れながら思ったのであります。
 「天狗の爲す業だ、——魔の業だ。」
 何しろ可恐い大な手が、白い指紋の大渦を巻いて居るのだと思ひました。
 いのちの吹雪の中に——

最後に倒れたのは一つの雪の丘です。——然うは言つても、小高い場所に雪が積つたものではありません、粉雪の吹溜りがこんもりと積つたのを、哄と吹く風が根こそぎに其の吹く方へ吹飛ばして運ぶのであります。一つ二つの数ではない。波の重るやうな、幾つも幾つもの、颯と吹いて、むら／＼と位置を亂して、八方へ高く成ります。
 私は最う、それまでに、幾度も其の渦にくる／＼と巻かれて、大な水の輪に、子子蟲が引くりかへるやうな形で、取つては投げられ、攔んでは倒され、捲き上げては倒されました。

私は——白晝、北海の荒波の上で起る處の此の吹雪の渦を見た事があります。——一度は、たとへば、敦賀灣でありました——繪にかいた雨龍のぐる／＼と輪を巻いて、一條、ゆつたりと尾を下に垂れたやうな形のもので、降りしきり、吹煽つて空中に薄黒い列を造ります。
 見て居るうちに、其の一つが、ぱつと消えるかと思ふと、忽ち、ほつと、續いて同じ形が顯れます。消えるのではない、幽に見える若狭の岬へ矢の如く白く成つて飛ぶのです。一つ一つが皆な然うでした。——吹雪の渦は湧いては飛び、湧いては飛びます。
 私の耳を打ち、鼻を振ぢつ、いま、其の渦が乗つては飛び、掠めては走るんです。

大波に漂ふ小舟は、宙天に揺上らるゝ時は、唯波ばかり、白き黒き雲の一片をも見ず、奈落に採落さるゝ時は、海底の巖の根なる藻の、紅き碧きをさへ見ると言ひます。

風の一息死ぬ、真空の一瞬時には、町も、屋根も、軒下の流も、其の屋根を壓して果しなく十重二十重に高く聳ち、遙に連る雪の山脈も、旅籠の炬燵も、釜も、釜の下なる火も、果て虎杖の家、お米さんの薄色の袖、紫陽花、紫の花も……お米さんの素足さへ、きつぱりと見えました。が、脈を打つて吹雪が来ると、呼吸は咽んで、目に盲のやうに成るのであります。

最早、最後かと思ふ時に、鎮守の社が目の前にあることに心着いたのであります。同時に峰の尖つたやうな眞白な杉の大木を見ました。

雪雜之碑のある處——

天狗——魔の手など意識しましたのは、其の樹のせるかも知れませんが。たゞし此に目標が出来た、めか、背に根が生えたやうに成つて、倒れて居る雪の丘の飛移るやうな思ひはなくなりました。

洵は、兩側にまだ家のありました頃は、——中に旅籠も交つて居ます——一面識はなくつても、同じ汽車に乗つた人たち、疎にも、それ／＼の二階に籠つて居るらしい、其れこそ親友が附添つて居るやうに、氣丈夫に頼母しかつたのであります。尤も其を心あてに、頼む。——助けて——助けて——と幾度か呼びました。けれども、窓一つ、ちらりと燈火の影の漏れて答ふる光もありませんでした。聞える筈もありますまい。

いまは、唯お米さんと、間に千尺の雪を隔つるのみで、一人死を待つ、……寧ろ目を瞑るばかりに成りました。時に不思議なものを見ました——底なき雪の天空の、尙ほ其の上を、ブスリと鑿で穿つて其の穴から落ちこぼれる……大きさは然うです……蠟燭の灯の少し大いほどな眞蒼な光が、ちら／＼と雪を染め、染めて、ちら／＼と染めながら、ツツと輝いて、其の古杉の梢に来て留りました。其の青い火は、しかし私の魂が最う藻脱けて、虚空へ飛んで、倒に下の

亡骸を覗いたのかも知れませんが、其の影が映すと、半ば埋れた私の身体は、ばつと紫陽花に包まれたやうに、青く、藍に、群青に成りました。此の山の上なる峠の茶屋を思ひ出す——極暑、病氣のため、俵で越えて、故郷へ歸る道すがら、其の茶屋で休んだ時の事です。門も背戸も紫陽花で包まれて居ました。——私の顔の色も同じだつたらうと思ふ。手も青い。何より、嫌な、可憐い雷が鳴つたのです。たゞさへ破れようとする心臓に、動悸は、破障子の煽るやうで、震へる手に飲む水の、水より前に無数の蚊が、目、口、鼻へ飛込んだのであります。其の時の苦しさ。——今も。

三

白い梢の青い火は、また中空の渦を映し出す——とぐるを巻き、尾を垂れて、海原のそれと同じです。いや、それよりも、峠で屋根に近かつた、あの可憐い雲の峰に宛然であります。此の上、雷。

大雷は雪國の、こんな時に起ります。

死力を籠めて、起上らうとすると、其の渦が、風で、ぐわうと巻いて、捲きながら亂るゝと見れば、計知られぬ高さから颯と大瀧を揺落すやうに、泡沫とも、しぶきとも、粉とも、灰とも、針とも分かず、降埋める。「あつ。」

私は又倒れました。

怪火に映る、其の大瀧の勢は、目の前なる、グツ、ンと重い、大なる山の頂から一雪崩れに落ちて来るやうにも見えませんでした。引掻かれた。

苦痛の顔の、醜さを隠さうと、裏も表も同じ雪の、厚く、重い、外套の袖を被ると、また青い火の影に、紫陽花の花に包まれますやうで、且つ白二羽重の裏に薄萌葱がすつと透るやうでした。

ウオ、ウオ、ウオ、

俄然として耳を噛んだのは、凄く可憐い、且つ力ある犬の聲でありました。

ウオ、ウオ、ウオ、

虎の嘯くとよりは、龍の吟するが如き、凄烈悲壯な聲であります。

ウオ、ウオ、ウオ、

三聲を續けて鳴いたと思ふと……雪をかついだ、太く湿しい、しかし短せた、一頭の和犬、むく犬の、耳の青竹をそいだやうに立つたのが、吹雪の瀧を、上の峰から、一直線に飛下りた如く思はれます。忽ち私の傍を近々と横きつて、左右に雪の白泡を、ざつと蹴立て、恰も水雷艇の荒浪を切るが如く猛然として進みます。

あと、ものゝ一町ばかりは、眞白な一條の路が開けました。——雪の渦が十ヲばかりぐるぐると續いて行く……

此を反對にすると、虎杖の方へ行くのであります。——が、私は夢中で、其のあとに續いたのであります。

路は一面、渺々と白い野原に成りました。が、大犬の勢は衰へません。——勿論、行くあとに、道が開けます。渦が續いて行く……

野の中空を、雪の翼を縫つて、あの青い火が、蜿々と螢のやうに飛んで來ました。眞正面に、四字形の大きな建ものが、眞白な大軍艦のやうに朦朧として顯れました。と見ると、怪し火は、何と、ツツツと尾を曳きつゝ。先へ斜に飛んで、其の大屋根の高い棟なる避雷針の尖端に、ばつと留つて、ちらちらと青く輝きます。ウオ、ウオ、ウオ、

鐵つくりの門の柱の、やがて平地と同じに埋まつた真中を、犬は山を乗るやうに入ります。私は坂を越すやうに續きま

した。ドンドンと鳴つて、犬の頭突きに、扉が開いた。餘りの嬉しさに、雪に一度手を支へて、鎮守の方を遙拜しつゝ、建ものゝ、戸を入りました。

唯、犬は廊下を、何處へ行つたか分りません。途端に……

ざつ／＼と、あの續いた渦が、一ツづゝ數萬の蛾の群つたやうな、一人の人の形になつて、縦隊一列に入つて來ました。雪で束ねたやうですが、いづれも演習行軍の装して、真先なのは刀を取つて、びたりと胸にあてゝ居る。それが長靴を高く踏んでばかりと入る。あとから、囊、荷銃したのを、一隊十七人まで數へました。

うろつく者には、傍目も觸らず、肅然として廊下を長く打つて、通つて、廣い講堂が、青白く映つて開く、其處へ堂々と入つたのです。

「休め——」
……と聲する
私は雪籠りの許を受けようとして、たど／＼と近づきましたが、扉のしまつた中の様子を、硝子窓越しに、ふと見て茫然と立ちました。

真中の卓子を圍んで、入亂れつゝ椅子に掛けて、背囊も解かず、銃を引つけたまゝ、大皿に裝つた、握飯、赤飯、煮染をてん／＼に取つて居ます。

頭を振り、足ぶみをするのなぞ見えませんが、聲は籠つて聞えません。

——わあ——

と罵るか、笑ふか、一つ大聲が響いたと思ふと、あの長靴なのが、つか／＼と進んで、半月形の講壇に上つて、ツと身を一方に開くと、一人、真すぐに進んで、正面の黒板へ白墨を手にして、何事かをかゝすのです。——勿論、武裝のまゝでありました。

何にも、黒板へ顯れませんが、續いて一人、また同じ事をしました。

十六人が十六人、同じやうなことをした。最後に、肩と頭と一團に成つたと思ふと——其の隊長と思ふのが、衝と面を背けました時——苛つやうに、自棄のやうに、てん／＼に、一齊に白墨を投げました。雪が群つて散るやうです。

「氣をつけ。」
つゝと驚が片翼を長く開いたやうに、壇をかけて列が整ふ。

「右向け、右——前へ！」
入口が背後にあるか、……吸はるゝやうに消えました。と思ふと、忽然として、顯れて、むくと躍つて、卓子の真中へ高く乗つた。雪を拂へば咽喉白くして、茶の斑なる、烟

將軍の宛然犬獅子……
ウオ、ハ、ハ、！
肩を聳て、前脚をスクと立て、耳が其の圓天井へ届くかとして、嚇と大口を開けて、まがみは遠く黒板に呼吸を吐いた——

黒板は一面眞白な雪に變りました。

此の猛犬は、——土地ではまだ、深山にかくれて生きて居る事を信ぜられて居ます——雪中行軍に擬して、中の河内を柳ヶ瀬へ抜けようとした冒険に、教授が二人、某中學生が十五人、無慙にも凍死をしたのでした。——七年前——

——其の時、豫て校庭に養はれて、嚮導に立つた犬の、恥ぢて自ら殺したとも言ひ、然らずと言ふのが——こゝに綱をたのでありました。

一行が遭難の日は、學校に例として、食糧を備へるさうです。丁度其の夜に當つたのです。が、同じ月、同じ夜の其の命日は、月が晴れても、附近の町は、宵から戸を閉ぢるさうです、眞白な十七人が縦横に町を通るからだと言ひます——

——後で此を聞きました。

私は眠るやうに、學校の廊下に倒れて居ました。

翌早朝、小使部屋の爐の焚火に救はれて蘇生つたのであります。が、いづれにも、然も、中にも恐縮をしましたのは、汽車の厄に逢つた一人として、驛員、殊に驛長さんの御立會に成つた事でありました。

銀 鼎

汽車は寂しかった。

わが友なる——園が、自ら私に話した——其のお話をするのに、念のため時間表を繰つて見ると、奥州白河に着いたのは夜の十二時二十四分である。

上野を立つたのが六時半である。

五月の上旬……とは言ふが、まだ梅雨には入らない。けれども、ともすると卯の花くだしと稱ふる長雨の降る頃を、分けて其年は陽氣が不順で、毎日じめじめと雨が續いた。然も其の日は、午前の中、爪皮の高足駄、外套、零の垂る蛇目傘、聞くも濡々としたありさまで、(まだ四十には間があるのに、壯くして世を辭した) 香川と云ふ或素封家の婿であつた。此も一人の友人の、谷中天王寺に於ける其の葬を送つたのである。

園は豫定のかへられない都合があつた。で、矢張り當日。志した奥州路に旅するのに、一旦引返して、はきものを替へて、洋杖と、唯一つバスケットを持つて出直したのであるが、俾て行く途中も、袖はしめやかで、上野へ着いた時も、轆棒をトンと下されても、あの東京の式臺へ低い下駄では出られまい。泥濘と言へば、まるで沼で、構内まで、どろ／＼と流込んで、其處等一面の群集も薄暗く皆雨に憎れて居た。

「出口の方へ着けて見ませう。」

「然う、何うぞ然うしておくれ。」

さてやがて乗込むのに、硝子窓を横目で見ながら、例のぞろ／＼と押揉んで行くのが、平常ほどは誰も元氣がなさうで、従つて然まで混雑もしない。列車は、おやと思ふほど何處までも長々と列なつたが、此は後半部が桐生行に當てられたのであつた。

室はがらりと透いて、それでも七八人は乗組んだらう、女気なし、縦にも横にも自由に居られる。と思ふうちに、最う茶の外套を着たまゝ、ごろりと仰向けに成つた旅客があつた。

汽車は志す人をのせて、陸奥をさして下り行く——早や暮れかゝる日暮里のあたり、森の下間に、遅櫻の散るかを見たのは、夕霧の空が葉に刻まれてちらちらと映るのであつた。

田端で停車した時、園は立上つて、其の夕霧にほつと包まれた、雨の中なる町の方に向つて、一寸會釋した。

更めてくどくは言ふまい。其處には、今日告別式を済した香川の家がある。と同時に一昨年の冬、衣繪さん、婿君のため、若奥様であつた、美しい夫人がはかなくなつて居る……新佛は、夫人の三年目に、おなじ肺結核で死去したのであるが……。

園は、實は其の人たちの、まだ結婚しない以前から衣繪さんを知つて居た……と言ふよりも知られて居たと言つて可からう。

園は従兄弟に、幸流の小鼓打がある。其の役者を通してある。が、興行の折の棧敷、又は従兄弟の住居で、顔も合はせれば、ものも言ひ交す、時々と言ふほどでもないが、ともに田端の家を訪れた事もあつて、人目に着くよりは親しかつた。

親しかつたうへに、お嬢さん……後の香川夫人は、園のつくる歌の愛人であつた。園は其の作家なのである。

「行つて参りますよ。」と、其處で心で言つた。

汽車が出る。

がた／＼と揺れるので、よろけながら腰を据ゑた。

恁の如く、がらあきの席であるから、下へも置かず、席に取つた——旅に馴れないしには、眞新しいのが見すほらし

いバスケットの中に、——お嬢さん衣繪の頃の、彼に（おくりもの）が秘めてある。

二

今は記念と成つた。

友染の切に、白羽二重の裏をかさねて、紫の紐で口を纏つた、衣繪さんが手縫の袱紗袋に包んで、園に贈つた、白く輝く小鍋である。

彼は銀の鼎と言ふ……

組込の三脚に乗る錫の鑪に、結晶した酒精の詰つたのが添つて、此は普通汽車中で湯を沸かす器である。

道中——旅行の憂慮は、むかしから水がはりだと言ふ。……それを、人が聞くと可笑いほど氣にするのであるから、行先々の停車場で賣る、お茶は沸いて居る、と言つても安心しない。用心を通過した臆病な處へ、渴くのは空腹にまさる切なさで、一つは其がためにもつい出億劫がるのが癖で。

「……はる／＼奥の細道とさへ言ふ。奥州路などは分けて水が悪いに違ひない。ものを較べるのは恐縮だけれど、むかし西行でも芭蕉でも、皆彼處では腹を疼めた——惟ふに、小兒の時から武者繪では誰もお馴染の、八幡太郎義家が、龍頭の兜、緋緘の鎧で、奥州合戦の時、弓杖で炎天の火を吐く巖を裂いて、玉なす清水をほとばしらせて、渴に喘ぐ一軍を救つたと言ふのは、蓋し名将の事だから、今の所謂軍事衛生を心得て、悪水を禁じた反對の意味に相違ない。」

と、今度の旅の前にも……私たちに眞面目に言つた。

何を、馬鹿な。

と平生から嘲るものは嘲るが、心優しい衣繪さんは、それでも氣の毒がつて、存分に沸して飲むやうにと言つた厚情なのである。

機會もなくつて、それから久しぶりの旅に、はじめてバスケットに納めたのである。

「さあ、来い、川も濁れ、水も淀め。」

と何か、美しい魔法で、水を澄せて従へさへ出来さうに、銀鍋の何となくバスケットの裡に透く光を、友染のつゝみに

うけて、袖に月影を映すかと思ふ。それも、思へばしめやかであつた。

窓の外は雨が降る、降る。

雪駄、傘、下駄、足駄。

幸手、栗橋、古河、間々田……の昔の語呂合を思ひ出す。

武左な客には藝しやがこまる。

芝の浦にも名所がござる。

ゐなか侍 茶店にあぐら。

死なざやむまい 三味線枕

「鰻の 井は賣切です。」

「ぢやあ辨當だ。」

小山は夜で暗かつた。

嘗て衣繪さんが、婿君とこゝを通つて、鰻を試みたと言ふのを聞いて居たので、園は、自分好きではないが、御飯だけ

もと思つたのに、最う其は賣切れた……

「そら行け。」

どんと後で突く、

「がつたん〜。」

と挨拶する。こゝで列車が半分づゝに胴中から分れたのである。

又ずしんと響いた。

乗つて来るものは一人もなし、下りた客も居なかつたが、園は急に又寂しい氣がした。

行先は尙ほ暗い。

開くでもなしに、辨當を熟々視ると、彼處の、あの上包に描いた、ばら〜、蘆の濔標、小船の舳にかんてらを灯して、

頬被したお爺の流る状を、ほやりと一繪具淡く刷いて描いたのが、其のまゝ窓の外の景色に見える。

雨は小歌もない。

たゞ渺々として果もない暗夜の裡に、雨水の薄白いのが、鰻の腹のやうに蜿つて、淀んだ静な波が、どろ〜と来て線

路を浸して居さうにさへ思はれる。

ほたり〜と落ちて、ずるりと硝子窓に流るゝ雫は、鰻の覗く氣勢である。

三

バスケットを引揚げて、底へ一寸手を當てゝ見た。雨氣が浸通つて、友染が濡れもしさうだつたからである。

そんな事は決してない。

が、小人敷とは言へ、他に人がなかつたら、此の友染の袖をのせて、唯二人で眞暗の水に濡ふ思ひがしたらう。

宇都宮へ着いてさへ、船に乗つた心地がした。

改札口には、雨に灰色した薄ぼやけた旅客の形が、もや〜と押重つたかと思ふと、宿引のハンズの提灯に黒く成つて

停車場前の廣場に亂れて、筋を流す灯の中へ、しよほ〜と皆消えて行く。……其の中で、山高が突立ち、背廣が肩を張

つたのは、皆同室の客で、こゝで園と最う一人——上野を出ると其れ切寢たまゝの茶の外套氏ばかりを残して、盡く下

車したのである。

まことに寂しい汽車であつた。

やがて大那須野の原の暗を、沈々として深く且つ大な穴へ沈むが如く過ぎて行く。

野川で鱒を突くのであらう。何處かで、かんでらの灯が一つ、ほつと小さく赤かつた。灯は水に影を重ねたが、八重撫子の風情はない。……一つ家の鬼が通るらしい。

黒磯——

左斜の其の茶の外套氏の駝にも黒気が立つた。

燈も暗い。

野も山も、此の果しなき雨夜の中へ、ふと窓を開けて、此の銀の鍋を翳したら、きらりと半輪の月と成つて二三尺照らすであらう。……實際、ふと那樣な気がしたのであつた。が、其は衣繪さんが生きて居て、翳すのに、其の袖口がほんの

り燃えて、白い手の艶が添はねば不可ない……

自分が遣ると狐の尻尾だ。

と獨で苦笑する。其のうちに、何故か、バスケットを開けて、鍋を出して、窓へ衝と照して見たくてならない。指さきがむず痒い。

こんな時は魔が唆かして、狂人じみた業をさせて、此を奪はうとするのかも知れぬ。

園は悚然として、道祖神を心に念じた。

眞個、この暫時の間は希有であつた。

郡山まで行くと……宵がへりがして、汽車もバツと明る成つた。思ひ見る、盤梯山の煙は、雲を染めて、暗は尙ほ蓬々しけれど、大なる猪苗代の湖に映つて、遠く若松の都が窺はれて、其の底に、東山温泉の媚いた窓々の燈の紅を流すのが

遙々と覗かれる。

園が會遊の地であつた。

バスケットの中も何となく賑やかである。

と次第に遠い里へ、祭禮に誘はれるやうな気がして、少しうとくとして、二本松と聞いては、其處の並木を、飛脚が通つて居さうな夢心地に成つた。

茶の外套氏が大欠伸をして起きた。口髭も茶色をした、日に焼けた人物で、ズボンを踏み開けて、どつかと居直つて、

「あゝ、寐たぞ。」

と又欠伸をして、

「何の邊まで来たかなあ。」

殆ど獨言だつたが、しかし言掛けられたやうでもあるから、

「失禮——今しがた二本松を越したやうです。」

と園が言つた。

「や、それは又馬鹿に早いですな。」

と驚いた顔をして、ちよつきをがつくりと前屈みに、腕を蟹の手に鯨子張らせて、金時計を握めながら、

「……十一時十五分。」

と鼻筋をしかめて、園を眞正面に見て耳に當てた。

「留つては居らんなあ。はてなあ、此の汽車は十二時二十四分に、漸く白河へ着きをるですがな。」

と硝子に吸着いたやうに窓を覗く。

園も、一驚を吃して時計を見た。針は相違なく十一時の其處をさして、汽車の馳せつゝあるまゝに、セコンドを刻んで

居る。

バスケットを壓へて、物と息して、
「何うも濟みません、少し、うとくしましたつけ、うつかり夢でも視たやうで、——郡山までは一度行つた事がある
ものですか……」

園も窓を覗きながら、

「しかし、何うも濟みません、第一見た事ありませんのに、奥州二本松と云ふのは、昔話や何かで耳について居たも
のですから、夢現に最う其處を通つたやうに思つたんです。」
燈が白く、ちら／＼と窓を流れた。

「白坂だ、白坂だ。」

と茶の外套氏が言つた。……向直つて口を開けたが、笑ひもしないで落着いた顔して、
「此の汽車は、豊原と此處を抜くです……今度が漸う白河です」

「何うもお恥かしい……狐に魅まれましたやうです。」

「いや、汽車の中は大丈夫——所謂白河夜船ですな。」

園は俯向いたが、

「——何方まで。」

「はあ、北海道へは始終往復をするのですが、今度は樺太まで行くですて。」

「それは、何うも御遠方……」

彼の持つるした靴を見よ、手摺の籠が一面に、浸の形が樺太の圖に浮ぶ。汽車は白河へ着いたのであつた。

四

「牛乳、牛乳——牛乳はないのか。——夜中に成ると不精をしをるな。」

茶の外套氏は、ほく／＼と立つて、ガタンと扉を開いて出た。

窓を開けると、氷を目に注ぐばかり、嵐と雨が冷い。恰も墨を敷いたやうなブラットホームは、ざあ／＼と、さながら
水が流れるやうで、がく／＼と鳴く蛙の聲が、町も、山も、田も一齊に波打つ如く、夜ふけの暗中に鳴擴がる
聲は雲まで敷くやうであつた。

ト、すぐ裏に田が見えて、雨脚も其處へ、どう／＼と強く落ちて、濁つた水がほの白い。停車場の一方の端を取つて、
構内の出はづれの處に、火の番小屋をからくりで見せるやうな硝子窓の小店があつて、ふう／＼白い湯氣が其の窓へ吹出
しては、燈に淡く濃く、ほた／＼と軒を打つ雨の雫に打たれては又消える。と湯氣の中に、ビール、正宗の瓶の、棚に直
と並んだのが、むら／＼と見えたり、消えたりする。……横手の油障子に、御酒、蕎麥、饅頭と讀まれた……

若い驛員が二人、眞黒な形で、店前に立つたのが、見え隠れする湯氣を翳るやうに、湯氣がまた調戲ふやうに、二人互
違ひに、覗込んだり、胸を衝と開いたり、顔を背けたり、顔を突出したりすると、それ、湯氣は立つたり伏つたり、釘に
掛つたり、耳を巻いたり、鼻を吹いたりする。……其の毎に、銀杏返の黒い頭が、縦横に激しく振られて、まん圓い顔のふ
ら／＼と忙しく廻るのが、大な影法師に成つて、障子に映る。

で、驛は唯水の中のやうである。雨は冷く流れて降りしきる。

驛員の一人は、帽子と、もに、黒い窪頭ばかりだが、向うに居て、此方に横顔を見せた方は、衣兜に両手を入れたなり
目を細め、口を開けた、聲はしないで、あゝ、笑つてると思ふのが、もの靜で、且つ沁々寂しい。

其の一人が、高足を打つて、踏んで、澄してブラットホームを横狀に歩行出すと、いま笑つたのが搔込むやうに胸へ井

を取つた。湯気がふつと分れて、鍋がするくと箸で伸びる。

其の肩越し、田のへりを、雪が装束るやうに、且つ雫さへしとくと……此の時判然と見えたのは、咲きむらがつた眞白な卯の花である。

雨に誘はれて影も白し、蛙は其の鍋食ふ驛員の靴の下にも鳴く。聲が、聲が、

「かあ、かあ、

白あ河あ。

かあ、かあ、

買へ、かへ、

うどん買へ、買へ、

しらあ、河あ。と鳴く。

あゝ風情とも、甘味さうとも——園は乗出して、銀杏返の影法師の一寸靜つたのを呼ぼうとした。

薄い髪の、かじかんだお鬘結ひで、襟へ手拭を巻いて居る、……汚い笈摺ばかりを背にして、白木綿の脚絆、襪端折して、草鞋穿なのが、すつと身を退いて、トあとびしやりをした驛員のあとへ、しよんほりと立つて、鍋へ顔を突込んだ。

青彫れの、額の抜上つたのを視ると、南無三寶、眉毛がない、……はまだ仔細ない。が、小鼻の兩傍から頬へかけて口のまはりを、ぐしやりと輪取つて、瘡だか、火傷だか、赤爛れにべつたりと爛れて居た。

其の口へ、——忽ちがつちりと音のするまで、井を當てると、舌なめずりをした前歯が、穴に抜けて、上下おはぐるの兀まだら……

湯氣を揺つて、肩も手もぶるくと震へて掻食ふ。

「あ。」

あゝ、あの井は可恐しい。

無論こんな事は、めつたにあるまい。それに、けつそりするまで腹も空く。

白河の雨の夜ふけに、鳴立つて蛙が賣る、卯の花の影を添へた、うまさうな鍋は何うもやめられない。

「洗つてさへくれれば可いのだが、さし當り……然うだ、此方の容器を持つて買はう。」

其處で、バスケットを開けた。

中に咲いたやうな……藤紫に、淺葱と群青で、小菊、撫子を優しく染めた友染の袋を解いて、銀の鍋を、園はきらりと取つて出た。

出ると、横ざまに颯と風が添つた。

成るだけ順禮を遠くよけて、——最う人氣勢に後へ振向けた、銀杏返の影法師について、横障子を裏へ廻つた。店は裏へ行抜けである。

外套は脱いで居た——背中へ、雨も、卯の花も、はらくとかがつた。

たゞきへ白く散つて居る。

「鍋を一つ。」

と出しながら、ふと猶豫つたのは、手が一つ、自分の他に、柔かく持添へて居るやうだつたからである。——否、其の人の袖のしのぼるゝ友染の袋さへ、汽車の中に預けて来たのに——

「此へおくれ。」

銀杏返は緒ら顔で、白粉を濃くして居た。

おとこころをいふ

驛員は最う見えなかつた。其の順禮のお鬘髪さへ、此方に背き、早やうしろを見せて、びしゃ／＼と行く處を——（見なくとも可いのに）氣になると、恰も油さしがうつ伏せに鐵の底を覗く、かんでらの火の上へ、ほやりと影を沈めて、大な風のやうに乗つて消えた。

驛員が黒く、すらくくと、雨の雫の彼方此方。

五

他には數ふるほどの乗客もなさうな、餘り寂しさに、——夏の夜の我家を戸外から覗くやうに——慙う上下を見渡すと、可なりの寄席ほどにむらくと込む室も、さあ、二つぐらゐはあつたらう。……

園の隣なる車は、すつと長く通つた青い室で、人数は其處も少ないが、しかし二十人ぐらゐは乗つて居た……但し其も、廻燈籠の燈が消えて、雨に破れて、寂然と静まつた影に過ぎない。

左右を見定めて、鍋を片手に乗らうとすると、青森行——二等室と、例の青に白く抜いた札の他に、踏壇に附着いたわきに、一枚思懸けない眞新しい木札が掛つて居る……

臨時運轉特別車

但し試用一回限り、

「おや／＼……」

園は一寸猶豫つた。

成程、空に空いた上にも、寢起にこんな自由なのは珍しいと思つた。席を片側へ十五ぐらゐ一杯に割つた、たゞ兩側に成つて居て、居ながらだと樂々と肘が掛けられる。脇息と言ふ態がある。シートの薄萌葱の……尤も古ほけては居たが——天鷲絨の劃を、コチンと窓へ上げると、紳士の作法にありなしは別問題だが、いゝ頃合の枕に成る。

「まてよ……」

衣繪さんが此邊を旅行した時の車と言ふのを、話の次手に聞いたのが——寸分違はぬ的切此だ……

「待てよ。」

無論、婿がねと一所で、其は一等室はあつたかも知れない。が、乗心の模様も、色合も、いま見て思ふのと全く同じである。

「——臨時運轉特別車。但し試用——一回限り……」

と二行に最一度讀みながら、つい、銀の鍋を片袖で覆うて入つた。

鍋を庇つたのではない。

唯、席に着くと、袖から散つたか。あの枝からこぼれたか、鍋の蓋に、颯と卵の花が掛つて居て、華奢な細い蓋が、下のぬくもりに、慙う、雪が溶けるやうな薄い息を戦がせる。

其の雪より白く、透通る胸に、すやくと息を引いた、肺を病んだ美女の臨終の狀が、歴々と、あはれ、苦しいむなさきの、襟の亂れたのさへ偲ばるゝではないか。

はつと下に置くと、はずみで白い花片は、ばらりと、藤色の地の友染にこぼれたが、こぼれた上へ、園は尙ほ密と手を當て、蓋を傾けた。

蓋のほの暖いのに、ひやりとした。

火に掛けて煮ようとする鍋の上へ、少くとも其の花片は置けなかつたからである。

氣が着くと、蒸の外套氏は形もない。ドキリとした。

が、例の大袍が、其のまゝ、網棚にふん反返つて、下に黴びた空氣枕が仰向いたのに、牛乳の邊が白い首で寄添つて、何と、……添寝をしようかとする形で居る。

徳利が化けた遊女と云ふ容子だが、其の窓へ、紅を刷いたら、恐らく露西亞の辻占であらう。

では、汽車の中に一人踞つて、真夜中の雨の下に、鍋で饅頭を煮る形は何だ？……説明も形容も何もない——燐寸を摺るや否や——アルコールに火をつけるのであるから、言句もない。……燈と朱が底へ漲ると、銀を蔽うて、三脚の火が七つに分れて、青く、忽ち、薄紫に、藍を投げて軽く煽つた。

ドカリ——洗面所の方なる、扉へ立つた、茶色な顔が、ひよいと立留つてぐいと見込むと、茶の外資で慙う、肩を斜に寄つたと思ふと、……件の牛乳の罎を引摺るが早い——聲を掛ける間も何もなかつた——茶単の靴で、どか／＼と降りて行く。

建音亂れて、スツ／＼と擦れつゝ、響きつゝ、驛員の驚破事ありけな顔が二つ、帽子の堅い脰を籠めて、園の居る窓をむづかしく覗込んだ。

其の二人が苦笑した。顔が両方へ、背中合せに分れたと思ふと、笛が鳴つた。園は惘然とした。

「あゝ、分つた。」
狐が馬にも乗らないで、那須野ヶ原を二本松へ飛ばした怪しいのが、車内で燦燦火を燃すのである。

此が、少なからず茶の外資氏を驚かして、渠をして驛員に急を告げしめたものに相違ない。

と思ひながら、四邊を見た。胸したが誰も居ない。
「あゝ……心細いなあ——」
が、その中はまだよかつた、……汽車は夜と、もに更けて行き、夜は汽車と、もに沈むのに、少時すると、また洗面所

の扉から、ひよいと顔を出して覗いた剣車ボーイが、やがて、すたく／＼と入つて来ると、棚を視め、席を窺ひ、大袍と、空氣枕を、手際よく取つて擔いで、アルコールの青い火を、靴で半輪に廻つて、出て行くとして——
「御病氣ですか。」
園は大真面目で、
「いゝえ。」
「はあ。」

と首をねぢつて、腰をふりつゝ去つた。

此でまた、汽車半分、否、室一つ我ばかりを残して、樺太まで引摺はれるやうな気がしたのである。

「狂人だと思ふんだ。」
けそりと、胸をけつられたやうに思つた。

「勝手にしろ。」
自棄に投げる足も、しかし、すほまつて、園は寒いよりも悚氣とした。

併しながら……此を見れば氣も狂はう。死んだやうな夜氣のなかに、凝つて、ひとり生きて、卯の花をかけた友染は、被衣をもる、袖に似て、ひら／＼と青く、其の紫に、芍薬か、牡丹か、包まれた銀の鍋も、チチと沸くのが氷の裂けるやうに響いて、ふきこぼる、泡は卯の花を亂した。

續
銀
鼎

不思議なる光景である。

白河はやがて、鳴きしきる蛙の聲、——其の蛙の聲もさあと響く——と、もに、さあと鳴る、流の音に分るゝ如く、汽車は恰も雨の大川をあとにして、又一息、暗い陸奥へ沈む。……真夜中に、色澤のわるい、頬の瘦せた詩人が一人、目ばかり輝かして熟と視る。

燈も夢を照すやうな、朦朧とした、車室の床に、其の赤く立ち、颯と青く伏つて、湯氣をふいて、ひらくと燃えるのを凝然と視て居ると、何うも、停車場で錢で買った饅頭を温め抱くのだとは思はれない。

どう／＼と降る中を、ぐわうと山に飮して行く。がらんとした、古びた萌葱の車室である。護摩壇に向つて、髻髪も蓬に、針の如く、逆立ち、あばら骨白く、吐く息も黒煙の中に、夜叉羅刹を呼んで、逆法を修する呪詛の僧の舉動には似べくもない、が、我ながら銀の鑪で、ものを煮る、仙人の徒弟ぐらるには感ずる。詩人も此では、鍛冶屋の職人に宛如だ。が、其の煮る、鑪る、鍊りつゝあるは何であらう。没藥、丹、朱、香、玉、砂金の類ではない。蝦蟇の膏でもない。

と思ひつゝ、視つゝ、惑ひつゝ、慙くして鍊るのは美人である。衣繪さんだ！

と思ふと、立つ泡が、雪を震はす白い膚の爛れるやうで。……闇は、ぎよつとして、突俯すばかりに火尖を嘗めるが如く吹消した。

疲れたやうに、吻と呼吸して、

「あゝ、飛んでもない、……髻にも虚事にも、衣繪さんを地獄へ落さうとした。」
假に、もし、此を煮る事、鑪る事、鍊る事が、其の極度に到着した時の結晶體が、衣繪さんの姿に成るべき魔術であつ

まじやうをんをん

絨 銀 鼎

ても、火に掛けて煮爛らかして何とする……彫刻師の鑿に、神は木を刻むであらう。が、人、女、あの華奢な、衣繪さんを、詩人の煩惱が煮るのである。

「大變な事をしたぞ。」
園は、今更ながら、瞬時と雖も、心の影が、其の熱に堪へないものゝ如く、不意のあやまちで、怪我をさせた人に吃驚するやうに、銀の蓋を、ぱつと取つた。

取ると、……むらくと一卷、渦を巻くやうに成つて、湯気が、鍋の中から、膝と立つ。立ちながら、すつと白い裳が真直に立降いて、中ばでふくらみを持つて、筋が凹むやうに、二條に分れようとして、軟にまた合つて、颯と濃く成るのが、肩に見え、頸脚に見えた。背筋、腰、ふくら脛……

卵の花の色うつくしく、中肉で、中脊で、なよくとして、ふつと浮くと、黒髪の音がさつと鳴つた。
「やあ、あの、もの恥をする人が、裸身なんぞ、こんな姿を、人に見せるわけはない。」
園は目を瞑つた。

矢張り見える。
「これは、不可ん。」
園は一人で頭を掉つた。

「第一、病中は、其の取亂した姿を見せるのを可厭がつて、見舞に行くのを断られた自分ではないか。——此は悪い。こんな處を。あゝ、濟まない。」

園はもの狂はしいまで、慌しく外套を脱いだ。トタンに、其の衣繪さんの白い幻影を包んで隠さうとしたのである。が

疼々しい此の硬ばつた、雨と埃と日光をしたゝかに吸つた、甲羅生えた鼠色の大きな蝙蝠。
一寸でも觸ると、其のまゝ、いきなり、白い肩を包んで、頬から衣繪さんの血を吸ひさうである、と思つたばかりでもあゝ、滴々血が垂れる。……結綿の鹿の子のやうに、咯血する咽喉のやうに。

二

で、園は引擱んで、席をやゝ遠くまで、其の外套を彼方へ投じた。

投じた時、偶と渠は、鼓打である其の従兄が、業體と言ひ、温雅で上品な優しい男の、酒に酔拂ふと、場所を選ばず、着て居る外套を脱いで、威勢よくぱつと投出す、帳場の車夫などは、おいでなすつた、と丁と心得て居るくらゐで……電車の中でも此を遣る。……下が黒羽二重の紋着と云ふ勤柄であるから、餘計人目について、乗合は一時に哄と囁す。

「何でえ、持つてけ。」と、舞袴にびたりと腕を張つて、とろりと一睨み睨むのがお定り……と其を思出して、……獨りで笑つた。

そんな、妙な間があつた。それなのに、媚めかしい湯気の形は、卵の花のやうに、微に揺れつゝ其のまゝであつた。銀の鍋一つ包む、大くはないが、衣繪さんの手縫である、其の友染を、密と掛けた。項から肩と思ふあたり、ピクツと手應がある、ふつと、柔く軽く、つゝんで抱込む胸へ、煽さと氣の重量が掛るのに、アツと思つて、腰をつく。席へ、薄い真綿か羽二重へ二つたやうに、さゝ……と唯衣の音がして、膝を組んだ足のやうに、友染の端が、席をなぞへに、たりと片襪に成つて落ちた。——氣を失つた女が、我とゝもに倒れかゝつたやうである。

吃驚して、取つて、すつと上へ引くと、引かれた友染は、其のまゝ、仰向けに、襟の白さを蔽ひ餘るやうに、がつくりと席に寝た。

あやうろをんじま

續 銀 鼎

ふはくと其處へ靡く、湯気の細い角の、横に濛ふ消際が、こんもりと優しい鼻を残して、ほつと浮いて、衣繪さんの

眉口、唇、白歯。……あの時の、死顔が、まさしくと、いま我が膝へ……
白衣胸に、撫子と小菊の、藤紫地の裾模様の小袖を、亡軀に掛けた、其のまゝの、……此の友染よ。唯其の時は、爪一つ指の尖も、人目には漏れないで、水底に眠つたやうに、面影ばかり澄切つて居たのに、——こゝでは、散亂れた、三ひら、五ひらの卵の花が、凄く動く汽車の底に、ちら／＼ちらと搖れて、指の、震へるやうにさへ見らるゝ。世には、清らかな白歯を玉と云ふ、眞珠と云ふ、貝と言ふ。……いま、ちらりと微笑むやうな、口許を漏るゝ齒は、白き卵の花の花片であつた。

「——膝枕をなさい。——衣繪さん。」
園は居坐を直した。が、沈んだ顔に、涙を流した。
あゝ、思出す。……

「いくら私、堪へましてもね、冷たい汗が流れるやうに、ひとりで涙が出るんですもの。御病人の前で、此ぢやあ悪いと思ひますとね、尙ほ堪らなくなるんですよ。それだもんですからね。枕許の小さな黒棚に、一輪挿があつて、撫子が活かつて居ました、その花へ。顔を押しつけるやうにして、ほろ／＼溢れる目をごまかしましてね、西洋のでございませうか、いゝ句ですこと。なんのつて、然う言つて——あの、優しい花ですから、葉にも、枝にも、此方の顔が隠れないで弱りましたよ——義兄さん。」

と衣繪さんのもう亡くなる前だつた——たしか、三度めであつたと思ふ……従兄の細君が見舞に行つた時の音信であつた。

豫て、病氣とは聴いて居た。——其の病氣のために、衣繪さんが、若手、賣出しの洋畫家であつた、婿君と一所に、鎌倉へ出養生をして居たのは……あとで思へば、それも寂しい……行く春の頃から知つて居た。が、紫の藤より、菖蒲杜若

より、鎌倉の町は、水は、其の人の出入、起居にも、ゆかりの色が添ふであらう、と床しがるのみで、まるで以て、然したる容體とは思ひもつかないで居たのに、秋の野分しぼ／＼して、睡られぬ長き夜の、且つ朝寒く——インキの香の、ちつと身に沁む新聞に——名門のお嬢さん、洋畫家の夫人なれば——衣繪さんの（もう其の時は歸京して居た）重體が、玉の簾を吹きざり、金屏風を倒すばかり、嵐の如く世に響いた。

同じ日の夜に入つて、婿君から、先んじて親書が来て、——病床に臥してより、衣繪はどなたにもお目に掛る事を恥かしがり申候、女氣を、あはれ、御諒察あつて、お見舞の儀はお見合せ下されたく、差繰つて申すやうながら、唯今にもお出で下さる事を當人よく存じ、特に貴兄に對しては……と此の趣であつた。

髪一條、身軀を忘れない人の、此は至極した事である。

婿君のふみながら、衣繪さんの心を傳へた巻紙を、繰戻すさへ、さら／＼と、緑なす黒髪に亂るゝ音を感じて、取る手の冷いまで血を寒くしながらも、園は、謹んで其の意を體したのである。

折から、従弟は當流の一派と、もに、九州地を巡業中で留守だつた。細君が、園と雙方を兼ねて見舞つた。其の三度めの時の事なので。——勿論、田端から歸りがけに、直ぐに園の家に立寄つたのであるが。

「ね——義兄さん、……お可哀相に、最う疾くのむかし通越して、あんな綺麗な方が最うおなくなんかと思ふと眞個に可惜ものでならないんですよ。——日當は好いんですけれど、六疊のね、水晶のやうなお部屋に、羽二重の小壺巻を掛けて、消えさうにお寐つて、お色なんぞ、雪とも、玉とも、そりや透通るやうですよ。東枕の白い切に、ほぐしたお髪の眞黒なのが濡れたやうにこぼれて居て、向うの西向の壁に、衣桁が立て、あります。それに目の覺めるやうな、友染縮緬が、反ものを解いたなりで、一種掛つて居たんです。——義兄さんの歌の本をお読みなさると、うつくしい友染を掛物のやうに取換へて、衣桁に掛けて、寝ながら御覽なさるのが何より楽なんですつて。——あの方の魂の在らつしやる處も、それで知れます。……紫の雲の舞臺く空ちやあなくつて、友染の霞が来て、白のお身體を包むのでせうね——あ

あ、それにね。……義兄さんがお心づくしの丸薬ですわね。……私が最初お見舞に行つた時、こつかつて参りました……あの薬を、お婿さんの手から、葡萄酒の小さな硝子杯で飲んだつて、——え、先刻……

枕許の、矢張り其の棚にのつた、六角形の、蒔繪の手篋をお開けなすつたんですよ、然うすると、……あのお薬包と、かはいらしい爪取剪が一具と、……」

從弟の妻は、話しながら、こみあけく我慢したのを、此の時にじやくりして言つた。

「……他に何にもなしに、撫子と小菊の模様の友染の袋に入つた、小さい圓い姿見と、其だけ入つて居たんですよ。……お心が思ひ遣られますこと。……」

お婿さんが、硝子杯に葡萄酒をお計んなさる間——え、然うよ。……お寢室には私と三人きり。……誰も可厭だつて、看護婦さんへお頼みなさらないんださうです。第一、お醫師様も、七ツ八ツのお小さい時からおかゝりつけの方をお一人だけ……尤も有名な博士の方ださうですけれど——

それでね、義兄さん。お婿さんが葡萄酒をお計んなさる間に、細りした手を、怒うね、頬へつけて、うつくしい目で握めて爪を見なすつたんでせう、のびてるか何うだかつて——凝と御覽なすつたんですがね、白い指さきへ腫が映るやうでそして、指のさきから、すつとお月様の影がさすやうに見えました。それが、怒う、お招きなさるやうに見えるんですよ。私、ぶるくとしたんですよ……」

聞いて居る園が震へた。

「ですけれど、あの、お手で招かれたら、懐中へなら向の事だし、冥土へでも、何處へでも行きかねやしますまい……と眞個に思ひました。

其の手を、密と伸して、お薬の包を持つて、片手で圓い姿見を半分、凝と見て、お色が顔と着さめた時は、私はまた泣かされました。……私は自分ながら頓興な聲で言つたんですよ……」

——「まあ、御覽なさいまし、撫子が、こんなに露をあけて居りますよ」——

三

「私としては、出来るだけの事はしました。——申してはお恥かしいやうですが、實際、此の一月ばかりは、押通し夜も寐ませんくらゐ看病はしましたが、」

一室の、其處に五人居た、著名なる新聞記者、審査員——畫家、文學者、某子爵の令夫人が一人。——園が居た。弔禮のために、香川家を訪れたものが、うけつけの机も、四つばかり、應援に山をなす中から、其處へ通された親類縁者、それ、又他方面の客は、大方別室であらう。

園が、人を分けて廊下を茶室らしい其處へ通された時、すぐ其の子爵夫人の、束髪に輝く金剛石と、ともに、白き牡丹の如き手巾の、目を蔽うて俯向いて居るのを視た。

皆、黯然として、半ば腫を閉ぢて居たのである。

「御當家でも——實に……」

「全くでございます。」

唯、いひかはされるのは、其のくらゐるな事を繰返す。時に、鶺鴒の聲がして、火桶の炭は赤けれど、山茶花の影が寂しかつた。

其處へ婿君が、紋着、袴ながら、憔悴した其の寐不足の目が血走り、ぼうく髪で寝れたのが、弔禮をうけに見えたのである。

「やあ……何うも。」

と、がつくり俯向いた顔を上げたのを、園に向けると、

「お禮を申し上げます、——あのお藥のためだらうと思ひます。五日以上……滋養瀉腸などは、絶対に嫌ひますから、湯水も通らないくらゐですのに、意識は明瞭で、今朝午前三時に息を引取りました一寸前にも、種々、細々と、私の膝に顔をのせて話をしまして。……園さんに、おなごりのおことづけまで申しました。判然して、元氣です、醫師も驚いて居ました。まるで絶食で居て、よく、こんなにと、兩三日前から、然う言はれましてな。……しかし、氣の毒でした。

江戸兒は……食ものには亂暴です。九死一生の時でも、鮎だ、天麩羅だつて言ふんですから。蝦が欲しい……しんじよでも言ふかと思ふと、飛んでもない。……鬼殺焼が可いと言ふんです。——痛快だ！……宜しい、鬼を食つて了ひなさい、と景氣をつけて、肥つた奴を、こんがりとな京の中皿へ装込んだのを、私が氣をつけて、大事に捲つて、箸で噛めたんですが、みでは豈夫と思ふんです。馴れない料理人が、むしるのに、幾らか鎧皮が附着いて居たでせうか。一口觸つたと思ふと、舌が切れたんです。鬼殺焼を退治しようと言ふ、意氣が壯なだけ實に悲惨です。すぐに唇から口紅が溶けたやうに眞赤な血が溢れるんですものね。」

爾時は、臉を離して、はらりと口許を手巾で蔽うて居た、某子爵夫人が頷くやうに聞き、清らかな手巾を抜くにつれて、眞白な絹の、それにも血の影が映すやうに見えた。

夫人は堪へやらぬ狀して、衝と肩を反して、横を向いて又目を壓へたのである。

「……え、尤も、結核は、喉頭から、もう其の時には舌までも侵して居たんださうですが。鬼殺焼……意氣が壯なだけ何うも悲惨です。は、はア。」

と、力のない、笑の影を浮べて、言つて、悵然として仰いで、額に逆立つ頭髮を拂つた。

「あちらの御都合で、お線香を。」

「一寸、御挨拶を。」

園と審査員が殆ど同時に言つた。

「それでは、何うぞ……」

廊下を二曲り、又半ばにして、縁續きの廣間に、線香の煙の中に、白い壇が高く築かれて居た。袖と袖と重ねたのは、二側に居餘る、いづれも聲なき紳士淑女であつた。

順を譲つて、子爵夫人をさきに、次々に、——園は其の中でいつちあとに線香を手向けたが、手向けながら殆ど雪の室かと思ふ、然も香の高き、花輪の、白薔薇、白百合の大輪の花瓣の透間に、薄紅の撫子と、藤紫の小菊が微に彩めく、其の友染を密と辿ると、搔上げた黒髪の毛筋を透いて、ちらりと耳朶と、而して白々とある領脚が、すつと寢て、其の薄化粧した、きめの細かなのさへ、ほんのりと目に映つた。

まだ納棺の前である。

「香川さん。」

袴で座を開きながら、園は、堅く障子を背にした婿君を呼んで言つた。

「……一寸お顔を見たいんです。」

聲の調子の掠れるまで、園は胸が轟いたのである。が、婿君は潔く、

「え、何うぞ——此方へ。」

とづいと立つと、逆屏風——たしか葛の葉の風に亂れた繪の、——端を引いて、壇の位牌の背後を、次の室の襖との狭い間を、枕の方へ導きながら、

「困りました。」

「……………」

「なくなられては困りましたなあ。」
と振向き狀に、ぶつきら棒に立つて、握傘で、額を擦つたのが、惱亂した頭の髪を、搔捲りでもしたさうに見えて、煙

の藤く天井を仰いだ。

「唯々、お察し申上げます。」

「は。」

と云つて、膝をついて。

「衣繪ちゃん、——園さんです。」

と、白いものを衝と取つた。

眉毛を長く、睫毛を濃く、彼方を項に、満座の客を背にして、其の背の方は、花輪が隔て、誰にも見えない。——此方に斜ぐらなる横顔で、鼻筋がスツとして、微笑んだやうな白歯が見えた。——妹が二人ある。其の人たちの優しさに、髪を捲卷のやうにして、薄化粧に紅をさした。

「衣繪さん。」

と心で言つて、思はず、直と寄つた膝が、うつかり、袖と思ふ捲卷の友染に觸れると、白羽二重の小波が、青く水のやうに其の襟にかつた。

屈みかゝつて、上から差覗く、目に涙の婿君と、微に仰いだ衣繪さんの顔と、世に唯、此の時三人であつた。

「……お静に、お静に、然やうなら……」

ハツと息して、立つて、引返す時、……今度は園が云つた。

「私も困ります。」

「……」

「寂しくつて、世間が暗いやうです。——衣繪さんはおなくなりなりました。」

「……」

「香川さん。——しかし、今では、衣繪さんを、衣繪さんを、」

「……」

「私が、思、思つても……」

愛も、戀も、憧憬も、ふつゝかに、唯、思ふとのみ、血を絞つて言つた。

「……思つても、——貴方は許して下さいますか。」

仰いで言ふのを、香川は、しばらく黙と視たが、膝をついて、ひたと居寄つて、

「衣繪ちゃんが喜びませう……私も、……嬉しい。」

戀の仇は、雙方で手を取つた。

「あ、お顔を。」

振向いて、も一度視た。

其の、面影を、——夜汽車の席の、いまこゝに——

「さ、膝を、膝枕をなさい、誰も居ません。」

園は、もの狂はしく、面影の白い、髪黒い、裳の、胸の、乳のふくらみのある友染を、端坐した膝に寝かして、うちに、明白に、且つ夢に遠慮のないやうに戀を語つた。

四

「岩沼——岩沼——」

辨當、もの賣の聲が響くと、人音近く、夜が明けたと思ふのに、目には、何も、ものが見えない。

吃驚した。

園は掻捲るやうに窓を開けたが、眞暗である。

「もし、もし、もし……驛員の方、驛の方——驛夫さん……」
とけたましく呼んだ。

「何ですか。」

「失禮ですが、私の目は何うかなつては居ないでせうか。」

「貴方——何うかして居ますね。……確乎ならなくつちやあ不可いぢやありませんか。」
獨言して、

「何を言つてるんだ。」

はつとすると、構内を、東雲の一天に、雪の——あとで知つた——菊田嶽の聳えたのが見えて、目は明に成つた。
はじめて一人乗込んだ客がある。

袖でかくすやうにした時、銅の饅頭は、しかし、線香の落ちてたまつた、灰のやうであつた。

五

水源を、岩井の大沼に發すと言ふ、浦川に架けた橋を渡つた頃である。

松島から歸途に、停車場までの間を、旅館から雇つた車夫は、昨日、日暮方に其の旅館まで、同じ停車場から送つた男と知れて、園は心易く車上で話した。

「さあ、何と言はうかな。……景色は何うだ、と聞かれて、悪いと言ふものもなからうし……唯よかつたよ、とだけぢや、君たちの方も納るまいけれども、何しろ、私には、松島は見ても松島を論ずる資格はないのだよ。昨日も君に世話に

成つたと言ふから、知つてるだらうが、薄暮合、あの時間に旅館へ着いたのだから、あとは最う湯に入つて寝るばかりさ。」
園は昨日の其までは、聊か足す用があつて仙臺に居たのであつた。

「夜があけたわ、顔を洗つたわ、旅館の縁側から、築山に松の生えたのが幾つも霞の中に浮いて居る、大な池を視めていゝなあと言つたつて、それまでだ。——海岸へ出たからつて、波が一つ寄るぢやなし、櫻貝一つあるんぢやあない。

しかし、無理だよ。……豫て聞いても居るし、むかしの書物にも書いてある。——松島を観るのは船に限る。八百八島と言ふ島の間を、自由に青疊の上のやうに漕ぐんだと言ふから、島一つ一つ趣のかはるのも、どんなにいゝか知れやしな
い。魚もすらく泳ぐだらうし、松には藤も咲いてるさうだし、つゝじ、山吹、とりぐだと言ふ。其の間を、船の影に驚いて、パツと群れて水鳥が立つたり、鷗が泳いで居たり……」

「然うで、然うで、其の通りで……旦那。」
と、車夫は梶棒に張つた肩を聳やかした。

「船でなけりや、富山と言ふのへ上るだね。はい、其處だと、松島が残らず一目に見えますだ。」

「ださうだね。何しろ、船で巡るか、富山へ上らないぢやあ、松島の景色は論ずべからずと、ちやんと戒められて居るんだよ。」

「何うでがすね、此から、富山へおのほりに成つては、はい、一里たらずだ、一息だで。」

「いや、それよりは、早く歸つて、墓參がしたくなつた。」

「へい。」
と言つたが、乗つた客も、挽く男も、妙に黙つた。

園は我ながら、餘りつきもない言をうっかり言つたのに、はつと氣が着いたほどである。
車夫は唐突に、目かくしてもされたやうに思つたらう。

陽が白く、雲が白く、空も白い。のんどりとした静寂な田島には、土の湧出て、装束るやうな蛙の聲。かた／＼かたかたころつ、ころつ、くわら／＼くわら、くつ／＼くつ。中でも大ききうなのが、土の氣の蒸れる處に、高く構へた腹を、

怨う人の目に浮かせて、があ／＼があ／＼と太く鳴く。……

……

一方が小高い土手に成ると、いま／＼で吹いて居た風が留んだ。霧も霞もないのに、田畑は一面にほうとして、日中も春

の夜の臚である。薄日は弱く雲を越さず、畔に咲いた蒲公英、咲き交る豆の花の、緋、紫にも、ほつりとも黒い影が見え

ぬ。朱の木瓜はちら／＼と灯をともし、樹の根を包んだ石楠花は、入日の淡い色を染めつ、然も日は正に午なのである。

道にさし出た、松の梢には、紫の藤かゝつて、どんよりした遠山のみどりを分けた遅櫻は、薄曇色に濃く咲いて、然も散

敷いた花瓣は、散かさなつて根をこんもりと包んで、薄紅い。

其の傍に、二ツ三ツ境のない墓が見える。

見つ、俵は、段々の田を隔て、土手沿ひの徑を遙に行くのである。

雲も、空も、皆白い。

其處へ、影のさすやうなのは、一つ一つ、百千と数へ切れない蛙の聲である。

鳴く、鳴く、……

松杉、田芹、すつと伸びた酸模草の穂の、そよとも動かないのに、溝川を蔽ふ、たんぼの花、豆のつるの、忽ち一所

に、さら／＼と動くのは、鮎、鱒には揺過ぎる。――晝の水鶏が通るのであらう。

夢を見て居るやうである。

趣は違ふけれども、園は、名所にも、古跡にも、あんな景色はまたあるまいと思ふ處を、先刻も一度通つて来た。

――水源を岩井沼に發すと言ふ、浦川の流の末が、廣く成つて海へ灌ぐ處に近かつた。旅館を出てまだいく程もない處

に、路の傍に、切立てた、削つた、大な巖の、蟲々と立つのを視た。或は、佛の御厨子の如く、或は人の體に似て、

或は禪定の穴にも似つ、或は山寨の石門に似た、其の岩の根には、一ツづ、皆水を湛へて、中には蒼く凝つて淵かと思

はるゝのもあつた。岩角、松、松には藤が咲き、巖膚には、つゝじ、山吹を鏝めて、御佛の紫摩黄金、鬼の舌、また僧の

袈裟、また將軍の緋緘の如く、ちら／＼と水に映つた。

「此處も海ではなかつたか――いまの松島の、……此の巖は、一つ一つ、あの島のやうに――」

一方は、ひしや／＼とした、何處までも蘆原で、きよつ／＼、きよつ／＼、と蘆一むらつ、順に、ばら／＼と、又飛

飛に、行々子が鳴きしきつた。

それから、しばらくは、まばらにも蘆のある處には、皆行々子が鳴いて居た――

こゝに、蛙の鳴くやうに……

まだ、其の頃は、海ある方に雲の切れた、薄青い空があつた。それさへいまは夢のやうである。

園は、行々子の鳴く音におくられつ、蛙の聲に迎へられたやうな氣がした。

……水鶏が走るか、さら／＼と、ソレまた小溝が動く。……動きながら其の静寂さ。

唯、遠くに、行々子が鳴きしきつて、こゝに蛙がすだく――其の間を、わあ――とつないで、屋根も門も見えないで、

あの、遅櫻の山のうらあたり、學校の生徒の、一齊に讀本の音讀を合す聲。

園は心も氣も憎と成つた。

「あゝ、車夫。」

酷い道だ。

「降りよう、――降りよう。」

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

「何、旦那、大丈夫で、昨日も此處を通つたね、馴れてるだよ。」

「いや、昨日も、はら／＼したつけが、まだ濡れて居たから、輪をくつて、お前さんが挽きにくいまでも、まだ可かつた。泥濘が薬研のやうに乾いたんぢやあ、大變だ。轉んだ處で怪我もしまいが、……此の咲いてる花に極が悪い。」
道のゆく手には、藁屋が小さく、ゆる／＼蜿る路に顯れた背戸に、牡丹を植ゑたのが、あの時の、子爵夫人のやうに遙に覗いて見えた。

「は、旦那、御風流だ。」

それから、歩行きながら、

「東京から來らつしやる方は、誰方も花がお好きだアなあ。」

「いろんな可愛いのが、路傍に咲いて居るんだ。誰だつて悪くはあるまい。」

「此人方等は、實の成る奴か、食へるんでなくつては、黄色いのも、青いのも、小さいものを、何にすべいよ。」
と笑つた。が、ふと、汗ばんだ緒ら顔の、元氣らしい、若いのが、唇をしめて……眞顔に成つて、

「然うだ、然うだ、思ひつめた。旦那、あなた様、とこなつと言ふ草は知つてるだかね。」
「常夏。」

「それよ。」

「撫子の事ぢやあないか。」

「それよ——矢張り……然うだ——忘れもしねえ。……矢張り同じやうな事を言はしつけが、私等にや其の撫子が早や分んねえだ。——何ね、今から、二三年、然うだねえ、彼れこれ四年には成るすらか。東京から來なかつたな、そりや、何うも容子たら、容色たら、そりや何うも美しい若い奥様がな。」

「一人かい。」

「へ、い、お二人づれで。——旦那様は、洋服で、それ、繪を描く方が、こゝへぶら下けておいでなさる、あの器械を持つて在らしつけえ。——忘れもしねえだ、若奥様は、綺麗な縫の肩掛を手を持つてよ。紫が／＼つた黒い處へ、一面に、はい、櫻の花びらのちら／＼かゝつた、コートをめしてな。」
園はゾツとした。

「丁ど今頃だ——それ／＼、それよ矢張り此の道だ。……私と忠藏がお供でやしたが、若奥様がね、瑞巖寺の欄間に舞つてる、迦陵嚩伽と云ふ聲でや、

——あの夏になると、此の邊に常夏が澤山咲きませうね——
へい、其の常夏を知らねえだ。

——まあ、撫子の事なんだよ——

其のさ、撫子を知らねえだ。私は汗を流したでなあ。……折があつたら、誰方ぞ、聞かう聞かう思つて、因果と因縁で三年経つたよ。旦那、花がお好きだで、な、どんな草葉だかこゝ等にあつたら、一寸つままで教へてくらせえ。」

「淡紅色の、優しい花だが此の邊には屹とあるね、あるに違ひない。葉だけでも私にも分るだらう。」
と、のつか／＼つた勢で、溝を越さうとして、

「お待ち。」

園は、つと俤に寄つた。

バスケットを開けて、其の花が、色のまゝ染まつた、衣繪さんの友染を、と思つた……其時である。車夫が、

と口を開けて、にやりとして、

「へ、へ、轉ぶと、そこらの花に恥かしい。……うつ、へ、へ、御尤もだ。旦那は目が早いだやあ。」

「へ、へ、私あまた、眞個の草葉の花かと思つた、」

「何だよ……」

「なんだよつて、へ、へ、へ。そこな、酸模草、蚊帳釣草の彼方に、きれいな花が、へ、へ、花が、うつむいて、草を摘んで居なさるだ。」

「え。」

「や——旦那、——旦那でがせう。其方を見ながら。招かつしやるは。」

「これ。」

「や、私で、——へい、私で。」

と、きよろりとしながら、

「へい、へい。」

俵を横に、つかくと、田の畔へ、挽いて垂掛けると、白い陽に、影もなく、ほんと立つて、ぺこくと叩頭をした。

「へい、其が、へい、成程、其が、常夏で、へい。」

とまた叩頭をした。が、ゑみわれるやうに、得もいはれぬ、成佛しさうな笑顔を向けて、

「旦那、旦那、旦那……」

「何。」

「あなた様にも、御覽なせえと……若奥様が。」

園は、魂も心も宙を踏んで衝と寄つた。

空に一輪、蕾を添へて、咲いたやうに、其の常夏の花を手にした、細りと白い手と、櫻ぢらしの紫紺のコート。

「衣繪さん……」

品のいゝ、藤紫の鹿子切の、圓鬘つややかな顔を見た時。

「ぎやッ。」

と喚くと、梶棒をたゞき投げて、車夫は雲雀と十文字に飛んで遁けた。

寂寞と成る。蛙の聲の小やんだ間を、何と、園は、はすみでころがり出した袷紗の銀の鍋に、靈と知りつゝ、其の靈の常夏の花をうけようとした。

然り、銀の鼎を捧げた時、園は聖僧の如く、身も心も清しかつた。

襟をあとへ、常夏を指で少し引いて、きやしやな撫肩をや、斜に成つたと思ふと、衣繪さんの顔は、睫を濃く、凝然と

祝ながら片手を頬に打招く。……撓ふ、白き指先から、月のやうな影が流れた。

寄らうとすると、其の手も映る、襦も映る、裳に眞蒼な水がある。

また招くの、ためらふと、薄雲のさすやうに、面に爛と氣色ばんで、常夏をハツと銀の鍋に投げて寄越した。

其の花の影も映つた。が、いまは、水も火もと思つた。

「御免なされや。」

背中に、むつとして、いきれたやうな可厭な聲。此は、と視ると、すれ違つて、通り状に振向いたのは、眞夜中の雨に

饅頭を食つた、髪の毛の一筋ならびの、唇の爛れたあの順禮である。

見る端に、前歯の抜けた、汚い口でニヤリとした。

車夫が、其の道を、小さく成つて、遁ける、遁ける。

はや、幻影は消えつゝ、園は目の前に、一座、藤つゝじを鏤めた、大巖の根に、藍の如き水に臨んで、足は、めぐらし

た柵を越えたのを見出した。

杵（キネ）が池と言ふ、人を取る水よ、と後に聞く。

衣繪さんに、其の稱の似通ふそれより、尙ほ、なつかしく、涙くまるゝは、銀の鍋を見れば、いつも、常夏の影がさながら植ゑたやうに咲くのである。

身延の鶯

馬車が行き、俥が行く。上りも下りも、日盛に、がたくぐらく、馬ながら、輪ながら、暑さに酔つて踰越して行く。陽はじん／＼と灼けて、草いきれの路は煙砂が光る。——名に負ふ富士川が赤く濁つて、水嵩のどう／＼と増した、雨霽りの折からとて、道程、其富士川の渡船場から四十八町と云ふ、身延の本山までは、田畑に沿ひ、崖に沿ひ、處々絶崖の急流に臨みつゝも、陰のない街道を、鐵の箒で掃立てるやうな馬車、俥に、埃は然まで立たないが、曲んだり、崩れたり、がつくりと窪んだり、道悪の境地を、どしんと揺上げ揺下し、ぐらく／＼と引傾く。俥さへ、かはるのは漸とぐらるで、馬車となると、遠くから足場の聊かでも餘裕のある處を見計らつて、一方の來て行違ふのを待たなければならぬ。此處の習慣として、どんな場合でも、渡の方から靈場へ向つて上る方が、皆乗ものを待たせられる、下りで歸る方は、時間の都合があつて、後れると汽車との聯絡が取れないから、然うした約束があるのださうである。

で、來るのをかはらせて待つ方は、車體を片よせたぐらるでは道が狭いから間に合はない、自棄に何處でも乗開いて、ガタリと片輪を突込むから、水溜では、バツと湯玉のやうな繁吹を跳上げる、其たびに馬車はどしんと躍上つて、——六人乗でぎつしりだが——氣の弱い女などは腰掛を迂り落ちて俯伏せになつて、きやつと云ふ騒ぎである。御者は、と見ると、引傾つたとは反對の方へ、背を曲けて、頭をぶら下げたやうに横斜達にぐたりとなる、喘いで續く俥が、突戻された形にガツキと留まる。梶を持堪へた焦たやうな拳から、腕から、垂々と汗が流れる。

處を、すれ／＼に通過ぎる。……本山の方からは下りが、それでも馬も人もぐたく／＼にだらけながら、影ばかりは掌ほどに縮まつて抜けて行く。

往つたり、來たり、こんなのが幾組も隨所に目に着く。其の間々を、莫産、笠、または手甲、脚絆で、道者、行者と云つたのが、金剛杖をついたり、團扇を腰にさしたりで、

早に負けた、夕立雲の断片のやうに、ふらふらと草いきれに漂ひ行く。
いや、何うも暑い。

尤も山國の事である。巖の根を溢れるばかり、小流の馳る處もある。目の下に碧い水の白く瀾る川へも乗出す。乗通る。
……然れば、靱草の藤紫、濃い常夏が紅く咲き、野萩に交つてはつと姥百合のふくらんだ、山懐、山の腰をも時々は傳ふのであるが、溪河の流に、其の草の色が映るのさへ、汗の滲んだ目には、宛如、裏長屋の物干から、餘所の土用干の友染を、ちらりと覗くやうなものである。

「はッ、はッ。」
ともすれば、

「うゝ。」

と呻くやうに、溜息を吐きながら、此の炎天を歩行く男がある。
焦茶色になつた麥藁帽子を、目を除ける勢もなく、仰向けに被つた下から、髪を長くして居るのであらう、ねばつた毛を、耳にも額にもだらりと掛けた、づんぐり肥つた、年紀は廿六七の……

二

洗ざらしの紺緋の單衣に、薄汚れたセル袴を穿き、股立を取つたが、太脛がだぶりとして變に黄んで、何うやら、脚氣で、もあるらしいのに、じとくした紺足袋は、お定りと言つても可からう。
鼻緒の緩んだ薩摩下駄を引摺つたが、袴腰に手拭を提げて居る、と雑と並べたあとへは、些と飛離れるやうだけれど、墨給の蘭に、何やら題字のある扇子を片手に、襟を寛げて、絶えずのろくと煽きながら、歩行きながら、半ば眠るやうに其の手が留まると、

「はッ。」

と云ふ溜息。で、其の毎に、腰の手拭を抜いて、よれよれの蛇の死骸のやうな奴で、ほたくと滲み出す額の汗を横に扱いて、

「うゝ。」と、唸ると、髪の毛がだらりと又下る。
チョツ、チョツ、端を張つて、真中を引扱いて、向顔巻でもすればだのに、矢張りのろくと下駄を引摺る。

「はッ。」

と溜息して、

「うゝ。」と唸る。

そよとの風もない。

最上此の上は、蟹ほどの山蟻でも這出さず、早田の割目から蚯蚓が昇天でもしない分には、おなじ男が、おなじ道を、おなじ事をして行くより、何うにも書きやうがなくなつた、

真蒼な蔭が出来た。さして大きくはないが、五七本、杉樹立の暗い根を、爪尖を洗ふばかり石ころに打撞つて、颯と鳴つて、路傍を一條の流れが馳る處である、

杉の中には白壁が透いて、突端の其の幹のはづれに、薬屋の襦が出て、眞赤な鳳仙花と、おいらん草の咲いた背戸が見える。道は、其處から急角度で一曲りする處に、瀧を瀧ぐやうな谿河が覗かれる。

透して視れば、水面は目の前に高く浮くが、臨めば、足の震ふやうな絶壁の底を、巖を裂く激流である。来るまでも、怒うした景色に二三ヶ所出會つた。が、岸からでは、晝顔の蔓をありつたけ伸しても濡すだけの手も届くまい。却つて渴を増すばかりだつたから、